
あたし

美月 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたし

【Nコード】

N8267D

【作者名】

美月 純

【あらすじ】

『絶対に夢をあきらめない』様々な男たちとの出会いと数々のアンダーグラウンドの世界に浸りながら、夢を叶えるために必死で生きる少女神子の物語

エピソード0：プロローグ（前書き）

やや性的な表現があります。苦手な方はご遠慮ください。

エピソード0：プロローグ

“あたし”は誰？

いったい…：どれがホンモノの“あたし”なの？…：もう…：わからなくなっちゃった…

エピソード1：神子（ミコ）

《高3です、受験や学校のことので悩みが尽きないんですけど…将来には夢があつて、そのためにお金が必要で… こういうの初めてでよくわからないんですけど、お金は相談でいいです。あたしに興味もってくれたらお返事ください。かしこ《と。》

『こんなもんかな。ほんとにこんなサイトでメールが来て援交とかできるのかな？』

援交は初めてではないが、このサイトを使つての募集（？）は初めてだった。

あたしは葵神子。^{アオイミコ}

イマドキ神の子なんてちょっと流行^{はや}らない名前だけど、母親が昔巫女^{みこ}をやつていて

（といつても正月のアルバイトだが）神仏にあやかつた名前だと聞かされた。

あたし自身は「ミコ」という読み方は気に入っている。

それと、あたしには夢がある。

本気で歌手、いやアーティストになつてみんなにあたしの歌を聴いてもらいたい。歌で自分を表現したいって考えている。

でも、見た目にはコンプレックスがある。

目が悪くてずっと眼鏡だったけど、高2の時コンタクトに替えた。でも、一重^{ひつえ}なのは治らないから、ずっとアイプチしてる。

高2で初めて会つた友達^{ふたえ}はあたしが二重だと思つてるコもいるみ

ただいだけど、中学からの同級生とかはわかっちゃってる。

本当はそれが嫌で嫌でたまらない。

あたしは変わる、変わる。

それにもっとやせる。身長は158センチ、ほんとは165、いや170でもよかつたくらい背がほしかった。

これでも、中学3年のときローティーン向けのファッション雑誌に読者モデルとして出たこともある。

もつともそのころは体重が43キロと細かったからだけど・・・。高2の頃から急に太りだした。同時に学校も休みがちになった。

ストレス。

自分でもよくわからないけど、学校や友達が怖かった。

前の夜までは『学校にいこう』って思うんだけど、朝になると急に体が重くなる。

母親にはただ、『だらだらしてないで早く行きなさい』と言われるだけだし、

父親は『たるんでるからだ』と全く取り合わない。

自分でも原因がわからないから反抗のしようもない。

いつも10時頃家を出て、電車に乗るんだけど、ひどい時は一日総武線の各停で千葉と三鷹の間を往復してたことも一度じゃない。

彼氏もいた。

25歳のフリーターで、彼氏の家へ行くとセックスしていた。

初めての男。

高1の終わり頃ネットで知り合った友達の話だった。
家に行くといつもゲームをしていて、フリーターといってもほとんど仕事はしていない。

コンビニで買った弁当を食べて、あたしを抱いて、またゲームをしていた。

それでもそこを離れる気にはならなかった。

会話なんてほとんどなかったし、すごく不安だったけど、ただ淋しかった。

独りになるのがたまらなく嫌だった。

彼氏の家に泊まった次の日はいつも父親の罵声が飛んだ。

母親は、かばうこともできずただオロオロするだけで『神子、謝りなさい。父さんに謝りなさい。』というだけだった。

あたしはただ黙ってた。嵐が通り過ぎるのを待っていた。

愛情の裏返しで叱ってくれるならあたしも応えただろう。

でも、愛情なんてあるわけがない。

だって、本当の『父親』ではないのだから。

そのことを知ったのも確か高1の終わり頃だった気がする。

あたしは一人っ子、独りでいることは苦にはならなかった。

中学までは母親も外で働いていたので学校から帰っていつも夜中まで独りだった。

食事もほとんど独りで食べてたし、やらなきゃならないこともたくさんあったから。

これでも中学までは優等生だった。

生徒会の副会長もしていたし、プラスバンド部では副部長だった。

ピアノも習っていたし、中3の受験勉強を始める前までは日舞も習ってた。

天才ではないとわかっていたんで人一倍努力もして成績も常に上位につけていた。

おかげで高校は県立の進学校に入学できた。

でも、高校に入って1年してから『自分がしてきたことの意味がわからなくなってきた』

アーティストになりたいって思ったのはもつとずっと前、

たぶん幼稚園の頃から人前で何か目立つことをするのが大好きだったから。

小学校5、6年では演劇部にも入って発表劇では主役も務めた。

たぶんその頃からだったと思う。

歌は母親が好きで小さい頃はよく家族でカラオケにもいった。

子どものくせにあたしは歌謡曲みたいなものばかり歌っていてよく『うまい』と褒められた。

そう、ずっと褒められたかった。

母親からも父親からも先生からも。

褒められたかった。認めてほしかった。その一心で努力をしていた。

でも、切れた。

それが高2の頃。

フリーターの彼氏とはその頃別れた。

やっぱり彼にとって、あたしはただのセックスの道具でしかなかったことに気づいたからだ。

それ以来だろう、あたしの中でセックスという行為になんの価値も見出せなくなったのは。

男の欲望を満たす道具、金になること。ただそれだけだった。

だから援交を始めた。

本当に世の中の男は『女子高生』っていうブランドに目がないらしい。

もつとも今は『女子中学生』の時代みただけど、あたしが援交を始めた頃は本当に女子高生がもてはやされた。

街に溢れてるミニスカートを見ればやりたくなる衝動も理解できる。

需要と供給のバランスが取れているのだから、これだってりっぱな経済活動だ。

市場があつてモノが売れる。

あたしは『モノ』。

いろんな男があたしを買った。

意外だったのは優しい人が多かった。

中には変態親父や騙されたこともあった。

酷かったのは『10万やる』って言われてビデオを撮られて、コインロッカーに金があるって言われて鍵をもらってあけてみたら札束は新聞紙に変わっていた。

誰かとグルだったんだろう。最初は確かに封筒に10万円が入っていてそれをコインロッカーにしまつところまでは見たのだから。

悔しかった。涙が出た。
ビデオに撮られたことより、人に裏切られたことがすごく嫌だった。

でも、不思議と他の人は優しかった。あたしがアーティストになりたいって夢をちゃんと聞いてくれたり、

約束では3万だったのに、身の上話をしただけで4万くれた人もいた。

相手はたいいてい30代の男が多い。

50代も一人相手をしたけどさすがにきつかった。

生理的に匂いが駄目だった。

30代の男は結構好きだったから、そんなに苦痛ではなかった。

中には遠くから出張で東京に出て来る度に連絡をくれて定期的に会う男もいた。

あたしの何が入ったのか、わからなかったけど、ただセックスをするだけではなく、一日連れまわされていわゆる『デート』もした。

別に手をつなぐわけでもなく、あたしはその人にはいつも敬語だったし、本当に何が楽しくて連れまわすのか理解できなかった。

でも、やることはしつかりやった。その人は少しオタクっぽくってデジカメであたしに制服を持ってこさせて写真を撮ったりした。

あたしは写真を撮られたりビデオを撮られたりすることが好きだったからそのこと自体は嫌ではなかったが、その写真をどうしていたのか不思議だった。

一応奥さんも子どももいる男だったから、見つかったらどうするつもりなのだろうと思った。

もっとも別にその後のことに関心はなかったからどうでもよかつ

ただのだけど。

援交でどれくらい稼いだんだろう、本当は夢のために貯めるべきなんだろうけど、つい使ってしまう。

服が好きだから、金が入ると見境なく買ってしまふ。

ヒスやオゾンの服がお気に入りだったけど高かったから金が入ると店にいつてしまつて衝動買いをしてしまう。

でも、不思議と後悔はない。服に金を使うことはかえってストレスの解消にもなるし、それで財布がカラになつても平気でいられた。

金のない時は古着を漁^{あひ}つた。でも、古着も好きだったから別に気にしてはいなかった。

外見に自信がなかったから着飾るのが好きだったのかもしれない。

友達に着ている服を褒められるのもうれしかった。

「センスがいい」とか言われると口では「そんなことないよ。」とか言いながら密かに喜んでいた。

見栄っ張りだったのかもしれない。いつも誰かに見られてないと、注目されてないと孤独感を感じた。

だから、変わった服を着ることでみんなに見てもらいたかったのかもしれない。

アーティストになりたいのもそんな虚栄心からかもしれない。

でも本当に歌は好きだった。

ずっとバンドをやりたくて中学の頃からメンバー募集をしたり、ライブハウスの掲示板に出したりしたけど、うまくいかなかった。

一時ネットで知り合った人と意気投合してバンドを作ることができた。

元々ギターをやっていた彼が友達の楽器のできる人間を集めてく

れて、あたしがギターボーカルで練習に入った。

でも、彼は大学生、友達はフリーターと環境も違っていたため3回ほどスタジオに入ったきり、練習の日程が合わず自然消滅してしまった。

その後も何度かバンドを組もうと努力したけど駄目だった。

高校に入っしてしばらくして幼稚園からの幼馴染のコと路上で歌ったりした。

フォークギター二本で毎週金曜の夜に船橋の駅前とかに繰り出して遅くまで歌った。

中には定期的に見に来てくれる女子高生なんかが出てきたけど、これも幼馴染のバイトが忙しくなってやれなくなった。

そういうストレスのせいか、太りだしたのはその頃だ。

ちょうど高2の夏休み頃、急に太りだして体重が60キロを超えた。

今その頃の写真を見ても明らかに別人だ。

ちょうど学校では修学旅行があったりして、今でも卒業アルバムにはその頃の『醜いあたし』が残っている。

急に過食になった。

中学時代にも同じようなことがあった。その時は両親のいない淋しさを紛らわすためだった。

でも、この時は『自分が嫌い』だった。

何かしたいのに何もできない自分が許せなかった。

食べる以外にストレスを発散する場がなかった。

食べているときだけ充実感があった。幸せだった。

高3になって今度は痩せ始めた。

自分でもわからないが、援交を始めて相手がかっかりする姿を見

て悲しくなつたからかもしれない。

徐々に食べなくなつた。

お金が入ることとお金を使うことで発散したからだろう。

生来の見栄っ張りや援交相手にも『きれいに見られたい』という気持ちがあつたのかもしれない。

今は中学時代ほどではないが45キロ前後に収まっている。

その頃、新しい彼氏もできた。

これもやっぱりサイトで知り合ったけど、その人とやり取りをしたのは援交が目的ではなかった。

いわゆるご近所さんのHPに自分のプロフィールを載せて気に入った人からメールが入るやつだ。

その人とは音楽の趣味が合った。BUMPや林檎が好きだつてとこからグランジ系やハードコアに至るまで、その人はよく音楽を聴いていた。

おまけにベースをやっているらしかった。

何度かやり取りをしているうちに会うことになった。

実はその時は別に好きな人がいた。というよりセックスフレンドだった。

二十三歳のフリーターだったが、本当に好きだった。

でも、彼には彼女がいてそのコから離れられないと言った。

あたしのことは好きだと言ってくれた。

でも、嘘だった。

やっぱりセックスの道具。やり終えて満足したらすぐにあたしから離れた。結局は騙されていた。

そんな時に彼に会った。そのセックスフレンドの話もした。

彼は理解を示してくれた。一緒に映画も見た。少しだけときめいた気がした。

3回目のデートの時、コクられた。
あたしは「はい。」と返事をした。

その人は優しくかった。大切にもしてくれた。

でも、どこか頼りないところがあつた。まだ大学生だから仕方ないけど、あたしを引つ張っていつてくれる強引さがなかつた。

デートでも何を食べたいとか、どこに行きたいとか全部あたしに決めさせた。

おまけに大学生のくせにバイトもしていなかったから金がなかつた。

家は金持ちらしいから自分が欲しいものは買ってもらっていたみたいだけど、デート代は割り勘がほとんどだった。

それがたまらなく嫌だった。あたしが変なのだろうか。

あたしは小さい頃から金に対して異様に執着心があつた。

義理の父親が事業に失敗しておまけに保証人が何かになつていて家に借金取りが毎日のように来ていた時期があつた。

幼い頃に母にいつも「お金あるよね。大丈夫だよね。」と聞いていたことを覚えている。

そのせいだろう、自分の得た金を人のために使うことが凄く嫌だった。

例えばデート代の割り勘でも使つたあとにもものすごい後悔の念が湧いた。

もちろん彼氏にはそんなことは言えなかつた。

中学までは自分から発言をする子だったのに今は自分の意見は極

力押し殺している。

他人に自分がどう思われるかが気になりだしてから、なるべく自分を押し殺して存在を希薄にした。

特にそれほど親しくもない友達の中にいるときはずっと黙って、周りに合わせて笑ったり、相槌あいつちを打ったりしていた。

金のこともあって彼氏とはホテルにも行けず、カラオケボックスや彼の自宅（といっても彼の親兄弟がいないとき）がセックスの場所だった。

でも、セックスと言っても何故か彼は入れたがらなかった。生で挿入することを異常に恐れた。

そのかわりあたしの身体を触るのが好きだった。

一日中でもあたしの胸やおなかやお尻をさわっては「神子は可愛い」とつぶやいていた。

もちろん、彼が出来てからも援交はやめなかった。

そして、ついにそれが彼氏にばれた。さすがに今度は理解してくれなかった。

最後に会ったときの彼氏の「汚いものをみるような目」は今でもはつきり覚えている。

この時、もう普通の恋愛なんてできないと自覚した。

エピソード2：雅紀（マサキ）

『ピッ』

メールサインだ。

「ん、あっ、援交サイトからだ。」

最近のサイトは便利なものだ。

あたしが載せた掲示板を見て相手はあたしに直接メールを出してくる。

でもあたしはサイト上で返事を出す、そうすることで、こちらのアドレスはわからず、気に入らない時は返事を出さなければこちらの情報は何一つ伝わらない。

もちろん、相手がどこの誰なのかもわからないが、数をこなしていくうちにメールの文章でよい人が悪い人（あくまであたしの基準だが）がわかるようになっていた。

「ん、なになに、30歳独身かあ、若いのに援交すんのか、彼女いないんだ、よつぼどブサイクなのかなあ。『さくらちゃん（あたしのHN）の趣味は？』かあ、まあ音楽と答えておくかな。ん、千葉在住か、近いな。肝心の援交のこと書いてないなあ。やる気あんのか？この人は・・・」

一応返事を書いておいた。こっちから援交のことを切り出した。

次の日返事が来た。

「へーこの人もバンドやってたんだ。林檎好きってか、合わせてるのかな。まあいいや、ん？お金は3万か、悪くはないな。若いけど大丈夫なのかな。でも、文章的に優しそうな人ではあるな。会うこ

とにするか。えっと…」

再び返事が来た。

「来週の土曜日か、時間は合わせるかあ、どうすっかな。時間はあ
るけど午前中がいいかな。でもあんまり暇そ^なうだと嘗^なめられるから。
『ちよつと午後は友達と約束があるんで午前中10時くらいでどう
ですか？場所は市川の駅前、あたしは今赤い髪をしていますからす
ぐわかると思いますが』とこれで出方を待つかな。」

高2の頃から髪を染めていた。最初はお決まりの茶髪、徐々に色
を抜いていって、かなりキンパに近くなった。

一応あたしの高校は進学校だったからさすがに教師に注意された。
担任の教師はちよつと“憧れ”だったから、その教師に嫌われる
のは嫌だったので、次の日から黒く染めなおした。

でも、ちよつと夏休みも近いので再び染めようと思い美容室の人
に赤を勧められてその気になって赤くした。

街を歩くとさすがにみんな振り返る。ビジュアル系のバンドの追
っかけと思われてたかも知れない。

土曜日になった。朝から少し小雨がぱらついていただけ、止む方
向だから、大丈夫だろう。

化粧にとまどった。実は学校の遅刻の原因はこの化粧にもあった。
アイプチが決まらないと何度でもやり直した。

二重^{ふたえ}の幅が思った通りにならないと絶対に外へは出たくなかった。

その日もちよつと決まっていたのが10時10分前、駅までチャリを飛
ばしても10分はかかるからぎりぎりだ。

急いで服を着てチャリにまたがった。

小雨がウザかったが、必死に漕いだ。

駅に着いたときは10時を少し回っていた。
周りを見渡したが、それらしき人はいない。
10分待った。

いない。

声をかけてくるのはキャッチセールスとナンパばかりだった。
赤髪も人目を引くので、さすがにジツと待っているのが辛くなっ
たから、あきらめて15分過ぎに家に帰った。
バツくれられたか、来たけどこの赤髪を見て引いたのかも、と思
った。

でも、何か急用かもしれないと思い、念のためもう一度だけサイ
トにメールを出した。
今までの援交でも何度かバツくれられたことはあった。

実は^{すこ}凄く傷ついた。

相手はあたしを見て汚いと思ったのではないか。
ブスだから声をかけられなかったのでは？ずっとそういう思いを
感じて、バツくれられると^{へこ}凄く凹んだ。

一日空いてその人から返事が来た。

《この前は行ったけど、会えなかったね。赤髪の人、探したけど
わからなかったよ。

10時10分前から10分過ぎまでいたんだけど…ごめんね。嫌
われちゃったかと思って帰ってきちゃったよ。》

あたしが駅に着いたのは10時を5分ほど過ぎていた。

駅の近くのダイエーの前っていったから場所はわかったと思うが、どこかですれ違っているはずの時間だ。

嘘をついているのか、でも、もしかするとあたしがいたのはダイエーの南側だったから、西側にいたのかもしれない。

あまり動くのはよくないと思ってジッとそこに待ったのが失敗だったか……。

とにかく返事を書いた。

次の日きちんと返事が来た。

《そうなんだ？じゃあ、待ち合わせてた場所がずれちゃったのかな。もう少し待てばよかったよ。ごめんね。もうチャンスはないよね？》

『もうチャンスはないよね？』か、ちょっとその言葉に惹かれた。

あたしを欲しているという言葉だ。

あたしは求められることには応えたい主義だ。

もちろんお金以外だけ……。

《そんなことないですよ。来週の予定はどうですか？金曜日はいかがですか？もしよろしければ今度は夜にしませんか。

あと念のため、あたしの携帯のアドレス送ります。携帯の方で返事ください。》

我ながら積極的だと思った。

たいてい携帯は会った後にアドレスを教えて、次の時の備えにするのだが、今回は何故か会う前に送った。

さっそく次の日に返事が携帯に来た。

さらにあたしは

《顔がわからないと困るでしょうから、写メ送りますね》

とって写真を送っておいた。

顔を見て嫌われたらどうしよう。と内心思ったが、すぐに返事と共にその人の写メまで届いた。

ちょっとうれしかった。

メールには『さくらちゃん、かわいいね』と書かれていた。

その人の顔も優しそうだった。

眼鏡をかけて少し逆光のせいかはつきりは見えなかったが、スーツを着ていたようだ。

真面目そうな感じだ。生理的に嫌なタイプではなかった。

金曜日、6時を回った頃、総武線に乗って千葉に向った。

この前は市川に来てもらったのでお返しにあたしが千葉まで行くことにした。

その方が確実に会える気がした。何の根拠もないのだけれど…

待ち合わせは7時、駅のロータリーで会うことになっていた。

あたしはオゾンのジャージにヒスのデニムパンツを履いていた。

髪は結ばずにストレートで横分けをして少し大人っぽくしていた。その姿も写メで送ったので今度こそ間違いはないだろう。

7時少し前に『さくらちゃん？』と声をかけられた。

振り向くとその人はそこにいた。

写メよりは若い感じがした。

スーツ姿でちょっと大人を感じさせたが、話す感じも嫌ではなか

った。

頭の良さそうな人だった。

「とりあえず食事にも行こうか？まだ、食べてないよね？」

「はい。」

またあたしの悪い癖だ。

人見知りする。

中学まではそんなことなかったのに、心を閉ざし始めてから、どうしても自分から言葉が出ない。

せつかく相手が心を開いてくれてもどう応えてよいかわからない。その人が『食事』と言ってくれているのに愛想のいい返事が出来ない。

「さくらちゃん、えっと・・・さくらちゃんでもいいかな。俺は雅紀まひき、本名だから・・・。」

彼の車に乗って幕張方面へ出向いた。

帰りは送ると行っていたから方向もそちらを選んだのだろう。

「何か食べたいものある？」

「えっ？特には・・・。」

また愛想のない返事をしてしまった。

妙に緊張する。

今までの援交でも緊張はしていたが、生理的に嫌だったり、ちょっと怖い感じがあったからだったが、

彼には怖さも嫌な感じもなかったがどうしても気軽に言葉が出な

かった。

「緊張してる？そりゃそうだよ。一応援交だもんな。緊張するよね。どう？俺、嫌なタイプ？」

「そ、そんなことはありません。全然いいです。」

「全然いい、か、ははは、好みのタイプってわけじゃないよね。」
「いいえ、そんなことないです。眼鏡かけてる人好きなんです。」

「あははは、眼鏡かあ、そりゃ俺自身より眼鏡かけてればいいことかなあ。」

また、馬鹿なことを言った。

タイプと聞かれて眼鏡を褒めてもしょうがない。

冷静になれば『馬鹿にしてるのか』って思われても仕方ない。

嫌われたかも……。

「俺は、さくらちゃん、好みのタイプだよ。可愛いし、シャイな感じが好きだな。」

「ほんとですか？あたしなんてブスだしスタイルも悪いし、おまけにちゃんとしやべれないし……。」

「そんなことないよ。可愛いって、十分自信もっていいよ。俺は好みだからね。」

「ほんとに？」

「ほんとだよ。あつ、そうだアーティスト志望だよ。歌、唄うんだっけ、あとでカラオケいこうか？歌聴かせてよ。」

その言葉で急に緊張が解けた。

この人は本当にあたしを気に入ってくれている。

おまけに歌を唄って聴かせてほしいと言ってくれた。

単純だがその言葉があたしを救ってくれた。

それからあとは食事中も会話がはずんだ。

ファミレスでの食事だったが、たくさん食べても喜んでくれるし、周りの客はあたしの赤髪を見て引いていた気がしたけどその人は全然気にしたそぶりもなく、普通に接してくれた。

さらにはこの赤髪を『似合う』と褒めてくれた。

久しぶりに心が開放された気がした。

彼氏の前でも見せないような笑顔をその人の前でしていた。

カラオケにいった唄った時にはその人は本当に感動してくれたよ
うだった。

「さくらちゃん、いけるよ、アーティスト、俺もアマチュアだけど
バンドやってたし、これでもオーディションも受けていいセンいっ
ただぜ。その俺の目から見てもうまいよ。ほんとお世辞じゃなく
なれるよ。アーティストに。」

嬉しかった。

何より歌を褒められることが、あたしのすべてを褒められている
ことと一緒にあったから。

いままでも援交相手とカラオケに行つて歌を聴かせたが、皆つま
いとは言ってくれてもどこか『そのあとのこと』を考えてのお世辞

にしか思えなかった。

酷い時はホテルでコトが終わった後にホテルのカラオケで歌ったから『声がうるさい』と言われそのまま唄うのをやめてしまったこともあった。

でも、この人は心の底から本音で言ってくれていると感じた。すでに時計は11時を回っていた。カラオケに3時間もいてしまった。

車の中で少し沈黙があつたあと

「どうする？ホテル行く？遅くなっちゃったけど大丈夫かな？」

「あつ、はい、大丈夫です。」

「でも、おうちの人の心配しない？だって女子高生だもんね。明日は土曜だけど帰らないわけにはいかないでしょ？」

「……………」

「だよな…よし！今日はそのまま送るよ。ホテルはやめよう！」

「えっ？」

「やっぱりおうちに帰ったほうがいいよ。市川まで送るから。家の近くまで行くから場所教えて。」

「あつ、でも……………」

「いいよ。気にしないで、一応一緒に食事してくれて、カラオケもしてくれたから援交は成立だよ。あとでお金も渡すから安心して。」

ちょっと驚いた。

今までの人は優しいそぶりでも最後はコトに及んだ。
セックスなしで金を払うなんて言った人はいなかった。
もっとも、まだもらってないから嘘かもしれないけど。
この人の言い方はどこか信じられた。

家の近くまで来て車を止めてくれた。

「ほんとに近い？遠慮要らないよ。ああ、でも自宅を知られたくないかな？」

「えっ、そんなことはありません。ほんとに近くなんです。そこ渡つたらすぐなんです。」

「はは、いいよ。さくらちゃんは可愛いね。疑ってなんかいないよ。あっそうだ。」

そう言つてその人は財布を取り出して約束通り3万円くれた。

「あつても……。」

「いいよ。約束だから気にしないで、アーティストになるための資金に使つてね。」

ちよつと心が痛んだ。ほんとは洋服代に消えているとは言えなかった。

そのまま立ち去ればいいのに、なぜか身体が車から降りたがらなかった。

「どうしたの？おうち帰らなくていいの？」

「……。」

「ん？そうか、帰りたくない時もあるよね。じゃあ少し話そうか。」

さくらちゃんはどんなアーティストを目指してるの？」

そんなことを聞かれてまた会話が始まった。

あたしの将来の夢やそのためにどうしたいか、高校の卒業はちゃんとしたいとか、でも学校に行けてないこととか、何故かその人には素直に色々なことを話せた。

一時間近く車の中で話していた。

「もう、12時か・・・そろそろ、戻ったほうがいいよね。」

「はい。」

「さくらちゃん、俺ほんとに君を好きになりそうだよ。」

ハツとした。

その言葉を待っていたような気がした。

あたしもその人が好きになっていた。

何か感じる。

その人と会ったことは必然だったような。

一目惚れとかではないけど、何か惹かれるものがあった。

「キスしていい？」

あたしは『はい』とも『いいえ』とも言えず、ただ頷いた。

ゆっくりとその人の顔があたしに近づいてきた。

緊張はしたけど嫌悪感はなかった。

セックスは道具としか考えていなかったけど、セックスのないキ

スはどこか別に考えていた。

その人の唇がそつとあたしの唇に触れた。
その触れるか触れないかの小さな接点から体中に電気のようなものが走った。

冬の乾燥した日にドアノブでビリツとくるような、うまく表現できないけど、その感覚があたしの下半身にまで響いて、何も触られていないのに濡れてきた。

セックスでも援交では演技しかしていなかったのに、キスだけで濡れた。

ちよつとあせった。

彼氏とのキスでもここまでにはならなかった。

さらに深く唇を重ねてきた。

舌が差し込まれあたしの舌と絡んだ。

頭がボーっとして身体が溶けていくような感覚になった。

やはりその人も男なんだと思った。

次の瞬間あたしの左の乳房に彼の手が触れてきた。

でも荒々しくはなくとても優しく、でも情熱的にあたしの乳房を愛撫した。

そして、次にあたしの股間に手が及んだ。

少し身体をこわばらせたが、彼のキスで再び身体が開いた。

彼の右手があたしの一番敏感な部分をまさぐり始めた。

気が付くとパンツが下ろされてあたしの濡れた部分に直接彼の手が入ってきた。

最初はやさしく、濡れた部分の一番敏感なところを刺激された。

「あつ……。」

思わず声を上げてしまった。

たまらなく恥ずかしい。

何とか声を抑えた。

考えてみれば車の中だ。

夜中とはいえ、いつ人が来るかわからない。

そんなドキドキ感もあつて再び緊張が蘇ったため股間に力が入った。

すると彼は急に手を引きあたしから離れた。

あたしは急いでパンツのチャックをあげて身体を起こした。

「ご・ごめん、キスだけのつもりだったけど、つい……。」

本当に済まなそうにしている彼の姿を見て『可愛い』と思った。

何も言つてはあげられなかったけど、一言「大丈夫です。」と応えた。

言い方が冷たく聞こえたかも知れなかったが、彼は先ほどの冷静さを取り戻したようだった。

「とにかく今日は帰りなね。これ以上一緒にいると俺も本能が抑えられなくなるから。それほど、さくらちゃんは魅力的なんだよ。」

笑顔でそう言われた。

すごく嬉しかった。

『魅力的』なんて言われたのは初めてだった。

「また、会えるかな？」

彼が言ってくれた。

「はい、あたしも会いたいです。」

やっと素直な言葉が出せた。

「ありがとう、今日は楽しかったよ。最後は申し訳ないことしちゃったけど。」

「そんなことないです。あたしも楽しかったです。」

「さくらちゃん…。」

「あっ、あたし…。本名は神子っています。神様の子と書いてミコです。葵神子です。」

「ミコちゃんか、それも可愛いね。俺は坂下雅紀さかしたまひる、よろしくね。ミコちゃん。」

「はい、ありがとうございました。おやすみなさい。」

「おやすみ。」

車を降りたあたしはちょっとだけ彼を振り返ってすぐに家の方に駆け出した。

なんかすごく恥ずかしかった。

でも、悪い気持ちの恥ずかしさではなかった。

中学生の時、初めて異性を意識した時のような快い恥ずかしさだった。

家に帰るとすぐには寝付けなかった。

雅紀の顔がずっと脳裏に焼きついて離れなかった。

本当に恋したんだろうか？

雅紀の唇の感覚を自分の唇を触って確かめる。

まだ唇の先の方が熱い気がした。

そう思ったら急に濡れだした。

最近めつたにしたことはなかったのにその日の夜は自分を慰めた。中途半端だったから身体が求めてしまったのかもしれないと、この行為を肯定して自分の罪悪感を打ち消した。頂点まで達した後、そのまま眠りについてしまった。

次の朝、雅紀からメールがきた。

嬉しかった。

その日は学校に行けた。

でも、学校の中に入ってから急に怖くなった。

知っている人たちなのに、“この人たちはあたしを知らない” ような気がした。

2時間目の終わりに帰った。

もちろん家に帰るのではなく、またふらふらと都会の方に足が向いてしまった。

財布を確かめてみると昨日雅紀からもらった3万しか入っていない。

財布の中が少なくなると凄く不安を覚えた。

普通の女子高生なら3万もあれば多いほうかもしれない。
でもあたしには少なかった。10万くらいが入っていないと怖かった。

「ねえ、君学校もう終わったの？ちょっと遊ばない。あっ、もちろんタダとは言わないよ。」

サラリーマン風の30代後半くらいの男が声をかけてきた。
黙っていると、

「ねえ、いいだろ、何かやることなさそうだし、暇なんだろう？ちょっと付き合ってよ、悪いようにはしないからさ。」

そういうと強引にあたしの腕を取って歩き出した。

『まっ、いつか、男の言うようにどうせやることないし、財布も淋しいからちょっとお小遣い稼げば……。』
そう思って何の抵抗もせずについていった。

男は案の定ホテル街へと歩みを進めていった。
そう思っても止まる気はなかった。
どうせヤリさえすれば、金をもらってサヨウナラだろうし。

その時、メールが入った。雅紀からだった。

《何してるの？あっ学校だよな。今日は仕事が多くて大変。ミコモ授業はだるいだろうけど、がんばってね！》

急に立ち止まったあたしに足をすくわれたように男は後ろにのけぞって転びそうになった。

「な・なんだよ。急に止まるからびつくりしたじゃん。何、ここま
で来て嫌になったとかじゃないよね？」

「ごめんなさい。急用ができたの。」

そう言うのと呆然としている男をホテル街に置き去りにして元来た道を走って戻った。

後ろのほうで「おい！こら！」と叫ぶ男の声がしたが、振り返りもせずに一目散に走り出した。

渋谷の駅まで戻ったあたしはそのまま山手線に乗って、品川に出て総武線の快速に乗って市川まで戻った。

その時また雅紀からメールが来た。

《そろそろ、午後の授業は終わるのかな？テストってまだだよな。もし、よかつたらだけど、今日、晩飯でも食わない？》

『やったあ！』

心の中で叫んだ。

もちろん、顔は笑ってはいなかったが、自分の心の中の“嬉しい”という感情を久しぶりに思い出した気がした。

約束の時間には少し間があったが、もう千葉駅についていた。いったん学校から帰った振りをして家に戻って着替えた。

この前、雅紀に会った時はパンツだったから今日は思い切ってミニのスカートにしてみた。

着替えている自分が何かとても浮かれているのに気づいたが、嫌

ではなった。

“感情を出来るだけ出さない”

“周りの空気を読んで合わせる”

高校の途中からずっとそうしてきたけど、その気持ちは今でも変わらないけど、今日のあたしは少しだけ違っていた。

時間つぶしのためにスタバに入った。

キャラメルマキアートを頼んでMDの音楽を聴きながら考え事をした。

『雅紀は今日のあたしを気に入ってくれるだろうか？』
帰ってから風呂にも入って化粧もし直した。

そんなことに気づいてくれるだろうか。

期待が膨らんだが、そこでもう一人のあたしが囁いた。

“いつも裏切られるんだから期待しないほうがいいよ”

そうだ、今まで信じた人にはすべて裏切られてきた。

援交相手、彼氏、親、先生すべてあたしが期待をかけたとたんに裏切った。

初めから裏切るつもりだったのだろうけど、あたしには見抜けなかった。

馬鹿なのはあたしだということにはわかっていた。

約束の六時半に近づいてきた時メールが入った。雅紀からだ。

《ごめん、もう千葉ついているかな？少し遅れそうなんだ。七時
までには必ず行くから。今どの辺？》

『また、裏切られるのかな……。』
ふと、そんな気持ちになったが、とりあえず返信した。

《いいですよ。お仕事お疲れ様です。無理しないでくださいね。
あたしはいつまでも待ちますから。》
そう返すと再び席に着いた。

あたしはいつたい雅紀に何を期待しているんだろう。

ただの援交（正確には未遂？）で知り合った相手、年齢や名前は知っているけど、他は何も知らない。

彼女はいるんだろうか？まさか結婚しているとか？あたしのことに気に入ってはくれたみたいだけど、ただ若いし、援交相手として見るに過ぎないんだろう。

なんであたし気合い入れて化粧なんかして可愛い服なんか着てきたんだろう。

馬鹿だ、あたし…。

「おまたせ！」

雅紀が目の前にいた。

たぶんあたしの顔はものすごく暗く、醜い顔だっただろう。

やだ、こんな顔見られたくない。

そう思ったが、身体はその場に固まったように動かなかった。

「ごめんね。えっと、20分遅刻だね。かなり前から来てた？」

「ううん、今さっききたところです。」（本当は1時間以上前から

来てたくせに)

「そうなの？じゃあ、わざわざ遅らせてくれたんだ。ごめんね。おなかついたよね。何か食べたいものある？」

「あつ、えつと、何でもいいです。」

「遠慮しなくていいよ。焼肉？イタ飯？中華なんか好き？」

「あつ、じゃあ、イタ飯。」

「よし！じゃあ、場所はしょぼいけど美味しいところあるから連れてくよ。」

そういつて雅紀は立ち上がった。

つられてあたしも立ち上がると雅紀がふつとこちらを見て、

「見違えちゃったよ。今日のスタイル可愛いね。似合ってるよ。」

さりげなく言われた言葉だったが、心の中でガッツポーズをとっているあたしがいた。

食事は美味しかった。

場所はデパートのレストラン街だったけど、結構いけてた。

外へ出るとすっかり暗くなって、ちょうど公園のあたりが電飾で光ってた。

「九時かあ。何時くらいまで平気なの？」

聞かれてちよつととまどったが、

「12時くらいまでに帰れば。」

「そっか、じゃあ、帰りは車で送ってくよ。いったんうちに寄っていいかな？」

『来た！』

心の中で思った。

やっぱり“えっち”されるんだ。

家に誘われたってことはそういうことだろう。

あたしのことをどういうつもりで誘ったんだろう。

『援交なのかな？じゃあお金くれるってこと？それとも飯奢ったんだからやらせろってこと？そんなに安くはないよ。あたしは……。』
そんなことを考えて黙っている。

「あっ？誤解しないでね。急に家に誘ったみたいになっちゃって。車取りに行くのと、ちょっとスーツじゃなんだから着替えたいんだ。何なら玄関で待ってくれてもいいから。」

拍子抜けだ。

すっかり“えっち”のことを考えていたあたしは自分でも顔が熱くなっているのを感じた。

言われるまま雅紀についていった。

「ここだよ。小さなマンションだろ。独り暮らしだから部屋も汚いしね。どうする？ここで待ってる？」

返事を渋っている。

「女の子を夜道で待たせるのはまずいよな。よかったらおいでよ。襲ったりしないからさ。」

『襲つてもいいのに。』

そう思ってるあたしは少しだけ不満そうな顔をしていたかもしれない。

子ども扱いされたのが妙に引つかかったからだと思う。

「どうぞ、ごめんね。ほんと汚くて。」

確かにきれいとは言えないがあたしの部屋も似たり寄ったりだったからさほど抵抗はなかった。

「あつごめんね。万年床なんだ。よかつたらその布団の上に座って。」

部屋は8畳くらいだろうか、真ん中に布団が敷かれてあったのでそこに座るしか場所はなさそうだった。

雅紀が冷たいお茶を出してくれた。

「こんなもんしかなくて。」

やっぱりまだ落ち着かなかったが、居心地は悪くはなかった。

雅紀の部屋、壁に風景の写真が飾られている。

服はきちんとハンガーにかけられていた。

こたつ？ だろうかテーブルが一つ。

あとはパソコンがあつてなぜか、キーボードが置いてあつた。

『そういえばバンドをやっていたんだっけ？でも確かドラムって聞いたけど。』

そんなことを考えていると。

「ちよつとごめん。着替えていい？いきなり脱ぐのは失礼だけど。ちよつとあつちの台所の方に行つてもらつていいかな？」
なぜか恥ずかしそうに言う雅紀を“可愛い”と思つた。

『覗いちやおうつかな。』

そんな悪さをしてみたい気分だつた。

「ごめんね。お待たせ、いいよ、入つて。」
スーツと違つてちよつと若い感じがした。

確かにスーツの雅紀は大人を感じさせたが、私服の雅紀は子どもっぽい感じがした。
でも、悪くはなかつた。

しばらくお互いに会つた時の第一印象の話やこの一週間何をしていたなど、たわいもない話をしていたが、ふつとあたしの脳裏に『なんで雅紀はあたしなんかのことを気に入ってくれたのだろう。』という疑問が湧いてきて思わず、

「あたしのことどう思います？」
などという答えにくい疑問をぶつけてしまった。

少し困つた様子だつたが、

「神子は可愛いし、魅力的だよ。」
と言つてくれた。

内心は『お世辞』と思ひながらも嬉しかった。
「可愛い」というだけでなく、また「魅力的」と言われたのはかなり嬉しかった。

「そろそろ、行こうか、あまり遅くなるとおうちの人も心配するだ

ろろ。車出すよ。」

そう言われてあたしは、『この部屋にしばらくいたい』と思って返事をしなかった。

「ん？どうしたの？疲れちゃった？外暑かったしね。」

この言葉を幸いと「うん、ちょっと疲れた。しばらくここで休んでいい？」雅紀を試すように言った。

「うん、いいけど・・・あんまり遅くなると家の人心配しない？」

「いいの・・・家の人なんて・・・。」

「なんか家に帰りたくないわけがあるの？」

「・・・。。。」

「言いくかつたら、言わなくてもいいよ。」

「あたしの親・・・母親は本当の母親なんですけど、父親は義父なんです。」

「・・・。。。」

「だから、心配なんてしていないし、いつ帰ろうが無関心なんです。」

「そっか・・・でも、お母さんは心配するんじゃない？」

「母親は父を恐れて形だけ文句は言いますが、本当に心配なんてしていないんです。」

「そっなの？なんで父親を恐れるの？」

「暴力を振るうから。」

「酒乱？」

「なら、まだいいです。飲んでいなくても暴力はふるうんです。」

「そりゃ、最悪だな、神子も殴られたりするの？」

「昔は・・・でも、今はあたしの方が体力あるから殴り返します。」

「えっ？殴り返すの。」

しまった。

あたしは父親のことになるとすごく切れる。

もちろん、暴力なんて相手がしてこなければ返したりはしないのに、雅紀はあたしが酷い女だと思ったかもしれない。

「まあ、でも、やられたらやり返したいよね。俺だってそうするだろうし、当たり前だと思う。」

予想外だった。雅紀はあたしが「暴力女」だと思って恐れるかと思っただのに。

「神子してることは仕方のないことだよ。所詮義父なんて他人だからね。」

なんか言葉がきつく感じた。穏やかな印象の雅紀だったのに、あたしの方が少し怖いと感じた。

「あつ、ごめんね、神子の父親のこと、何も知らないのに、なんか強く言っちゃって。」

「えっ、いや、いいんです。本当のことですし、当たってますから、

他人だつてこと。」

「実はね、俺、神子に嘘ついてたんだ。」

『えっ？何？嘘？』あたしは動揺した。

でも、何が嘘か検討もつかない。

だってまだ雅紀の何が本当かも知らないのだから。

「俺ね、結婚してたんだ。歳もね、本当は37・・・37歳なんだ。子どももいる。二人もね。上は小学校5年、下は3年生だよ。」

もちろん、元妻の方について一緒に住んでるから会うことはほとんどないけどね。」

「・・・・・・・・・・。」

「離婚したのは2年前、元妻は俺が仕事で忙しくて構ってやれなかったから、淋しかったんだだろうね。浮気されたんだ。いや、本気かな。今はその男と結婚してるよ。」

話が飲み込めてきた。雅紀は自分の子どものことを考えてたんだ。

“義父”という言葉に敏感だったのはそのせいだ。

あたしの話と自分の子どものことをダブらせていたんだ。

「そうだったんですか・・・。」

「あつ、ごめんね。つまらない話して、あつ、それと幻滅したよね。歳も誤魔化してたんだから、30なんて、かなり嘘だよ。ごめんね。」

確かに嘘をつかれていたが、まったく嫌な気持ちがしなかった。むしろ今正直に全てを話してくれている雅紀がグッと身近になった気がした。

「ううん、なんか、かえってすつきりしました。でも、全然30で通じますよ。それに、私服だともっと若く見えるし。」

「ははっ、ありがとう。なんか俺もすつきりした。神子ちゃんに嘘ついてるのいやだったし、いつ話そうか考えてたんだ。」

「考えてた？」

「じゃあ、あたしとのことは遊びって思っていないってこと？」

「遊びなら嘘なんて気にならないはずだし、まさかあたしのこと本当に気に入ってくれてるの？」

「神子ちゃんは、俺のことどう思う？」

「えっ？どうって……。」

「あっ、ごめん、そんな言われても困るよね。えっと、一緒にいて違和感、感じる？年齢差とか、ギャップとかさ。」

「えっ、全然、むしろ同級生の男の子より話しやすいです。」

「ほんと？うれしいな。また、デートしてくれるかな？」

「デートという言葉に恥ずかしさを感じながらそんな表現をしてくる雅紀がまた可愛いと思ってしまった。」

「はい、喜んで。」

「ぶっ、どっかの居酒屋みたいだね。」

「ひどーい、真面目に言ったのに。」

「あはは、ごめん、ごめん、可愛いよ。神子は。」

可愛いとまた言われた。すごく嬉しかったけど恥ずかしさで顔が熱くなるのがわかった。

それから小一時間、お互いのことをもっと深く話した。
あたしの家庭のこと。

雅紀の今までの生活のこと。

どこか似ていた。

“孤独”をずっと感じていた二人が何かに惹かれるように出会った。

そんな気がした。

エピソード3：デート

雅紀と三回目のデート。

今日は朝から妙に早く起きてしまい、風呂に入った後、念入りに化粧をして、服にも一段と気合を入れた。

今日のデート場所はディズニールランド。

あたしも一応女の子だから“ディズニールランドデート”にはある種の“憧れ”を持っていた。

自宅近くまで雅紀が車で迎えに来てくれた。

「おはよう！今日は遅刻しなかったら。」

「おはようございます。はい、時間ぴったりで！」

「おっ気合入ってるな。今日の服もかわいいね！神子はセンスいいよね。」

また褒められた。服のセンスを褒められるのは一番嬉しい。

「そんなことないですよ。雅紀さんもかっこいいです」

「おっ雅紀って呼んでくれたね。でも、なんか他人行儀だね。ちよっと恥ずかしいけど、子どもの頃からマークくんって呼ばれてたからマークンでいいよ。あと、敬語もなしね。なんかさあ、敬語使われると年齢的ギャップを意識しちゃうし・・・実際ギャップはあるんだから仕方ないけどね。」

笑いながら雅紀が言った。

「あっ、ごめんなさい。」

「いやいや謝られるとかえって困っちゃうな。いいよ、普通で。」

「あっ、はい、じゃあ、マークくん、おはよう……。」

「ははは、ぎこちないね。急には無理だよな。まあぼちぼちね。」

「はい、マークくんっていじわる?」

「えっ、どうして?」

「なんか、あたしが困ってるの、楽しんでるみたいな。」

「あはっ、ばれたあ? 神子が困ってる顔、可愛いんだもん。」

「ひどーい、知らないもう!」

「あはははは。」

車の中の会話は超楽しかった。

不思議なくらい自然でいられた。

いつの間にか“敬語”も使わなくなった。

「もうすぐ着くよ。準備はOK? 何から乗ろうか?」

「カリブの海賊がいいな。」

「おっいいね。まずはゆったりと、だね。」

「うん!」

日曜日ということもあって人手はすごかった。

乗り物も人気のもものは2時間待ちがざらだった。

でも、待つことも全然苦痛じゃなかった。

雅紀と話しているだけで楽しかったし、話が尽きなかった。

「ひえ〜、やっぱりスプラッシュは2時間待ちだよ。どうする? ファ
ストパス取って別のにする?」

「そうだね。少しおなかすいたし……。」

「だね、ちよつと早めにお昼？取るうか？」

「うん、なんか食べよう！」

「おっ食べるとなると一段と元気だな。」

「いじわるう。」

なんか不思議なくらい自分が可愛くなれた。

ずっとカラを被って人と接する時はいつもどこか気持ちを離していたから、演出ではなく、自分の中にこんな「女の子らしさ」があったなんて自分でも驚いている。

昼食を取った後、少しわがままを言ってみた。

「ねえ、ちよつとエクスピアリに行きたいな。一回出ちゃだめ？」

「えっ？いいけど、なんか買い物したいの？」

「うん、折角だから、見てみたいの。」

「いいよ、OK、じゃあ、ハンコもらって一旦出よう」

うれしかった。

実は昔、最初の彼氏と一度だけデイズニーランドに来たことがあった。

その時同じように「外出」を申し出たら

「そんなの後にしようよ。エクスピアリなら、パス買わなくて来られるんだから、もつたいない。」

そう言われてものすごく落ち込んだ。

その後は乗り物に乗っても、ちつともおもしろくなく、不機嫌な顔をしていることに気づかれてケンカになり、結局夜のパレードも見ずに帰ってしまったからだ。

雅紀には余裕を感じた。やっぱり大人だからかな。

エクスピアリに行つてあっちこち見て回つたが雅紀は何一つ文

句も言わずあたしの行動に付き合ってくれた。

「ごめんね。振り回して疲れるでしょ、あたしって。」

「えっ、何言ってるの、全然、すっげー楽しいよ。むしろ俺が楽しんでるし。」

嘘でも嬉しかった。やっぱり大人の男の人はいいな。なんか安心する。

「次、あっちの店いこうよ。」

雅紀の方から言ってきた。ほんとに楽しんでるみたい。

そこは、アンティーク調のアクセの店だった。

「アクセ好き？」

「うん、最近あまりつけなくなっちゃったけど若い頃はけっこう好きでつけてたんだよ。」

「若い頃なんておやじくさーい。今でも十分若いんだからそんなこといっちゃダメだよ。」

「はい、だね。よっし、一丁アクセでもするか。」

「その言い方がおやじだよ。」

「ひどいなあ……。」

「あはは、マールくん可愛いね。」

「こらっ大人をからかうんじゃない!」

「あははは。」

本当に可愛いと思った。

雅紀にしたら失礼な話かもしれないけど、雅紀は大人と子どもが同居しているような魅力があった。

そういつ彼にどんどん惹かれていくのを感じた。

「ねえ、神子これよくない？このリング。」

「えっ、あっ、可愛い、こういうの好き！」

「ほんと、じゃあ、これ買おうよ、ちょうどペアだし、初デイズ二の記念にさ。」

ちょっと驚いた。確かに値段的にはそれほどではないと思ったが、二人分だと2万は越える。今日はそんなに持ち合わせがないから、正直厳しいと思った。

「すみません。ちょっとこれ見せてください。」

あたしの返事も聞かずに雅紀は店員を呼んでショーウィンドウを開けさせた。

「神子、つけてごらん。」

困ったことにサイズはぴったりだった。

「おおっ、ぴったりじゃん。見て俺のもぴったり、なんか俺らに買ってくれて言ってるみたいだね。」

『えー、やばい、1万も使ったら明日からの生活が。』

「じゃあ、これください。あっ、このままつけてくんで、包装はいりません。」

そう言って、勝手に買ってしまった。

『どっしりぶっ。』

「なんかついてるよね。気に入ったのがサイズぴったりなんて、なかなかないよね。そういうこと。」

素直に喜べなかった。

『けっこう勝手な人なのかな。』って思った。

あたしの経済状態も考えずに買ってしまっなんて、
『あたしのこと、やっぱり考えてくれてないのかな……。』

「はい、つけてあげるね。」

そういつて雅紀はあたしの右手の薬指にリングをつけた。

「やっぱ、ぴったりだ。ほら、俺のも。いい買い物できたね。」

「あのお、あたし、お金が……。。」

「へっ？何言ってるの？お金って、まさか神子に払えって言つと思つた？」

「えっ？でも、こんな一万もするものいきなりもらえないよ。」

「おいおい、さっき言ったじゃん。二人の記念だよ。ペアリングなんだから。」

“ペアリング”言われて初めて気づいた。

ペアリングだったんだ。

自分の中にそんな単語はすっかり消えていた。

『じゃあ、これはあたしへのプレゼント？雅紀が買ってくれた初プレゼントってこと？』

「プレゼントするよ。そのかわり二人のデートの時は必ずつけてきてね。」

ちよつと涙が出そうになった。

嬉しすぎたし、そのさりげなさがすごくかっこよかった。

黙って指環を見つめていると、

「あれ、気に入らなかったかな？」

「ううん、違うの、すごく嬉しくて……。。」

恥ずかしいけど声がつまってしまった。
そんなあたしのことを察してくれたのか、雅紀はそっとあたしの肩を抱いてくれた。

「ありがとう。そこまで感動してくれるなんて。俺もうれしいよ。」
「ありがとう。」

すごく素直に御礼の言葉が言えた。あたしは雅紀の前なら普通の女の子に戻る。

「さっ、次はどの店いこうか？」

「じゃあ、あそこ！」

楽しすぎた。

このままずっとこの時間があたしたちだけのものであってほしいと本気で考えていた。

エクスピアリを満喫した後、再びランドに戻って、またたくさんのアトラクションに行った。

いつの間にか日が暮れてきた。

ずっとこのままの時間なんてやっぱ無理なんだと感じた。

あたしが暗い顔をしていると、

「どうしたの？急に元気なくなったね。疲れた。」
ただ、首を横に振った。

「ん？飽きちゃった？俺といるのがつまらなくなった？」
さらに強く首をふった。

「ん、おじちゃん困っちゃったなあ。どうしたの？言ってるらん。

「さみしいの。」

「ん？どうして、二人でいるのに？」

「違うの。このまま時間が経ってこの楽しい時間が終わっちゃうと思ったら、急に寂しくなってる……。」

笑われると思った。

何をこの小娘は馬鹿なことを言ってるんだと思われと思った。

「そっか、そうだね。寂しいね。でもさ、二人でいれば、また、この時間は繰り返せるんじゃないかな。デイズニールランドがつぶれない限り、また来られるしね。確かに“今日”という時間は終わっちゃうけど、また違う二人の時間で楽しめるんじゃないかな。」

感動した。

あたしの馬鹿なわがママをすっぱり受け止めてくれて、しかも、元気の出る言葉をくれた。

本当に感動した。

涙が自然とこぼれてしまった。

そして、雅紀は何も言わずまた、あたしの肩をそっと抱いてくれた。

「ありがとう。わがままいってごめんね。」

「どういたしまして。そんなわがママを言ってくれる神子も好きだよ。」

自然とキスをした。

暗くなってきたとはいえ周りには大勢人もいたのに。でも、恥かしくなかった。

ほんとは、あたしがキスしたかった。

そんな気持ちを雅紀は自然と受け取ってくれた。

「神子、ずっと一緒にいてくれる？」

「はい、喜んで。」

「だあ、また居酒屋か・・・。」

「えー、本気だよ。本気だどついいっちゃうの。」

「そっかそっか、神子の本気の言葉なんだね。よしよし。」
頭をなでられた。

馬鹿にされているのに嬉しかった。

全然いやな気持ちがない。

なんだろう、今日はあたし自身が変わってしまった気がする。

ついにパレードの時間が来た。小学校以来見ていなかったパレードだ。

「おっ始まるぞ、いいポジション取れてよかったね。」

「うん！」

けっここの中間の最前列を押さえられたから、目の前でパレードが見れる。

「おっ！始まった。なんかさあ、変なんだけど、この音楽聞くと背中がゾクゾクして、ちよつと涙出そうになるんだよね。変かなあ。」

実はあたしも一緒だった。

小学校の時初めてパレードを見たとき、この音楽がなった瞬間ゾクゾクして涙が溢れた。

その感動を今でも忘れていない。

雅紀も一緒なんだって思ってた嬉しくなった。

ずっと何かに感動することを忘れていた。

音楽は好きだったしずっと聞いてきたけど、自分の音楽じゃないから、客観的に聴くことしかしなくなっていたし、本当にこんなに感動をしたのは久しぶりだった。

パレードが目の前に来た。雅紀の顔が横に見える。

パレードの光が逆光になって雅紀の横顔に陰影を作る。素敵だ。

自分の気持ち“本気”になっていることを感じた。

帰る時間が来てしまった。

やっぱり楽しい時間は終わってしまう。

帰りがけのあたしはそれは酷い顔をしていたと思う。

車に乗り込みずっと黙ってしまった。

さっきまでパレードが終わってお土産屋を見て回っている時は少し頭がおかしいくらいはしゃいでいたあたしなのに・・・やっぱり躁うつ病なのかも。

「寂しいね。祭りの後っていつもそうだ。楽しい時間は永遠じゃないからね。」

雅紀はあたしの気持ちを察してくれていた。

急に黙り込んだあたしを責めるわけでもなく、変に慰めるのでもなく、今のあたしの気持ちをそのまま言葉に表してくれた。

なんだか気持ちがスツと救われたような気がした。

「俺たちは出会ったばかり。まだまだこういう楽しい時間は一緒に作っていけるよ。」

涙がこぼれた。

悲しいんじゃないなくて嬉しくて。

なんだろうこの人の前ではただの『子ども』でいられる。

「おやおや、まだおうちまでドライブの時間があるよ。まだ一緒にいられ……。」

雅紀の言葉が終わらないうちにあたしは雅紀に抱きついていて、そして自分から唇を求めている。

雅紀も応えてくれた。

あたしの身体をすっぽりと両手で包んでくれてあたしの唇に優しく、そして激しくキスをしてくれた。

気が付くと周りの車はすっかりいなくなっていた。

「いかん、いかん、このままランドの駐車場に取り残されたら大変だ。」

笑いながら雅紀がいった。

あたしはそのまま取り残されてもいいのに、と思いつつも雅紀のわざとらしい言い方に笑った。

雅紀はわざわざ遠回りして家まで送ってくれた。

本当なら30分もかからない道のりを一時間以上かけて回ってくれた。

明日は仕事だというのに。

家についたのは12時を回っていた。

「ありがとう。遅くまでごめんね。」

「いいよ。本当は俺が神子と少しでも長くいたかっただけなんだか

ら。」

嬉しかった。

あたしと少しでも長くいたかったなんて、嘘でも嬉しかった。

「気をつけて、家はすぐそこだろうけど・・・ゆっくりおやすみ。」

「うん。」

そう言ったきりあたしは動こうとしなかった。

このまま帰りたくなかった。

雅紀ともっともっと一緒にいたかった。わがままなのはわかっていた。

「神子……。」

あたしの気持ちを察してくれたのか、再びあたしを優しく抱きしめて今度は雅紀の方から唇を求めてきた。

そしてあたしは応えた。

長く甘い時間が過ぎていった。

家の近くの路上にもう三十分も止まっている。

夜中だから人気はないが、時折車が行き来する中で二人は何度も何度も唇を求め合った。

抱き合ったまま雅紀が耳元で囁いた。

「次の土曜日、また、会えるかな？」

あたしは抱きしめられたまま頷いた。

「よかった。今度はどこへ行きたい？考えておいてね。」

また、小さく頷いた。

でも、次の言葉が来るのを恐れていた。

「さ、そろそろ帰らないとね。」

恐れていた通りの言葉が囁かれた。

「おうちの人も心配するし、明日は学校もあるだろう。次の休みには会えるから。」

『明日あたしが死んだらどうするの？明日雅紀が死んだら？もう会えないよ。明日なんて何も保障はない。明日なんて来なくていい。今あたしは雅紀とこうしていたいだけなの。』

そう心の中で叫んだ。

でも、言葉には出せなかった。

そつと雅紀があたしから身体を離れた。

「神子と出会えてよかったよ。離婚して2年、このまま朽ち果てるだけの人生かと思ってた。まあ、神子には、ただのお金をくれるおじさんかもしれないけど、付き合ってくれてありがとう。それにまた、会ってくれるって言うてくれて嬉しかったよ。神子にとってはただの援交相手……。」

「ちがう！そんなんじゃない！あたしの方がマークさんに助けられる。あたしの意味でマークんに会いたいって思ってる。もう、援交なんかじゃない！」

急に叫んだあたしに驚いた雅紀はしばらく目をぱちくりさせていたが、やがて優しく微笑んで再びあたしを抱きすくめ、耳元で「ありがとう。」と囁いてくれた。

「来週楽しみにしているよ。行きたいところちゃんと考えておけよ。」
「うん、また引っ張りまわしてあげるね。」

「おいおい、おじさんの体力も考えてくれよな。」

「だーめえ、あたしと付き合うからにはもっと体力つけてもらわなきゃね。」

「はいはい、がんばります!」

「えへへ、じゃあね。おやすみ、ありがとう。本当に楽しかった。」

「御礼はお互い様。こっちこそ本当に楽しかったよ。」

そう言っつて車を降りてドア越しに話すあたしの腕をグッと引き寄せて軽くキスをしてくれた。

一度外へ出たせいか急に恥ずかしくなった。

「ばか……。」

「へへっ、だつて一週間キスできないから、今のうち“キスだめ”しとかなきゃね。」

「ばか……。」

「じゃあ、おやすみ、俺の夢みてね。」

「うん!」

そういつて家に向つて歩き出すあたしをずっと雅紀は見守つていてくれた。

角をまがつてあたしが見えなくなるまで。

エピソード4：親友

毎日の風景が一変した。

学校に遅刻せずに通えた。

友達とも普通に話せた。

嫌だった授業時間もちゃんと過ごせた。

もつとも雅紀とのメールばかりをしていたけど。

雅紀はメールを見ると、ほとんどすぐに返してくれる。

『この人ちゃんと仕事してるのかな？』って心配になるほどすぐに返ってきた。

《ああ、神子と会える日が待ち遠しいよ。今度はどこ行きたいか決めた？》

《あたしも、早く会いたい。まだ、決めてないけど、どこかで買い物が見たいな。》

《買い物かあ、じゃあ、ショップの多いところだね。お台場なんてどう？》

《いいかも！行って見たかったんだお台場。あそこ電車だと不便だから、なかなか行けなくて。》

《OK！じゃあお台場で決まりだね。道はちゃんと調べておくよ。イマドキなのに俺の車はナビないからね（-_-）（-_-）地図で行き方調べときます！》

《はい、お願いします！楽しみい〜（o）（o）もう心はお台場だよ〜》

《ははっ、授業中でしょ！しっかり勉強してね。卒業できるのか

なあ・・・」

《がーん、現実に戻さないでよ。卒業はします！がんばるのだ！》

《はいはい、じゃあ俺も仕事してくるね。がんばります！》

《はい、がんばって、週末まであと2日だ！》

授業中ずっとそんなやり取りをしているとあっという間に時間が過ぎる。

だから、授業も苦痛ではなくなった。

けど、本当に卒業できるのか、ちよっと心配にはなっている。

1学期の成績は赤点が4つもあった。

担任にも『このままだと卒業まずいぞ、それと進学はどうするんだ。』

そう言われていることをふっと思いついてしまった。

「ミコちゃん！」

「サトちゃん。」

「ナンか最近明るいね。何かいいことあった？」

「えっ、うん、ちよっとね。」

顔が熱くなるのを感じた。

このコは飯田里子いいださとこ、学校ではクラスは違うが、唯一何でも話が出る存在だ。

「そうなんだ。でも・・・よかった。ミコちゃんが明るい私も嬉しいよ。」

何かいいことがあった、と言ってもあたしから話さない限り、決

して里子から聞こうとはしない。

いつもそうだ。だから里子だけは安心ができる。

あたしを深く探ろうとも、“意見しよう”ともしない。

ただ、あたしの様子を見て「明るいと嬉しい。」と言ってくれる。

そんなコだからあたしの全てを話せる。

「ねえ・・・もう、やめた？」

「えっ？」

「あつ、ん・・・その・・・。」

「ああ、援交？ごめん、続けてる・・・。」

「そうなんだ。身体、大丈夫？」

「うん、それよりさ、今日は放課後時間ある？」

「えっ、うん、ちょっとなら。」

「ほんと！じゃあ、帰り一緒に帰ろうよ。久しぶりにサトちゃんと話したいんだ。」

「いいよ。そういうことなら、じゃあ、いつものファミレス行くところか。」

「うん、うれしい！ありがとう！」

「ミコちゃん・・・ありがとうなんて、恥ずかしいよ。」

おそらく、生活態度や学校での態度、成績もあたしとは全くの反対、なのに気が合う。

なぜだろう。

何か根底に流れているモノが一緒なんだろう。

いつも里子と話しているとそう感じる。

「待った？ごめんね。週直で、片付けしてたから。」

「ううん、あたしもさつき来たところ。なに頼む？」

「ん、じゃあ、紅茶、ダーズリンがいいな。」

「はい、すみませーん。」

注文を済ませると、しばらく沈黙が続いた。

イマドキの普通の女子高生なら、注文もそこに『きゃあきゃあ』騒ぐところなのだろうが、あたしと里子は明らかにイマドキではなかった。

かといって別世界の“おたく”的な○○少女というわけでもなかった。

「あつ、実はね。好きな人、ん・・・好きになれそうな人ができたんだ。」

「えっ？そうなの？それで明るいんだ。」

「うん、その人ね。知り合ったのは、その・・・援交なんだけど。」
「えっ？」

明らかに里子の顔が曇った。

里子には本当に何でもしゃべっている。

あたしの家のこと。男遍歴(?)。将来の夢のこと。

特に男のことには何回か反対されて、いつも、里子の言う通り、騙されて、泣きを見ている。

男のことに関してだけは里子は意見をくれる。

あと、援交のことは強く反対しないが“よくない”と思っている

ことはわかる。

あたしと違って里子はすごく“道徳的”なのだ。

高3になっても彼女は親の言う「門限8時」を守っている。

特にお嬢じやうというわけではない。

自分から守っているのだ。

「親に心配をかけるのは一番いけない。」

「いつも言っている。そんなコだ。」

「あつ、でもね。違うの。その人ね。援交で会ったんだけど、会った日ね。何もしなかったの。あつ正確にはキスはしたけど、それ以上は……」

あつ、ちよつとあつたけど、でも、最後までしないで、ちゃんとあたしを家まで送り届けてくれて、それからね。週末になるとデートに連れてつてくれるの。」

「キス……それ以上……。」

里子はまだ男を知らない。クラスメイトに好きなコはいるが、まったくコクれないでいる。本当にイマドキではめずらしい、処女の女子高生だ。

「あつ、あたし、話し下手だから、うまく言えないけど、何か、いつもの援交の相手とは違うの。いい人っていうか。」

「援交する人がいい人とは思えない。」

「あつ、うん……そうだよな。いい人ではないか……。」

「でも……ミコちゃんが、明るくなったのと、ミコちゃんと言っていることは信じられる。だから……きっと“いい人”なんだね。その人。」

「サトちゃん！ありがと。こんなこと言えるのサトちゃんだけだからさ。」

「いくつなの、その人？」

「えっ？ああ、えつと・・・37。」

「えっ？じゃあ、結婚とかしてるの？」

「ううん、今は独身。バツいちなんだって。」

「ええ、じゃあ子どもとかは？」

「いるよ。でも、元の奥さんが引き取って育ててるらしいよ。」

「ええ、じゃあ、子どもを押し付けて自分だけ援交とかしてるわけ？やっぱ、いい人とは言えないじゃん。」

「ああ、えつと、なんかね。彼が言うには、奥さんが男を作ったらしいんだ。それで、その奥さんは再婚して、子どもも連れて行くって奥さんが言っつて、持ってっっちゃったらしいよ。」

「えー、ひどいね。その女。でも、先にその彼が浮気とかしたんじゃない？」

「ああ、浮気したことはあるらしいけど、その離婚する、6年も前の話で、それからは真面目に家庭のことを考えて、がんばって残業とかして家族のために夜遅くまで働いてたんだって。」

「ええ、じゃあ、なんで別れるのよ。奥さんが男作るのおかしいよ。」

「んー、なんかね。奥さん淋しかったらしいの。つまり・・・夜の生活。エッチが全然なかったんだって。彼も仕事で疲れてて求めに応じることができなくて、それでも、週末とか頑張ってみただけど無理やり頑張るから、どんどんエッチが苦痛になってきちゃっ

「たらしいんだ。」

「よくわかんない。でも、やっぱ、セックスなんて邪魔だってことは、わかった。本当の愛にセックスなんていらんだよ。あたしなら別れない。その奥さんみたいに男を作るなんて。だって結局セックスがしたくて男を作ったわけでしょ。」

「んん、あたしもよくはわからないけど、酷いとは思った。彼の話ぶりから嘘とは思えないし、あたしもセックスが愛とは思わないから、もし、あたしなら、あたしと子どものためにそんなに働いてくれるんだから、それで充分な気がする。」

「そうだよ。なんかその人・・・かわいそうだね。」

「ん・・・そうだね。かわいそうなの・・・かな？」

「優しいんだ、その人？」

「えっ、う、うん。優しい。」

「そっか、ならいいかな。身体だけ求めてくるわけじゃないんだよね。」

「うん、実は未だにキスはするけど、エッチはしてないんだ。」

「ほんと？どれくらい付き合ってるの？」

「うん、もうすぐ一ヶ月かな。」

「何回くらい会った？」

「まだ四、五回くらいかな。彼一応サラリーマンだから、普段はそんなに時間ないし、でも、頑張って平日も時間作ってくれたりするけど。」

「へえ、まさか・・・妻とのセックストラウマで、できないとか・・・」

「え、うーん、それはないと思う。えっちはしてないけど、直前までいった時はそれなりに……ん……ナツてたから……」
「えっ？何がなつてつたつて？」

「つまりい……オトコに……なつてたから。」

「男？彼だよな。男だよな……あっ！……そういうことね。」

「そう、そういうこと。」

里子にはその手の話だけはストレートに言えない。もつとも、耳年増なのか、知識は豊富でいつだったかあたしの生理が遅れた時に検査方法や病院の費用のことなどを調べてくれて、さらに無事だったことを言ったら、その後、避妊のことについてトクトクと説明された。

「そっか、じゃあ、まあ、いい人なんだろうね。」

「なーにそれ？きやはは。」

「えっ？おかしい？だつて、ほら、今までのミコちゃんの彼氏みたく、がつついてないんでしょ？」

「それも酷い言い方だ。男を見る目がないってことね。」

「ああ、ごめんね。そういう意味じゃ……。」

「へへ、いいよ。わかってる。サトちゃんの言いたいことは。たぶん、今度は大丈夫な気がする。歳もあるけど、やっぱり落ち着いているからね、その人。」

「そっかあ、37だよな。松村先生くらいか……いいね。そのくらの歳の人。あたしもうんと歳が離れた人がいいな。」

「え？山野君は？」

「えっ！別に・・・付き合ってるんじゃないし、付き合うなら年上の人がいいってこと。」

「ああ、なんか矛盾してるけど・・・。」

「いいの！ミコちゃんが心配することじゃないんだから。」

「ごめんなさい・・・。」

「あん、また凹む。そうじゃなくて私にとって山野君は憧れっつうか、付き合いたい人ではないんだよね。」

「ああ、うん、わかる気がする。そういうのあるよね。」

「そう、だから付き合うなら松村先生がいいかなって。」

「松村先生、奥さんいるじゃん。」

「そうだけど、ミコちゃんの彼氏が37っていうから。」

「えーと、まだ、彼氏ではないのですが・・・。」

「えー、もう彼氏だよ。だって好きなんですよ、その人もミコちゃんのこと。」

「うーん、正式にコクられたわけじゃないけど・・・実はね。このリング・・・。」

「もらったんだ？！気が付いてたよ。いつ聞こうかって思ったの。リングくれたんでしょ。じゃあ、もう、コクられたのと同じじゃん。」

「そうかなあ、あたし、ちゃんと言葉に出してくれないと信じられない立ちだからさ。」

「そうだよな。でも、言われるのも時間の問題じゃない？」

「そうなのかなあ。だと、いいけど。」

「ミコちゃんは？好きなんでしょ？」

「えっ、ああ、まあ……。」

「まあ……って、ふーむ、まあ、その顔が正直に心を表してるけどね。」

「やだあ、サトちゃん！ひどくない？」

「へへえ、さっきの山野君のお返し、ミコちゃんって嘘はつけないから。」

「もう！サトちゃんたら。」

「きやはは、なんか楽しいね。明るい話題だとさ。」

「そうだね。いつもあたしの暗い話題が多いからね。」

「またあ、でも、ほんと嬉しいよ。ミコちゃんが明るいのは。」

「そうかな。そんなに違う？」

「うーん、他の人にはわからないかもしれないけど、ミコちゃんフアンの私にはわかるのさ。」

「ファ、ファン？何それ？」

「だってミコちゃんはアーティストになるんだから、第一号ファンは私よ。」

「そっか、じゃあ、会員証発行しなきゃね。ふふっ。」

「そうだね。会員番号0001で、ちょうだいね。ははは。」

本当に里子といるとホツとする。いつも硬い殻をかぶって外界から自分を遮断しているあたしには本当に「友達」と呼べる人間は少

ない。

だから、こんな時間がいつも“ずっと続けば”って思ってしまった。
そして終わるとまた凹む。

「じゃあさ。もう、やめるよね。」

「えっ?」

「援交。」

「あっ、うん、いいことではないよね。やめたらほんとはいいよね。」

「こらあ、そんな素敵な彼ができて援交はないでしょ。もっとミコちゃんが意思を固く持たなきゃ。」

「だよ。わかってる。でも、お金ないと不安でさ。」

「お金か・・・昔みたくちゃんとしたバイトするとか・・・。」
「時給800円とかじゃ安心できない。」

「ミコちゃん、お金色々かかるしね。服も好きだし。」

「なんだよねー。どこかにあたしを月50万くらいで買ってくれる人いないかなあ。」

「ミコちゃん！彼氏はどうすんの!」

「あっ！そっか、そうだよ。彼もそんなお金持ちってわけではなさそうだし。」

「ミコちゃん。愛が大事ではないの?」

「そうなんだけど、お金もないと・・・生きていけないし。」

「そりゃそうなんだけど。ふう、いっつもこの話題になると堂々

巡りだね。」

「ごめんね。あたしがだらしないから。」

「ミコちゃんのせいじゃ、ないよ。お父さんやお母さんがしっかりしなきゃいけないのに。」

「・・・・・・・・・・。」

「あつ、ごめんね。でもさ。なんか腹立って。私が何か言えるわけじゃないんだけどね。親ってそういうもんじゃないと思うんだ。子どものためなら死ぬるのが親だっと思うから。」

「本当の親じゃないから・・・父親は。」

「そうだけどさ、少なくともミコちゃんを赤ちゃんの頃から育てるのは確かなんだからさ。当然親としての義務は果たすべきだよ。」

「そう・・・だよね。」

「あつ、ごめんね。なんかまた暗い話題にしちゃった。」

「いいの。あたしが生まれてきたのがそもそも間違いないんだから。」

「そんなことない!!」

周囲の人間が一齐にこつちを見た。

里子は普段は目立たなくておとなしく見られているがけっこう喜怒哀楽ははつきり出す。

その点もあたしとは真逆だ。

「あつ、えつと・・・ごめん。大声出して・・・でも、それは違っよ。ミコちゃんが生まれてきたことは必然なんだよ。誰もが生まれてきたのは何か世の中に必要だから生まれてきたんだよ。自分が生まれてきていけないなんて思っちゃだめだよ。」

「ごめんね。サトちゃんにはいつつも心配ばかりかけて。あたし

ダメ人間だからさ。」

「また、“ダメ人間”って言う。違うよ。本質的に人間はほとんどの人が自分をダメって思ってる。私だってそうだよ。だから、努力もするんじゃない。」

「あたし、努力もできないから。」

「そんなことないよ。歌の努力はしてるじゃない。レッスンしてるのは努力じゃないの?」

「それはそうだけど。」

「でしょ。ミコちゃんは歌を唄って世の中の人を幸せにするの。それが使命。」

「使命か・・・なんか自信ないな。」

「だから、努力するんですよ。」

「うん。そうだね。」

「それに・・・。」

「ん?」

「さっき私にばかり心配させてるって言ったけど。もう、私だけではないんじゃない?」

「えっ?」

「彼氏、その人だってそんなミコちゃん見たら心配するよ。」

「そっかなあ。」

「そうだよ。心配するに決まってるじゃん。ちょっとその人には“私のミコちゃん”取られたみたいで妬けちゃうけど。」

「なにそれえ、私のミコちゃんって・・・恥ずかしい。」

「へへ、ミコちゃんは可愛いよ。私なんかとは違う。だから、その彼氏に心配かけちゃだめだよ。」

「うん。」

里子は本当にあたしのことを心から心配してくれる。

そんな心配をかけている自分がとても情けない。

しっかり生きていかなきゃ、って思ってはいるし、そのための行動もしているつもりなんだけど、いつもカラ回り。

同じところを言ったり来たりしている。そんな自分にまた凹む。

それからしばらく里子と学校のことや将来のことなんかを話して別れた。

エピソード5：告白

待ちに待った土曜日。

また気合を入れて服選びと化粧を調えたあたしは待ち合わせ時間よりも三十分も早く千葉に着いてしまった。

でも、雅紀を急がせるのも悪いのでしばらくスタバで時間をつぶそうと歩いていった。

「ねえ、どこいくの？独り？よかつたらドライブしない？車あんだよね俺。」

ナンパだ。『あたしも今から車乗んだよね。』と言い返そうかと思っただが無視して歩いた。

「なあ、つれなくするなよ。そんなミニはいてさあ、ナンパ待ちでしょ。わかるんだよ。きれいな足してるね。いくつ？学生じゃないよね。OL？」

カチンと来た。高校生だよ！確かにあたしはいつもふけて見られる。

よく言えば大人に見られるのだが、子どもの頃からふけて見られるのが凄くいやだった。

「うるせえな！先客があんだよ。ひっこんでろ。」
チヨコ切れしてしまった。

「なんだと、こら！優しくしてりゃ付け上がりやがって！ブスが派手な格好してんじゃないやねえよ！」

ブチ切れた！その瞬間、バッグで、そいつの頭を張り倒していた。

「あつつつ、このアマー！」

相手が言うか言わないかのうちに二発目を食らわして速攻で逃げた。

「はあはあ。」

すぐにC・ONEに入って相手を撒いた。

でも、雅紀との待ち合わせは駅前のターミナルだからまた戻らなければならなかった。

まだ、奴が待ち伏せてるかもしれない。

雅紀にメールを送った。

《ちょっとトラブルがあって悪いんだけど、パルコの方で待ち合わせていいかな？》

すぐに返事が返ってきた。

《トラブルってどうしたの？大丈夫？いいよ。パルコの方に行くよ。もう、出るから。》

急いでパルコの方まで走っていった。さっきのバトルと日差しが強烈なこともあり、あたしは汗だくだった。

すっかり化粧は剥がれていた。

『ちくしょう。あのバカのせいで雅紀にボロボロの顔を見られる。』

そう思うと情けなくて泣きそうになった。

「大丈夫か？何があったの？」

すでに雅紀はパルコ前に来て駐車して待っていてくれた。
あたしは事情を話すと、

「とにかく車にいこう。また付け狙われたら困るしね。」

そういつて駐車場まで手を引いてくれた。ようやく車に乗り込んで一息ついた。

「災難だったな。この辺はナンパ多いんだよ。いつつも駅前はやチャラした奴が女欲しさにうるうるしてるから、気をつけなよ。」
「うん……。」

「もう、大丈夫だよ。怖かったよね。もう、俺がいるから安心して。」
「うん……。」

本当はナンパ野郎のことより、汗だくで化粧が剥がれた方が気になっっていた。

「そういえば、今日も神子かわいいね。俺のために気合入れてくれたのかな？」

「うっ、うえ、うえくん……。」

突然声を上げて泣いてしまった。
涙が溢れた。

『本当に気合入れてきたのに、こんなボロボロの顔見られるはずじやなかったのに。』
そう思うと涙が止まらなかった。

「おいおい、どうした、今頃怖くなった？」
「違うの、違うの……。」

言葉にならなかった。ただ、悔しくて情けなくて。

「……………」

「ごめんね。あたしほんとに馬鹿だ。」

「ん〜、でもさ、ナンパされるってことはそれだけ神子が魅力的ってことじゃないかな？」

「違うもん、だってあいつ断ったら、あたしのことブスって言ったもん。」

「ブス？はは〜、そいつの方がブサイクだったろ？可愛い子に断られたんで逆上して言ったんだろうね。かわいそうな奴だね。よっほど頭悪いんだよ。」

「だって、ほんとにブスだもん。あたし、一重だし、顔丸いし。」

「ええっ？本気で言ってるの？そりゃ世の中の「ブスさん」に申し訳ないよ。こんな可愛い顔してる神子がそんなこと言っちゃいけません。」

思わず吹き出した。“言っちゃいけません。”って言葉が妙におかしかった。

「ははは、笑ったね。そう、その笑顔があれば神子は充分可愛いよ。」

「ばか、でも、お化粧ボロボロだし……。」

「何言ってるの。女子高生でしょ。すっぴんでもきれいな肌してる

んだから、お化粧なんて必要ないよ。神子は色白だし、俺は色白の
コト付き合うのが夢だったんだよねー。」
また笑ってしまった。

『色白のコト付き合うのが夢って……。』

「そんなことないもん。あたし色は白いけど顔丸いし、豚じゃん。」
「おいおい、俺は悪いけど美的センスはある方なんだけどなあ。神
子がブスで豚だったら、最初にあった時点で『さよなら』してたよ。
マジで。」

「えー逆に最低く、じゃああたしが好みじゃなかったらさよならし
てたってわけ？」

「そうそう、だって一応お金出すわけだし、俺だって選ぶよ。だか
ら神子はブスじゃないし豚でもなかったし、俺の好みだったから付
き合ってた欲しかったわけだし。」

なんとなく吹っ切れなかったが、少なくとも雅紀の好みであるこ
とは確かなようなのでそこで納得した。

「あーあ、最低の始まりだなあ。化粧していい？」

「いいけど、ほんとそのままでも充分かわいいよ。俺むしろスッピ
ンの方が好きなんだけど。」

「そうはいかないの。あたしは化粧無しでは表に出られないんだか
ら。」

「そっかなあ、充分可愛いけどなあ。」

「それはあたしのスッピンを見たことないから言えるんだよ。見せ
ないけどね。」

「えーじゃあお風呂入るときも化粧したまま入るの？」

『えっ？お風呂？雅紀とお風呂入るってこと？』
急に恥ずかしくなって黙ってしまった。

「ん？どした？何赤くなってんの？あつ俺とお風呂入るとこ想像したんでしょ？」

「ばか！知らない！」

「はははっ可愛いね。神子は。そんな可愛らしさがある神子が好きだよ。」

初めて“好き”って言うてくれた。

可愛らしさが好きなのか、あたしが好きなのかイマイチはつきりしないけど、初めて雅紀の口から「好き」って単語が出た。

「もう・・・、化粧するよ。」

恥ずかしさを誤魔化すために化粧を始めた。

車の中だったのでちよつと揺れたが、何とか元に近いくらいには仕上がった。

「よし、もうすぐ着くよ。」

「わーい！まずはビーナスフォートかな。見たいものいっぱいある。」

「はいはい、お嬢様、何なりとお申し付けください。」

「うむ。では、まずはビーナスフォートにまいるぞ！」

「はいはい。」

土曜日ということもあつて駐車場に入るまで三十分もかかったが、待っている間も雅紀とのおしゃべりでちっとも苦痛じゃなかった。むしろ短く感じるほどだった。

「ふう、ようやく止められたね。よし、いこう！」
「わーい！」

雅紀がスツとあたしの手を握った。
全然違和感なくスマートだった。

あたしは人一倍恥ずかしがりやで、今までの彼氏ともほとんど手を繋いだことはなかった。

でも、雅紀のそれはすごく自然だった。

こんな風に“デート”できるなんて……

あたしは変わった。

ショップを回りながらあれもこれもと物色した。

どれも欲しかったがそんな予算はなかったので値段を見てはあきらめていた。

しばらく回ると雅紀が、

「欲しいものあった？」

「うん、あるんだけど……予算が……。」

「なんだ、お金のことに気にしてたの？ いいよ、全部ってわけにはいかないけど、これだって思ったものは言うてごらん。」

「えっ？ 買ってくれるつもりなんだ。」

そんな、全部とはいかなくても悪い気がした。

まだ恋人でもないし、援交のつもりなら相場は2、3万だし、今

見たもので選んでも10万はくだらない。

あたしの金銭感覚がおかしいのかな。

「遠慮すんなよ。あっ……だからって援交の続きじゃないからね。俺が神子を好きだから買ってあげるだけで、それにこれは二人のデート記念でことよ。」

ついに言った。雅紀の口からまた

『神子を好きだから。』
って言ってくれた。

本当にあたしのことを好きでいてくれたんだ。
それからしばらく雅紀の言葉が耳に入っていなかったらしい。

「神子？」

「えっ？はい？」

「もう、聞いてた？これどうかなって。似合うかな？」

「えっ？ああ、いいんじゃない。似合うよ。」

「ほんとにそう思ってる？あやしいな。心ここにあらずって感じだよ。」

見透かされた。

ずっと雅紀の

「好き。」

って言葉が耳の中で木霊こだましていて、その後の雅紀の言葉がまるで入っていなかった。

どうしよう。嫌われたかも。

「ちょっと疲れたかな？一服しようか、俺もタバコ吸いたいし。」
「うん、そうだね。どこかで休もう。確かに疲れたかも。」

「何か変だなあ。まあいつか、じゃあ、あそこのカフェでお茶しよう。」

そう言われている最中も少しボーっとしていた。

男の人に「好き。」って言われたのは何年ぶりだろう。

いや、ひよっとすると初めてかもしれない。

今までの男はベットでは何度も“好き”だの“愛してる”だの言っただけど、コトが終われば独りでタバコを吸ったりゲームをしたり。素のまま「好き。」って言われたのは本当に初めてかもしれない。

「ふう、やっと落ち着いたね。少し夢中で店回りすぎたかな。」

「ねえ？」

「ん？」

「さっき、雅紀は『あたしが好きだから』って言ったよね。」

「えっ？うん、言ったよ。」

「それって、どういう意味？」

「どういうって・・・素直な気持ち。神子が好きだから。って意味だけ。」

「ほんと？ほんとにほんと？」

「ほんとにほんと。」

「ちやかさないで。それはあたしを女として好きってコト？異性と

して？」

「そうだよ。それ以外ある？」

「そっか、なら、いい。ありがとう。」

「えっ？あ、そうか。」

「ん？」

「コホン！あー、えっと、神子。俺、神子のこと好きだ。まだ、出会って一ヶ月そこそこだけど、本当に一人の女性として神子が好きだ。援交とかじゃなく、一人の男として付き合っただけがいい。」

「あつ、急にこんなこと言って。ムードないかな。買い物途中だなんて。」

「待ってた。」

「えっ？」

「その言葉待ってた。ありがとう。あたしこそ、よろしくお願いします。」

周りからみたら、おかしな二人だったろう。

あたしは思わず立ち上がって雅紀に最敬礼して深々と頭を下げていたのだから。

「神子……ありがとう。こちらこそよろしく。」

さらに、おかしなことに雅紀まで立ち上がって、深々と頭を下げ両手であたしの手を掴んで握手してきたのだから。

「ふふふ。」
「へへへ。」

両手を握ったまま再び座り込んだあと、おかしくて笑ってしまっ
た。

おそらく周りの人には少し頭がおかしい二人と思われただろう。
でも、そんなこと構わない。

最高に幸せだった。

生まれて初めて“幸せ”ってものがあるのが嘘じゃないって思え
た。

】

エピソード6：ひとつづつ

「もう、いい加減にして！」

「なにをいい加減にすんだ。」

「あんたの顔なんか見たくないっていつてんだよ！！」

「なんだとお、それが親に向かっていう言葉かぁ！」

「親なら親らしいことしろよ！なんで働かねえんだよ！身体なんてどこも悪くねえだろ！」

「なーにいつてんだ。俺は心臓が悪いんだ。それに働いたら生活保護がもらえなくなんだろ。」

「最低だ！働けるのに生活保護騙し取ってるだけじゃなーか！」
「なーにぉー！！！」

「うるさい！出てけー！あたしの部屋に入ってくんなー！！！」

また、いつものように切れてしまった。父親とは何も話が噛み合わない。

もう、いやだ。

死んでしまいたい。

こんなところで生活していたら気が狂ってしまふ。

母親はただあたしたちの喧嘩をオロオロしながら見ているだけ。止めもしないし、どちらにも何も言わない。

皆殺しにしてあたしも死のうと今まで何十回と思った。

でも、本当は怖かった。
そして、悔しかった。

『あたしにはやりたいことがあるのになんで死ななきゃならない？』
そう考えると不条理も感じて思い止まっていた。

次の休みの日、雅紀と会った。雅紀の家に行ったのは二度目だった。

あたしはこの前の父親との喧嘩の話をした。

「そうなんだ。最低だな神子の親父。」

雅紀が言った。

あたしの周りの人間は誰もがそう言ってくれるが、父親は言葉では表せないくらい本当に最低の屑人間だ。
血のつながりがないのが唯一の救いだった。

「で、どうするの？高校卒業したら、家出るの？」

「うん、出たい。でも、お金ないから。」

「そっか、そうだよな。バイトなんてたかが知れてるし、独り暮らしするほど稼げないよね。」

「いいよ。また援交して稼ぐから。」

「ばか！」

ちよつとビックリした。いつも温厚な雅紀が怖い顔をしてあたしを叱った。

「援交なんてやめろ！もちろん俺も言えた義理じゃないけど。神子

は、本当はそんなことをするコじゃない。」

「でも、お金なきや独りじゃ生きていけないよ。皆うちの家のことはそう言っただけ心配はしてくるけど、実際に誰も助けてくれる人なんていない。慰めるだけなら誰だってできるよ！」

こんなこと雅紀に言っつもりはなかった。

でも、勝手に言葉が先に出てしまった。

こんなことを言っても雅紀を困らせるだけなのに。

誰も何も出来ないことなんてわかってるのに。

「そつだよな。」

そう言っただけ雅紀は黙ってしまった。

当たり前だ。

悪いのはあたしで雅紀を困らせてるのは、あたしのどうしようもない今の状況なのだから、自分でなんとかするしかないのだ。

「ごめん、こんなことで楽しい時間を台無しにして、もう、会わないほうがいいよね。あたしたち。雅紀に迷惑になるだけだもんね。」
「ばか……。」

今度の『ばか。』はさつきと違った。

その言葉には何か暖かいものが含まれていた。

「よし、こうしよう。ちゃんと卒業したら、うちにおいで、一緒に暮らそう。高校生でなくなればもう大人だから。一緒に暮らしてもいいだろう。」

耳を疑った。何を言ったんだこの人は？

一緒に暮らす？

同棲ってこと？

しばらく事態が飲み込めずに黙っているあたしに

「ん？嫌かい？俺と暮らすのは？」

「えっ？嫌なわけないよ。でも、だって、まだ知り合って二ヶ月も経ってないんだよ。あたしのこと好きっていつてくれたけど、元はただの援交相手なんじゃ……」

雅紀はスツと手を伸ばして、あたしの口元をそつと押さえて、それ以上のあたしの言葉を遮った。

「好きだよ。神子のこと。もう、ただの援交相手なんて思ってない。この2ヶ月ほとんど毎週のように会ってきたじゃない。神子のこと少しは理解しているつもりだよ。大事なのは時間の長さじゃない。密度っていうか、深さっていったほうがいいかな。それに、もう、ただの“好き”じゃない。愛してる。」

「……マークくん。」

「おいおい、ミコらしくないな。嬉しくないの？」

「……うれしいよ。涙が出るほど……。」

そう言っている間に涙が溢れ出してきた。

本気であたしのこと、こんなあたしのことを考えてくれる人がいた。本当に、本当にあたしのことを考えてくれる人がこんなに傍にいた。

もう、『幸せ』という言葉が陳腐になるくらい幸せを全身で感じた。そして、本当に幸せを感じると人間は嬉しさよりも、心の中に温

かくて大きな光のようなものが溢れ出てくるのを知った。

「ありがとう。マーくん……。」

「神子……。」

そう言っつて、そつとあたしを頭から抱きすくめてくれた。

すっぽりと包まれて、まるで生まれたての赤ん坊のように雅紀の胸の中で泣いた。

そして、自然とキスをした。雅紀のキスは今まで以上に優しくかつた。

軽く唇を重ねるとスツとひいてあたしを見つめた。

そして、再び唇を重ねてきたが、今度は上唇と下唇を交互に軽くキスをしてくる。

時折、ほっぺたや鼻の頭にもキスをしてきた。

なんだか子どもになった気分で雅紀のされるがままになってしまった。

次に雅紀は深いキスをしてきた。

雅紀の舌がそつとあたしの唇から入ってくる。

もう、身体から力が抜けてしまつて、雅紀に身体を預けているのが精一杯になる。

あたしもたまらなくなつて雅紀の舌に自分の舌を絡める。

もう、何分もこのままキスをしている。

キスだけなのに、もう、体中を愛撫されているような感覚になる。

そして、雅紀の唇はあたしの唇から離れ、あたしの首筋を這い出した。

首筋から耳元に上がり、そのまま耳を愛撫された。

耳はあたしのウィークポイントだ。
息をかけられるだけで濡れていくのを感じる。

雅紀は唇で耳を愛撫しながら左手でもう片方の首筋と耳をまさぐる。

優しい。

そして、上手だ。

『さすがに年の功。』
などとつまらないことを考えてしまった。

でも、本当に身体がとろけていくような感覚だ。

雅紀はそつとあたしを寝かせると、その右手は胸へと這い出した。

薄いブラウス一枚を隔てて雅紀の右手の温度を感じた。

一つ、二つとブラウスのボタンが外されていく。

そして、上半身は、いつの間にかブラ一枚になっていた。

軽くあたしの身体を浮かせると、サツと右手をあたしの背中に回して一瞬でブラのホックを外され、肩から滑り落ちるようにブラを脱がされた。

部屋が明るかったので、しっかりと見られてる。

恥ずかしい。

「真っ白で素敵な胸だね。」

耳元で雅紀が囁いた。急に顔が熱くなるのを感じた。

そして、その露わになった胸に顔を埋めて、胸の中心から柔らか

な乳房、そして、敏感な乳首に唇を這わしてきた。

雅紀の舌先が乳首に当たるとピクツと身体を反応させてしまった。

「感じるの？」

また囁かれたが、恥ずかしくて答えられなかった。

雅紀の唇が両方の乳首を丹念に愛撫してくる。

もう、すでに股間には熱いものがほとばしっていた。

そして、その熱い部分に雅紀の手が触れてきた。

「ああ！」

思わず声が出てしまった。

ここまでは意識がボーっとしながらも何とか自分を保って雅紀の行動をチエックできたが、そこに触れられたとたん全ての理性を失った。

その後はよく記憶にない。

でも、断片的にだが、雅紀があたしの一番敏感なところを手で愛撫し始めて、その後、口でもいっぱい愛撫されて、二、三回はいつてしまった。

そして、気がつくとき今度は雅紀があたしに求めてきた。

あたしはそれに応じて、雅紀の熱く硬くなったモノを最初は手で、そして、唇と舌を使って丹念に愛した。

「うっ！」

雅紀の口から声が漏れた。

感じてくれてるんだ。
凄く嬉しかった。

嬉しくてさらに激しく雅紀を攻めた。
雅紀もたまらなくなつたのかあたしの攻撃を遮かざって、自分が上になり、あたしを包み込んだ。
そして、さつきまであたしの唇の中で脈を打っていたモノをあたしの中に滑り込ませてきた。

「あ！ああ！」

また、冷静ではいられなくなった。
雅紀の熱く硬いものが、あたしの入り口を開き、深くまで押し入ってくる。

「ああ、いやあ。」

言葉とは裏腹に嬉しかった。
雅紀との初めての“えっち”だった。

初めて雅紀と“ひとつ”になれた。

今まで、えっちまで、こんなに時間がかかったのは初めてだ。
むしろ、えっちから始まったようなことがほとんどだったから。

雅紀の腰の動きが徐々に早くなってきたところまでは記憶にあったが、それ以上は覚えていない。
でも、何度も何度もいつたみたいだ。

次に気がついたときは、雅紀の熱い液体があたしの腹の上にぶち

撒かれていた。

「はあ、はあ、神子……。」

そう言つと再び唇を重ねてきた。またしばらく優しく長いキスをしてくれた。

そして、唇を離すとあたしの目をしっかりと見つめて

「愛してる。」

と言つてくれた。

こんなに優しく、そして激しく感じたセックスは初めてだった。そして、終わった後も身体を離さずにあたしをしっかりと抱きしめてくれた人は初めてだった。

また、涙が溢れてしまった。

「神子……。」

「違うの。嬉しいの。だから、もっとぎゅっと抱いて。」

「神子……。」

そう言つて、強くあたしを抱きしめてくれた雅紀は、また何度も何度も優しくキスをしてくれた。

エピソード7：卒業

無事に卒業できた。

先生にはかなりヤバイって言われていたけど、なんとか卒業にこぎつけた。

「ミコちゃん！」

「サトちゃん！」

「よかったね。卒業できて。」

「うん、マジでやばかったから、自分でも良くできたって思ったよ。」

「松村先生、けっこうかばってくれたんじゃない？」

「そうなのかなあ、あたしには厳しいこと言ってたけど。」

「そういいながら、いつも先生ミコのこと心配してくれてたからね。」

「そうなのかなあ……。」

松村先生はあたしの、いや「あたしたち」の憧れの先生だ。

歳は正確には知らないけど33か34くらい。細身だけど、スポーツマンで、学校ではいつもジャージで、学校以外ではラガー系のファッションだ。

なぜ、学校以外を知っているのかは、うちの家庭と関係がある。

雅紀と出会う少し前、もう半年くらい前になると思っけど、例によってあたしは義父と大喧嘩をした。そして家を飛び出してしまった。

どこにも連絡が出来ずに、携帯に入れていた先生のアドにメールをしてしまった。

別に先生と関係があったわけじゃなく、先生は生徒に人気があつて、けっこう皆先生のアドを聞きたがつて、あたしも先生からアドを聞いていた。

あいにくその日は土砂降りで、近くのコンビニに逃げ込んだものの、もう、時間も11時を回っていて友達に連絡するには遅すぎた。

その時フツと先生の顔が浮かんで考える間もなくメールをしてしまった。

すぐに返事が返ってきて、近くのコンビニにいることを伝えると今度は電話がかかってきた。

事情を話すと「そこにいろ。」とだけ言われて電話が切られた。

二十分くらいで先生が来てくれた。

「神子、なにやってんだ。」

先生の顔を見たときとたん急に安心して涙が出て、人目も気にせず先生に抱きついて泣きじゃくった。

黙って先生はあたしを受け止めて、しばらく抱きかかえてくれた。

ひとしきり泣いた後、

「とにかく車にいこう。」

そう言われてコンビニから出て、先生の車に乗った。

「ご両親も心配してるだろう。帰ろう。」

「嫌です！あんな父親のいるところに帰りたくありません。」

「そうは言ってもこのまま先生がどこかに連れて行くわけにはいか

ないよ。」

「・・・わかってます。別にいいです。このままほっておいてください。」

「そうはいかないよ・・・。」

そういつたまましばらく沈黙が続いた。

先生にしてみればいい迷惑なことはわかっていた。

先生には家庭もあり、子どもはいなかったがとてもきれいな奥さんがいた。

(携帯の写メを見せてもらったことがある)

それなのにこんな時間に生徒のためとはいえ家を出てきてそのまま帰らなかったらそれこそ家庭崩壊だろう。

「わかった。先生がご両親と話そう。一緒なら帰れるだろう。」

「えっ?」

「そうしよう。」

そう言っただけ先生はすぐに車を走らせた。

うちには家庭訪問にも来ていたから場所は知っていた。

すぐにうちに着くと戸惑うあたしの手を引いて家の前まで連れて行った。

「ごめんください。」

すぐに母親が出てきた。

「これは先生?!」

かなり驚いていたが、あたしが先生の後ろに隠れているのを見て

事情が飲み込めたようだ。

「だれだ！こんな夜中に！」

奥で義父の怒鳴り声が聞こえた。

あわてて母親が奥に消えてなにやら話をしていた。

「おお、これは先生ですか、失礼しました。うちの馬鹿娘がお世話かけたみたいで。」

『馬鹿はおまえだ！』と心の中でさげんだ。

「お嬢さんがなにかお父さんと喧嘩をしたとかで連絡があつたもんですから。」

「つたく馬鹿が、本当にすみません。先生にご迷惑をおかけして。」

他人の前ではいつも素直な『親』の振りをする。実際は父親らしいことなんて何一つしてないくせに……

「まあ、玄関ではなんですからどうぞお入りください。ちらかつてますけど。」

母親が先生に言った。

「そつそつ、どうぞ、どうぞ。」

父親も追随する。

「はあ、では少しだけ。」

先生も促されてうちに入った。

母親がお茶の用意をしに台所にいった。

「ところで、喧嘩の原因は何なんですか？」
先生が尋ねた。

「いやあ、たいしたことはないですよ。こいつが家を出るなんて言い出すから。いえね。高校を卒業したら家を出て独り暮らしを始めるなんて言うもんですからね。そんな金がどこにあるんだっていつてね。いやあ、お恥ずかしい話ですが、先生もご存知のようにうちは生活保護で私も母親も働けないもんですからね。」
父親が奥の座椅子に腰掛けながら、えらそうに言った。

「そうですか・・・神子、そうなのか？独り暮らししたいって言ったのか？」

先生に問いただされたが何も言えなかった。

別に何が悪いというんだ。

高校を卒業すればもう大人だ。

独りで暮らすことのどこが悪い。

そう思って問いただされた先生にも反発を感じた。

「お父さん、ミコさんも高校を卒業すれば一応は社会に出ることになります。独りで暮らしたいって思うのはイマドキのコなら普通にあることですよ。それほど珍しいことじゃないです。」
先生があたしをかばってくれた。

「しかし、うちにはそんなお金はないですから・・・。」
母親がお茶を持ってきながら言った。

「そうですか・・・神子、独り暮らしするにはお金がかかることはわかるよな。どうするつもりなんだ？」

「あたし・・・アルバイトでもなんでもするつもりです。それに・・・

・本当は大学にも行きたいんです。」

「アルバイトくらいで独り暮らしは難しいぞ。それに大学に行くなら、なおさら勉強しなきゃいけないし、アルバイトしている時間なんてないしな。少し考えが甘いんじゃないか？」

「・・・・・・・・。」

先生はいったいどっちの味方なんだ。やっぱり大人なんだ。どうせ、そう言ってあたしを言いくるめるつもりなんだ。

「ほれみる、先生がおっしゃる通りだ。世の中そんなに甘いもんじやない。アルバイトなんてしたって親の許可がなければアパートだって住めないんだぞ。」

父親が勢いづいた。

「しかし、お父さん、一つ方法がありますよ。大学を受験して奨学金を得ることです。奨学生には大学に通うための寮や学生会館を提供する制度もありますし、もし、大学に入るなら可能性はありますね。」

先生があたしをチラツと見て微笑んだ気がした。

「先生、この馬鹿娘に大学なんて行けるわけないじゃないですか。また、切れそうになった。それを察したのか、先生が遮るように言った。」

「お父さん、それはうちの高校を見くびられているのでは？うちは県下でも有数の進学校ですよ。ほとんどの子が大学に行きますし、神子さんもそのうちに入學したんですからそのくらいの実力はあるということですよ。今からしっかり勉強すればわかりませんよ。」

「ぐっ……。」

父親が行き詰った。

「でも、先生、奨学金なんてうちは生活保護ですから、利用は出来ないんじゃないですか？」

母親が水を差した。

「確かに今の基準では、生活保護の家庭は大学進学はできないようになっています。しかし、確か葵さんにはご親戚がいましたね。高津さんでしたっけ？ミコさんの伯母さんに当たる方でしたか、その方の養子になれば進学はできますよ。」

ビックリした。先生はそんなことまで知っていた。

しかも養子なんて。伯母さんとは昔から凄く仲がいいし、しかも叔母さんは未亡人で子どもがいらないからまんざら夢物語ではない。

「先生、うちの娘を養子に出せって言うんですか？こいつは一人っ子ですから葵の家を継いでもらわないと。」

「何もずつと養子にするということではないですよ。まあ確かにあまり良い方法とは言えませんが、大学進学のためにその間だけ籍を変えるのです。実は以前にも教え子にそういう方法で進学をさせたことがありますね。神子さんが本当に進学を希望しているのならそうしてあげるの親としての務めであると思うのですが。」

「……。」

父親が怒っているのが黙っていてもわかる。

「お母さんはどうですか？神子さんが進学するのはよくないことでしょうか？もちろんお金は奨学金で賄えます。それを返金するのは神子さんが社会人になってから自分で働いて返せばいいので、ご家庭にはなんら負担がありませんしね。どうでしょう？」

「はあ、お金がかからないのであれば、神子に進学はして欲しいですけど。」

母親は中学しか出ていない。

あたしが高校に受かった時は本当に誰よりも嬉しそうだった。だから、自分の分まで学校に行つて欲しいといつも言っていた。

「お父さんは？」

先生が苦虫をつぶしている父親に水を向けた。

「まあ・・・もし、神子が大学に入れるように勉強するなら考えますけど。しかし、独り暮らしはちょっと。」

「独り暮らしと言っても大学が管理するアパートとかですから、安心ですよ。女子と男子は別れていますから、同じアパートに男女が一緒になることはないですしね。」

「そ、そうですか、いずれにせよ。大学に入るためにしっかり勉強するんらの話です。」

父親が仕方なさそうに言った。

「どうだ、神子、勉強できるか？」

「はい、がんばります。絶対大学に受かります。」

「じゃあ、そういうことで、私はこれで失礼します。神子、学校に明日は遅刻してくるなよ。」

「はい、先生！」

それから、あたしは勉強を始めた。

正直この三年間、勉強というものはサボりにサボっていたため、高校一年の内容もわからない始末だった。

しかも受験まではもう半年しかない。
相変わらずお金はないので援交を続けながら、でも、今までよりは勉強をし始めた。

松村先生も放課後に勉強を手伝ってくれた。

先生の専門は数学だが、理科や英語も教えてくれた。

いつの間にか放課後は先生との「個人授業」の時間になっていた。といっても、他に何人があたしみたいな生徒がいたので完全な個人授業とは言えなかったが、それでも時々誰も補習をしない日があった。そんな時はあたし一人が先生との補習をしていた。

「わかるか、ここ？」

先生の顔がフツとあたしの顔に接近して、ドキツとする。

先生はあたしなんかのために自分の時間を割いて付き合ってくれる。

それもみんなの憧れの先生。

本当は先生に会いたいために補習を受けていた。

先生との会話が楽しくて、一緒にいたくて勉強に打ち込んだ。

時々夢に先生が出てきた。

夢の中の先生はあたしを優しく抱いて耳元で「神子、好きだよ。」と囁いて、優しくキスされる。

そして、いつの間にか裸のあたしの身体があっちこっちにキスされる。

そして、いよいよって時に目が覚める。

そんな夢を見ると、目が覚めるとあたしの身体は濡れていた。

先生に抱かれたい。

先生の顔が近づいた時に、何度誘惑してしまおうって思ったかしない。

でも、その都度先生の奥さんの顔が浮かんで、「だめだ」と言い聞かせた。

それにももちろん先生には援交のことなんか言っていないから、こんな穢れた身体を先生に捧げるわけにはいかない。

そう思って思い止まった。

そして受験の日、先生からメールが入っていた。

《やるだけのことはやった。自信を持って当たって来い！》
スポーツマンの先生らしかった。

そして雅紀からも、

《神子、おまえならできる！この半年頑張ったんだから、絶対神様は見捨てないよ！しっかり実力を発揮しておいで！》

これも雅紀らしかった。

神様なんてきつとあたしの名前とかけたんだ。

あたしのためにあたしを信じてくれる人のために頑張ろうって思った。

しかし、現実には甘くはなかった。

四校受験したが、一番最初の発表の日、見事に撃沈した。

そして、二校目、結果発表の日。

これもダメ。

落ちる度に父親のほくそ笑んだ顔が浮かんで悔しくて涙が出た。

このときのあたしは少しノイローゼみたいだった。

雅紀が折角会ってくれて励ましてくれるのに、自分のことをずっとけなしていて雅紀が勇気付ける言葉を言ってくれても、反発して泣いてばかりいた。

三校目、これもダメだった。

もう、これで終わったと思った。

実はこの三校目はすべり止めのつもりで受けた。
それが落ちたのだ。

四校目は第一志望の大学だった。
これで全て終わったと思った。

もう、ヤケになっていた。

雅紀にも先生にも顔向けできない。

どちらからも結果を尋ねるメールが来ていた。

無視した。

とても返事を返せる気分ではなかった。

渋谷の街をふらついた。中年の親父が声をかけてきた。

「君、女子高生？よかったらお小遣いあげるから、おじさんと食事してくれないかな？」

もう、どうでもよかったあたしは「いいですよ。」と言って付い

ていった。

「ほんとに！いやあうれしいな。断られると思ったから、君みたいな可愛い子が付いてきてくれると思わなかったよ。」
「そんなようなことを言っていた気がしたが、まったく耳には入っていなかった。」

食事と言うから付いていったら、居酒屋だった。黙っているあたしに勝手に親父が話しかけてくるがあたしは相槌を打つだけであると勝手に親父がしゃべっていた。

あたしはお酒を断っていたので、親父は自分だけほろ酔い加減になって、「そろそろ、出ようか。」と席を立った。

店を出ると案の定、道玄坂のホテル街に向った。どうでもよかったあたしは促されるまま歩を進めていた。

「こ、ここでいいかな？」

黙っていると、親父はあたしの手を引いてホテルに滑り込んだ。

部屋に入ると親父は、

「汗かいてるからシャワー浴びてくるね。冷蔵庫の飲み物とか飲んでいいから。待っててね。」

そういつて服を脱ぎ出すとさっさとシャワー室に消えていった。

あたしは何をしてるんだろう。

先生の顔、雅紀の顔が交互に浮かんでくる。

死んでしまいたい。

二人があんなにあたしを信じてくれているのに、裏切っただけだ。

きつと雅紀は何度も電話をくれているに違いない。

でも、携帯の電源を落として連絡がつかないようにしていた。

親父がシャワー室から出てきた。

「君もシャワー浴びる？」

「いいです。」

とても動く気にはなれなかった。

「そ、そう、いいよ別に、女子高生の身体の匂いが消えなくていいしね。おじさんが色々教えてあげるから。」

そついうといきなり親父はかぶさってきた。

乱暴にキスをされ、舌が入ってきた。

酒臭さで咽むせそうになったが、耐えた。

適当に胸を揉んできたと思っただけで下半身に手を差し入れてきた。

まったく感じない。

「こ、怖いのか？大丈夫だよ、おじさん優しいから。そつだ、君名前は？名前を呼んだ方が気分が出るからさ。」

「葵です。」

「アオイちゃんか、可愛い名前だね。君に似合ってるよ。」

すでに伯母さんの養子になっていたから本当は違うのだが、苗字と名前を勘違いしたらしい。

別にどうでもよかったから、そのまま何も言わなかった。

「いいかな。入れるよ。ちゃんとゴムしてるから。」

ほとんど反応していないあたしの身体はいきなり入ってきた親父のモノに激痛を感じた。

「うっ！」

あたしのうめき声を感じていると勘違いした親父が嬉しそうに言った。

「どうだ、おじさんのモノでかいだろ。たいていのコはこれで感じるらしいから。気持ちいいだろう。」

もう、何もかもが嫌だった。

このままこの親父の首を絞めて殺してあたしも死のうかと思った。

親父はお構い無しに腰を動かしてくる。

「どうだ、気持ちいいか。感じてるよな。いくよ。俺もいくよ！」
そういつて5分もしないうちに親父は果てた。

「ふう、タバコすつていいかな？」

胸を肌蹴させて、パンツを取っただけの格好でされたので、事が終わったあとすぐに服を直した。

「君、高校生だよな。どうして援交なんかしてるの？お金に困ってるの？」

始まった。

大抵の親父は自分が満足を得られると次は「なんで援交してる？」と聞いてきて、そのうち説教をしてくる奴までいる。」

『てめえみてえな親父がいるからしてるんだよ！』
そういつて張り倒したかったが黙っていた。

「ふう、まあ、事情は聞かないけど、いいことじゃないな。はい、じゃあ三万でいいかな。食事も奢ったしね。」

そういつて親父はあたしのひざの上に三万円を投げ出すように置いた。

「じゃあ、失礼します。」

あたしは、そういつて、ホテルを出た。

親父が玄関を出るところで、

「よかつたらまた会えるかな？メルアド……。」
そういつていたが無視してドアを閉めた。

渋谷の街はすっかり夜の賑やかさに変わっていた。駅までの道のりで何人ものキャッチャーやAVのスカウトやホストやナンパが声をかけてきた。

全てを無視して歩いた。

駅に近づいたがフツと『帰れる場所なんかない』ことに気づいた。
駅前のスタバに入ってコーヒーを飲んだ。

窓の外には楽しそうなカップルやナンパに夢中な男どもやキャバ嬢がでかい声で仲間とワイワイやっていた。

『どうしよう、もう、誰にも会えない。本当にこのまま死んでしまおうか』と考えていた。

「どうしたの？さっきから深刻な顔して？」

女の人だった。ちよつと驚いた顔をしていると、

「ごめん、ごめん、びっくりさせちゃったね。なんか死にそうな顔してたから心配になっちゃってさ。」

かなり派手めの人だったが、目が優しそうだった。

その人はあたしの横に座って

「タバコ吸っていい？スタバってこの外の席じゃないとタバコダメだからさ。」

そう言つとメンソールの長めのタバコに火をつけた。

「よかったら話さない？なんかワケ有りそうだし。高校生？」

「はい。」

「可愛いね。いいなあ、あたしも三年前は女子高生してたんだけどなあ。」

「クスッ」

言い方がおかしくて笑ってしまった。

「ひどーい、なーに自分が女子高生だと思って、あたしのこと馬鹿にしてるでしょ。」

「ご、ごめんなさい。」

「へへっ、うっそー、ビビッた？笑ったほうが可愛いよ。あんだ。」「なんだかホツとした。」

そして、今までの受験のこと、家庭のことや援交のことまでその

人に話してしまった。

「そうなんだ。それは辛いよね。あたしも家がロクなもんじゃないからさ、今じゃ風俗嬢だよ。今日は早上がりだったから、ちよつと街をふらついていたんだけどね。」

風俗の人だったんだ。

でも、見た目は派手だが、顔立ちはきれいな人だ。

「そうそう、自己紹介してなかったね。あたし、唯、本名だよ。源氏はミサキだけどね。あつ源氏名ってわかる？お店での名前ね。」
「はい、わかります。聞いたことあるし、じゃあ、どっちで呼べばいいですか？」

「ど、どっちってそりゃ本名で呼んでくれよー。外でまで源氏名で呼ばれたかないよ。」

「そ、そうですね。ごめんなさい。」

「キャハハ、可愛いね。えっと・・・」

「あつ、神子です。神様の子って書いてミコです。」

「ミコちゃんか、神の子かあ、なんか神聖な感じだね。」

「そんなことないです。穢れてますし。」

「おいおい、援交のことそんな風に思ってるの？じゃあ、あたしなんか穢れに穢れてることになるよ。」

「あつ、そんなつもりじゃ、ごめんなさい。」

「もう、さつきから謝ってばかりだね。しつかりしろよ。いいじゃない、援交だろうが風俗だろうが、悪いけどお金のための手段でしょ？それにこんなことババアになってからは出来ないからね。自

分の夢のためだよ。あと1年も続けたらあたしは店を持ちたいんだ。洋服の店ね。ブティックっていつたらかっこいいけど、アクセとか小物も扱うの。できればこの渋谷に作りたいたいんだけどね。」

「すごいですね。そんなにお金貯めたんですか？」

「うん、もう1000万貯まったよ。」

「1000万?!」

「そう、その代わり身体はボロボロだけどね。ほとんど毎日出勤だし、今月なんか四日しか休んでないよ。」

「えらいですね。自分の夢のため一生懸命じゃないですか。頑張っているのかっこいいと思います。」

「キャハ、褒められちゃった。風俗嬢なのに、褒められるなんて久しぶりだよ。」

「本当に凄いです。尊敬します。」

「おいおい、そこまで言うと嘘っぽいな。」

「そんなことありません！」

思わず声を荒げてしまった。

「びつくりしたあ、そんなにムキにならなくたって・・・。」

「い、ごめんなさい。でも、本気で尊敬したんです。」

「わかったよ。本当にミコは真っ直ぐなコなんだね。うらやましいよ。」

「そんなことないです。何でも中途半端だし、夢だって・・・。」

「そうそう、神子の夢は？援交してるのは夢のため？」

「援交はお金がないからしてるのもあるんですけど、夢はあるんです。」

「なに？」

「恥ずかしいんですけど、歌・・・唄いたいです。」

「歌手ってこと。マジで。そりゃ大変だよ。何かコネとかツテはあるの？」

「いえ、特にはないです。」

「そっか、あたしの友達にもそういう芸能関係の事務所とか入ったけど、未だにデビューできないからね。もう、三年になるけど・・・。」

「そうですね・・・難しいですよ、やっぱり。」

「ごめんね。励まさないやいけないのに落ち込ませちゃったね。でも、現実には厳しいからね。でも、唄いたってことはうまいんだよね？カラオケ行こうか？」

「えっ？あつ、はい。」

「そうそう、ミコはどこ住んでんの？」

「市川です。」

「市川って千葉？じゃあ、もう終電ヤバイじゃん。帰らなくていいの？」

「帰れないんです。帰るところなんてないですから。」

「受験のことね。まっ、いつか。でも、親は心配するよね。ちょっとミコの携帯貸して。」

「えっ、あ、はい。」

そういつて携帯を渡すとなにやらいじりだして電話をかけた。

「あ、もしもし、葵さんのお宅ですか？私、ミコさんの友達で荻野と言います。どうも。お母様ですか？あ、すみません。久しぶりにミコちゃんと会ってたら遅くなっちゃって。ちよつと終電逃しちゃったんですよ。はい、だから今日はうちに泊まってもらいますので。あっはい、ミコちゃんですか、いますよ。ここに、はい、ちよつと待ってください。」

そういつとウインクをしてあたしに携帯を渡した。

「あつ、うん、そう、荻野さんちにお世話になります。だから心配しないで。うん、うん、わかった。明日連絡する。うん、じゃあ。」
「へへっ、なかなか演技派でしょ。ちよつとお嬢様風だったでしょ。」

「ぶっ。」

思わず噴出してしまった。お嬢様つてところが笑えた。

「おいおい、感謝の言葉はないのかね。君は。」
「あつ、ごめんなさい。ありがとうございました。」

「よしよし、わかればよい。では、カラオケにいくよー！」
「はい！」
唯さんはすつごくいい人だった。それにあたしの歌をすごく褒めてくれた。

「ミコすごいね。マジ鳥肌立ったよ。ちよつとそこらのアイドルなんか相手にならない歌唱力だよ。デビューできるんじゃない、マジで。」

「言いすぎですよ。」

そういいながらも凄く嬉しかった。
何よりも歌を褒められるのがあたしには最高の喜びだったから。

「いやいや、あたしも実は結構音楽は聴くほうなんだよね。アイドルっぽいとか、流行のじゃなくてオルタナとか洋楽専門なんだけど。そのあたしが驚くんだから、これはマジだよ。ミコは本当に神様の声を持つてるね。」

『神様の声』

そんな褒められ方をしたのは初めてだった。すつごく嬉しかった。

「そんな、まだまだですよ。」

「いや、ねえ、もう一曲入れて。」

そう言いながら、一晩中唄い通した。そして、さらに驚かれた。

「あれからもう三時間にもなるのに、全然声が衰えないね。むしろ艶が出てきたっていうか、ますます声が出てきたね。あんた本当に神の声だよ。歌手になれるよ。ううん、アーティストって感じかな。ミコ自分で曲とか作るの?」

「あつ、はい、ちよつとだけ、でも、まだまだ曲数少ないですけど。」

「マジで!すごいよ、それ。曲書けるんだ。ちよつとアカペラで唄ってよ。」

そういつて唯さんはオリジナルの曲を聴いてくれた。

「ちよつと、マジで・・・涙出ちゃったよ。」
本当に唯さんは泣いていた。

「それ、本当にミコが作った曲?どうやって作ったの?」

「ピアノですけど。」

「聴いてみたい！ミコのピアノでその曲聴いてみたいよ。あんたライブ活動とかしてるの？」

「えっ、バンドやってたんですけど、色々あって今は休止中です。」

「マジで？もつたいないね。ミコならソロでいけるよ。ライブハウストかブッキングしてみたら？」

「え、でも、まだ曲数も少ないし、聴かせられるようなアレンジも出来てないし。」

「じゃあ、路上でもいいじゃん。もつたいないよ。そのまましておくの。今は路上から成り上がるアーティストも多いし、やらなきゃ損だよ。」

「嬉しいです。お世辞でもそんなに言われたの初めてですから。」

「悪いけどあたし、お世辞は苦手なんだ。本当はカラオケに連れてきて、たいした歌じゃなかったら、歌手の夢なんてあきらめさせようと思ったんだよ。現実を見ろってね。でも、すごい誤算、あたしが感動させられたよ。今の日本にはないタイプだよミコの声は。」

「そこまでは……。」

さすがに照れくさくなった。

「マジだった！」

そういつて強く両肩を叩かれた。

「ちょっと親父みたいなりアクションだった？でも、マジはマジです。あんたやってみなよ。本当にもつたいないよ。もっと大勢の人に聴かせたいよ。ミコの歌。」

「本当ですか？やってみようかな・・・。」

「うん、ライブハウスでも、路上でも、とにかく聴かせなきゃ。」

「はい！なんか勇氣出てきました。ありがとうございます。」

「よし、ミコらしい笑顔が出てきたね。その顔、可愛いよ。」
そう言っていきなり唯さんはキスしてきた。

「アハハ！ビックリした？可愛いんだもんミコってば。あつ大丈夫だよ。レズじゃないから。あんまりミコが可愛いからさ。」

「あつ、いいです。レズでも。唯さんなら。」

「アハハ、ミコも言ってくれるね。よしよし、今日からミコはあたしの妹だ。欲しかったんだ妹。」

「あたしもお姉さん欲しかったんです。嬉しいです。」

「じゃあ、姉妹になったんだから敬語は要らないね。タメ口でいいよ。」

「はい、よろしくお願いします。」

「おいおい、言ったそばから敬語じゃん。」

「あつ、ほんとだ。えへへっ」

「アハハ、本当に可愛いね。ミコは。」

結局一晩中カラオケを唄っていて、始発の時間になって帰った。唯さんとメルアドを交換して、連絡を取ることにした。

いつもは澱んでいるはずの渋谷の空が凄く澄んでいて、朝の空が紫色に輝いていた。

『あたしは歌手になる!』
そう、この空に誓った。

「神子心配したよ。夕べはどうして携帯切ってたんだよ?」

雅紀からの電話だった。

今日は土曜日だから雅紀も仕事が休みだったことを思い出した。

「ごめんなさい。三つ目も落ちたの。それで・・・」

「落ち込んでたんだ。でも、連絡くらいはして欲しかったな。心配で寝れなかった。このまま神子が居なくなっちゃうんじゃないかと思っ、一睡も出来なかったよ。」

「ごめんなさい。一晩中友達とカラオケにいたんだ。」

「ふう、ならいいけど、今度からどんなに落ち込んで連絡だけは取れるようにしていてね。今日は会えるかな?」

「うん、あたしは大丈夫だけど、マークン寝てないんでしょう? 身体大丈夫?」

「神子に会えば元気になるから大丈夫!」

やっぱり雅紀はこんなあたしのことを本気で思ってくれている。

なのにあたしは一晩中連絡もせずカラオケに行っていた。さらに、援交までして・・・。

「どうした? 会えるの嬉しくないの?」

「えっ? そんなことないよ。嬉しいよ。」

「なんかまだ落ち込んでるのかな? まだ一校残ってるじゃん。いくら第一志望だって、問題によっては受かる可能性はあるし、結構出

来たようなこと言ってたじゃない。」

雅紀は受験のことで落ち込んだんではと思って。もちろんそれもあるけど、本当は雅紀を裏切ったことが一番気にかかっていた。

「とにかく会おう。十時頃には迎えに行くから。支度しておいてね。」

「うん、わかった。待ってるね。」

「うん、じゃあ後で。」

そう言っただけで電話を切った後、もの凄い罪悪感と自分に対する嫌悪感でその場で座り込んでしまった。

シャワーを浴びて身体を何度も何度も洗った。

夕べの親父の体臭が残ってる気がして気が狂ったように同じところを何度も洗った。

でも、心の中の罪悪感は消えなかった。

いよいよ、最後の発表の日、あたしは雅紀の家に行った。

「神子覚悟はいい？もう一度言うよ。万一落ちていてもがんばって来年リベンジする。だから、落ち込まない。いいね。」

「うん、わかった。浪人しても、もう一度受験するよ。がんばるよ。」

「よし、じゃあ、見るよ。」

今は便利な時代だ。昔は受験結果を学校に行って掲示板に書かれている受験番号を探したらしいが、今はインターネットで発表して

いる。

第一志望の大学のサイトにアクセスした。
『受験結果』サイトの掲示板があった。

「いいね。神子？」

「うん。」

《カチツ！》

クリックするとはばらくして受験番号の掲示板が記された画面が出てきた。

手元の受験票を見る。『1105』

「えっ？あ！あつたよ！」

「えっ！見せて」

そういつてあたしの手から雅紀が受験票を奪い取った。

「ほんとだ！1105！間違いない。あつたよ！神子！」

その瞬間もうあたしは泣いていた。

しかも大声を出して恥ずかしげもなく顔をぐしゃぐしゃにして。

「神子！よかった。本当に良かったな。」

そう言つて雅紀も泣いてくれた。

そして、あたしの身体をすっぽりと包んで抱いてくれた。雅紀の胸で存分に泣いた。

十分も経つただろうか、ようやく落ち着きを取り戻して、雅紀の

胸から顔を上げた。

「雅紀ありがとう。雅紀が見守ってくれていたおかげだよ。」

「神子が努力したからだよ。ずっと頑張ってたから。大丈夫だって思ってたよ。」

「ほんと?」

「正直言うと三つ落ちたときにはヤバイかなって思った。」

「やっぱ、そくだよね。無理ないよ。まさかあたしだって第一志望だけ受かるなんて思わないもの。」

「だよ。でも、受かったらこっちのもんさ。他の大学は縁がなかっただけだよ。」

「そうだね。行きたいところに行くのが一番いいもんね。」

「そうそう、ハハハハ!」

「エへへへ。」

「やっと神子らしい笑顔が復活したね。よかった。」

そういつて雅紀はいきなりキスしてきた。あたしもそれを受け入れた。

「よかったね。ミコちゃん。大学も受かったし、卒業も出来たし。」

「うん、嘘みただよ。サトちゃんにも散々愚痴言っごめんね。」

「何言ってんの。お互い様でしょ。私だっていっぱい愚痴聞いてもらったしね。」

「そうだよ。サトちゃん凹むと人の話し聞かないから。」

「ひどーい！それだってお互い様じゃん。ミコちゃんだって人の慰めとか聞かないんだから。」

「そうだったけ？」

「ずるいんじゃない。自分だけ忘れちゃって。」

「アハハハ。」

「ウフフフ。」

「お！二人ともおめでとう！よかったな。神子、里子。」

「先生！」

「そうだ。松村先生には感謝しても仕切れないほど恩がある。」

「松村先生があれだけ放課後の勉強に付き合ってくれたからこそ受験だって合格できたんだ。」

「ありがとうございます。先生。先生の補習がなければ絶対合格できませんでしたから。」

「そうだな。俺に感謝しろよ！アハハハ。」

「そうだった先生は本当に嬉しそうだった。」

「でも、神子が頑張ったからだよ。いくら補習したって本人ががんばらなきゃ俺たち教師はなすすべもないからね。やっぱり結局は本人の努力の成果だよ。自信持って大学に行けよ。」

「はい、先生！三年間ありがとうございました。」

「担任は一年だけだぞ。」

「でも、数学はずっと先生でしたから。」

「そっか、そうだったけ？」

「ひつどーい先生、忘れたんですか？」

「うーん、里子は三年間一緒だったけどけどな。」

「先生、ちゃんと私のこと見ていてくれたんだ。」

里子が嬉しそうに言った。

「ひどすぎる。あたしだつてずっと先生のこと見てたのに。」
「言ってから思わず恥ずかしくなった。うつむいていると、」

「嘘だよ。神子も見てたよ。一年の一番初めに当てたとき、しっか
り黒板に解答書いてくれたよな。その時、お！この子はできるなっ
て思ったよ。」

「ほんと！先生、ちゃんと覚えててくれてたんだ！」

「なーんだ。喜んで損した。ミコちゃんのこと覚えてたんだ先生。」

「アハハ、可愛い子達はすぐに覚えるのさ。俺だつて教師の前に男
だからな。」

「エー！先生！イメージ狂っちゃう。」

里子が言った。

「じゃあ、もう卒業したんですから。あたしと付き合ってください
か？」

「おいおい、まだ三月一杯は高校在籍だからな。教え子と付き合う
のはご法度だ。それに俺には愛する女房がいるからな。」

「やっぱ、先生は奥さん一筋なんですね。」

「ちょっとガツカリしたが、でも、そんな気楽な会話を先生とでき

るのがすごく嬉しかった。

『憧れは憧れのままが一番いいのかも』って思った。

「先生！」「松村先生！」

他の生徒たちが先生を取り囲み始めた。

他の生徒と話し始めた先生にそっと一礼をしてあたしはその場を後にした。

「神子！卒業おめでとう！」

「マーくん？！仕事は？」

今日は平日なのに、雅紀が大きな花束を抱えて校門で出迎えてくれた。

「サボった。こんなおめでたい日に仕事なんてしてられないよ。」

「そんな、まずいよ。こんなことで休むなんて。」

少し困ったが、内心その場で雅紀に飛びつきたいほど嬉しかった。

「迷惑だった？」

雅紀は少し拗ねたように言った。ちよつと胸がキュンとした。

「そんなことないよ。嬉しい、ありがとう！」

やっぱり衝動が抑えられなくて花束を抱えたまま。雅紀の胸に飛び込んだ。校門の前ということも忘れて。

「あー雅紀さんですか？こんにちは、私、里子です。」
サトちゃんがいきなり後ろに立っていた。

「わあ、サトちゃん！びっくりしたあ。恥ずかしいじゃん。」
急いで雅紀から離れた。

「あつ、君がサトちゃんだね。神子から話は聞いてるよ。神子とは大親友なんだよね。」

「はい、ミコちゃんとはずっと親友です。」

改めて「親友」なんて言われると少しくすぐったかったが、サトちゃんからそう言われてすごく嬉しかった。

「雅紀さんお出迎えですか？いいなあ、素敵な彼氏がいて。ミコちゃんうらやましい。」

「そんなことないよ。あたしも知らなかったし、マークくんが来るなんて聞いてなかったから。」

ドギマギしてわけのわからないことを応えてしまった。

「そう、神子には内緒にしてたから。驚かせようと思って。そうだよ。よかったらサトちゃんも一緒に車で帰らない？途中で飯でも食おうよ。お祝いしよう。」

「え？そんな悪いです。二人の大切な時間なのに。」

「そんなことないよ。二人の時間は一杯あるから。サトちゃんもおいでよ。一緒にお祝いしようよ。」

ちょっと予期せぬ展開だったが、サトちゃんなら一緒にいてもい

いと思った。むしろ一緒にお祝いしたかった。

「ほんとに？」

「あたしがサトちゃんに嘘つく？」

「うーん、わかった。すみません。雅紀さん、じゃあ少しだけお邪魔します。」

三人で車に乗って、帰りがけにファミレスに寄った。

「ほんとに、こんなとこでいいの？」

雅紀が少し不満そうに言った。

「いいの、いいの。あたしたちはいつもファミレスで青春語り合ってたんだから。ね！」

「そうそう、いいんですよ。あたしたちの青春のシンボル、ファミレス！」

「おかしな子達だな・・・じゃあ、ここでいっか。」

「じゃあ、そうと決まればいこう！」

あたしが促した。

「うん、いこう！」

サトちゃんも続いた。

「はいはい。」

少し物足りなさそうに雅紀がついてきた。

店に入って注文を済まして三人ともドリンクバーで飲み物を取ってきた。

「では、二人の卒業と大学進学を祝って！乾杯！」

「乾杯！」

お酒ではないのが雅紀には少々不満だったようだが、二人を祝福してくれた。

「本当に良かったね。二人とも大学も受かって。」

「はい、ミコちゃんと大学は違っちゃったけど都内で帰り道にミコちゃんの大学があるから寄れますし、また度々会おうって言ってるんですよ。」

「そうだよな。けっこう毎日会っちゃったりしてね。」

「そうそう、毎日会っちゃおうね。」

「やけるなあ。俺の出番はないって事？」

「そもそも、私は雅紀さんより先にミコちゃんとは付き合っていたんですから。優先順位は私です。ね！ミコちゃん？」

「そうそう、マーくんはサトちゃんの次だからね。仕方ないな。」

「はいはい、仕方ないですね。」

「アハハハ、雅紀さんって本当にいい人ですね。嘘ですよ。二人のお邪魔は致しません。」

「言つなあサトちゃんも。さすが神子と三年間付き合ってきたことだけのことはあるな。」

「どういう意味よ？」

「ちょっとムツとした。」

「それだけミコちゃんと付き合うのは大変って事ですかあ？」

「いや、そういうわけじゃ・・・そうそう、お祝いだからね。ケン力はやめよう。」

「吹っかけてきたのはマークくんなんだからね。」
ちよつと拗ねる振りをした。

「ごめんよ。そんなつもりじゃ。」

「プツ、マークくん、可愛い。」

「プツ、ほんと可愛いですね。雅紀さん。」

「な、なんだよ二人して大人をからかうなよ。」

「私たちの作戦にまんまと掛かりましたね。ミコちゃんと二人でいるときも、いつも雅紀さんが負けてるんですか？」

「そ、そんなことないよ。俺はいつでも亭主関白さ。」

「そうは見えませんが・・・どう、ミコちゃん？」

「さあ、本人が言うんだからそうなんじゃないの？」
ちよつと冷たくあしらってみた。

「神子ぁ・・・。」

「プツ！ほんとミコちゃんが立場上ですね。雅紀さんも大変だあ。」
すっかり雅紀はあたしたちのペースにハマっていた。

それから二時間くらいファミレスに居座って話し続けた。

「さつきミコちゃんと三年間付き合ってたって言ってましたけど、本当は二年間なんですよ。」

里子が話し出した。

「私たちが知り合ったのは2年生の時だったんですよ。それに最初の方はそんなに仲良くなかったんだよね。」
あたしに水を向けた。

「うん、そうそう、仲良くなったのは修学旅行くらいからだよね。」
「そう、同じ班になって、一緒の部屋に泊まったあたりから話すようになったんだよね。」

「へえ、そうなんだ。やっぱり夜の恋バナとかから？」

「まあ、そうですね、恋バナってほどではないですけど、むしろ男の子の話題より二人の将来について語ったんですよ。ね？」

「うん、なんか二人とも目指してるものは全然違うんだけど、なんか気が合ってたんだよね。それにすごく話しやすかった。」

本当に高校に入ってから友達らしい友達もできずに表面的に付き合ってた人ばかりだった中で里子だけは妙に気が合った。

「そうなんですよ。全然夢も違うし性格も違うんですけど・・・なんていうか、根底に流れているものが一緒っていうか。難しくてもうまく言えないんですけど。」

「あーわかる気がする。俺もそういう友達一人いるよ。高校の時の友達なんだけど、今は会っても一年に一度会つか会わないか位なんだけど、それでも会つと全然違和感がなくてすぐに高校時代に戻って話し始めちゃうんだ。」

「いますよね。そういう友達って。わかってくれます？」

「うん、わかる、わかる。そういう友達はきつと一生付き合えるよ。」

「だって、ニコちゃん。一生私と付き合うんだよ。」

「光栄の至りだわ。これからもよろしくね。サトちゃん！」

「ほんとにそう思ってる？なんか怪しいな。光栄の至りなんて。」

「あれ？ばれた？」

「ひつどーい！雅紀さん何とか言ってください。ミコちゃんたらいつつもこうなんです。肝心のことは誤魔化すんですよ。」

「それは照れくさいからだよ。神子？」

見抜かれていた。

本当は嬉しくて、嬉しくてたまらないことがあるとかえって覚めたことを口にしてしまう。

悪い癖だ。

「わかってますけどね。本当は飛び上がりたいくらい嬉しいことがあっても覚めたこと言っんですよ、ミコちゃんは。」

里子にもばれていた。

「はいはい、その通りです。あたしは照れ屋なの！」

「わかってる！」

雅紀と里子が同時に言った。

「アハハハ！」

ひとしきり笑った。

ずっとこんな時間が続けばいいのに。

またあたしの悪い習慣が首をもたげてきた。

こういう楽しい時間はいつか終わりが来る。

だから楽しいことなんてなくてもいいのに。って考えてしまう。

でも、今は少し違うように考えられるようになった。

この楽しい時間は永遠ではないけど、また同じように楽しい時間

を別の空間で持てばいいんだ。

この三人の絆はこれからも続くから。
いや、あたしが続かせるから。

「ご馳走様でした。本当にすみません。お邪魔しちゃって。御飯までご馳走になっちゃって。」

「何言ってるの。最高に楽しかったよ。神子だって大喜びだよね。」
「うん！元氣ハツラツ！すごい楽しかった。また絶対三人で会おうね！」

「ほんと？嬉しい！あたしも三人で話したい！また会ってくださいか？雅紀さん！」

「もちろん！俺もこんなに楽しかった時間は久しぶりだよ。これからも三人で会おうね。」

「ね！サトちゃん。大丈夫でしょ？雅紀はこういう人なの？」

「うん、安心した。ずっと一緒にいてね。雅紀さんと。」

「うん、ずっと一緒にいるよ。」

「おいおい、どういうこと？話が見えないんだけど。」

「実はね。正直言うとサトちゃん、マーくんのこと吟味しに来たのもちろん会ったのは偶然だけど。ずっとあたしがマーくんのことを話す心配してくれてたんだ。やっぱり歳も離れてるし、本当にその人でいいのかって。でも、あたしは自信を持っていい人だよ。って言ってたから。それを証明するために一緒に話してもらったんだ。」

「え？そうなの？」

「ごめんなさい。実はそうなんです。私、ミコちゃんのこと大好きだから。幸せになって欲しいから。ついつい、男の人と付き合ってたって聞くと、その人がどんな人か、ミコちゃんを幸せにしてくれる

人が気になっちゃうんです。それで、偶然校門のところで雅紀さんとお会いできたので、一緒についてきて吟味させてもらったんです。ごめんなさい。疑ってしまってます。」

「へえ、驚いた。じゃあ、いつか二人で俺に会う予定だったんだ？」
「うん、ごめんね。黙ってた。たまたま今日マーくんが来てくれたから、さっき校門のところでマーくんがサトちゃんと話してる後ろでサトちゃんに目配せして合図送ってたの。今日一緒においでよって。」

「あんたたちはエスパーか？」

「え？なにそれ？」

「いや、その、つまり目配せで会話してたってことは超能力者かと……」

「プツ！なーにそれ？親父ギャグ？」

「アハハハ、それはわかりませんでした。雅紀さん、やっぱり人ですね。」

「なんでそれでいい人かな？……」

「アハハハ。」

「ウフフフ。」

「ありがとうございます。サトちゃん。俺神子のことちゃんと幸せにするよ。」
「ありがとうございます。二人なら大丈夫です。私もそう思ってますから。」

「また、一緒に遊ぼうね。今度は食事だけじゃなく、どこかに遊びに行こうね。」

「おーいいね。そうしよう。俺が車出すからドライブでも何でも行こうー」

「はい、お願いします。一緒に連れて行ってください。」

「OK!じゃあ、今日はサトちゃんのうち近くまで送ってくよ。」

「え、近くの駅でいいですよ。これ以上邪魔しちゃ悪いし・・・」

「サトちゃん!雅紀の性格、もう知ってるでしょ?」

「でもお・・・。」

「三人で、もう少しだけこの楽しい時間を。ね!」

「はい、じゃあ、お願いします。」

楽しい時間がもう少しだけ延びた。この時間のことは一生忘れな
い。

「神子、改めて、おめでとう。また一步大人になったね。」

「マークくん、ありがとう。本当にマークくんがいてくれたからこそま
で来れたよ。」

里子を送った帰り道、車の中で雅紀と話した。

「そんなことないよ。ここまで来たのは神子がちゃんと努力したか
らだよ。」

「うっん、マークくんがいなかったら、きつとあたしは今まで通り、
目標もなく生きていて、援交して金稼いで・・・。」

「違うよ。神子には夢があるじゃない。大学に行けたのは良いこと
だけど、それが夢ではないだろ?本当の夢はこれから掴むんだろ?
たぶん、その夢のおかげでここまで来れたんだよ。だから、やっぱ
り神子が頑張ったからだよ。」

「ありがとう。これからも頑張るよ。」

「うん、それと、俺以外の人、サトちゃんや松村先生にも感謝しなくちゃね。」

「うん、そうだね。感謝してる。」

「人は独りでは生きていけない。俺ね。離婚して、独りぼっちになつて、本当にそう思ったんだ。」

「マークん……。」

「でも、神子と出会って、本当に良かった。そして、助かった。神子がいなかったら俺自身どうなっていたか、おそらく、援交みたいなことをずつとしながら空しさを埋めながら生きながらえていたかもしれない。そして、辛くなって死んでいたかも。」

「そんなことない!」

「神子……。」

「そんなことない。マークんはちゃんと自分を持つてるから。あたしがいなくてもきつと立ち直つてたよ。頑張れる人だよマークんは。」

「ありがとう。でも、本当に神子と会えたことは感謝してる。」

「あたしだって……お互い様だよ、それは。」

「そうだね。よかったよ、本当に。これからもよろしくな。」

「こちらこそ。」

「ウフフフ。」

「アハハハ。」

本当に雅紀と会えてよかった。

心からそう思っている。

雅紀もあたしのことを大切に思ってくれている。

でも、そんな雅紀をあたしはまだ裏切っている。

いつまでもその気持ちが拭えなかった。

エピソード8：同棲

「荷物はこれで全部？」

「うん、本当はもつと持って行きたいけど。」

「うーん、これ以上はちょっと・・・。」

「だよな。うん、いいよ、これで。」

ついに雅紀の家で同棲することになった。

そのための荷物運びに雅紀がうちまで来てくれた。もちろん、父親がいないのを見計らって。

「すみませんね。娘がお世話になります。」

母親が出てきて挨拶をした。

母親にだけは雅紀との同棲のことを言った。

初めは心配していたが、説明するうちに納得してくれた。

あんな父親の元に母だけを残すのは気が咎めたが、今は許して欲しい。

いつか、必ず母親だけはあたしが面倒をみると決めている。

「いえ、そんなことないです。私こそ勝手にお嬢さんを連れて行ってしまつて申し訳ないです。」

「いえいえ、わがままに育ててしまった娘ですから。ご迷惑にならなければいいですが、よろしく願います。それに、あなたのような方なら安心ですから。」

雅紀の誠実な人柄が母にも伝わったらしい。

「いえ、そんな。でも、お嬢さんはしっかり守りますから。」
『守る』なんて、と思いながら、その言葉がちよっと嬉しかった。

「じゃあ、失礼します。」

そういつてあたしと雅紀は荷物を詰めた車に乗って、母親の残る実家を後にした。

「よし、これで全部だな。ふう……さすがに部屋が狭くなったな。」

「ごめんね。」

「いや、皮肉じゃなくて、物理的にね。少し整理すればもう少しは空間が出来るかな。」

「あたしも片付けるから。」

「そりゃ、そうしてもらわないとねえ。」

「ひどーい、なーにその言い方。あたしはどうせお荷物ですよ。」

「うそうそ、やっと、二人で生活できるね。半年間この日を心待ちにしたよ。」

「ほんとにいい？」

「本当さ。ただ……この荷物の多さは誤算だったけど。」

「すみません。」

「はいはい、女の子だもんね。荷物はあって当然だよ。それに生

活を始めたらもつと荷物増えるかもだし。いつそ引越すか。」
「それ、賛成！引越そう！」

「まあ今は無理だけど・・・金ないしね。」
「そっか・・・お金要るもんね。」

「おいおい、そんなに深刻にならなくてもいいって。とにかく今はここでどう二人で暮らすかを考えよう。」
「うん。」

折角の『新生活』と思っていたが、現実はそんなに甘いものではなかった。

雅紀の部屋は十畳くらいあるとはいえ一人暮らし用のワンルームだから、荷物が増えた分、空間が減るのは当たり前だ。
二人で暮らすような部屋に引越すにはお金がいる。

しかも、あたしは進学したから奨学金をもらっているとはいえ、実際には学費でそのほとんどは消えてしまうので雅紀の助けにはならない。

「どうした、神子？また落ち込んでるの？」
「えっ？ううん、ちょっと考えてたの。」

「何を？」
「やっぱり、迷惑だよな、あたしが転がり込んできて。何とかお金貯めてなるべく早いうちに出てくから。」

「神子、怒るよ。」
雅紀の口調が変わった。

「確かに荷物も多いし生活するのは厳しいかもしれないけど、もともと同棲を言い出したのは俺だしね。ちゃんと神子の面倒を見るつもりで言ったんだから。責任は俺にある。神子がどうこう心配することじゃない。それに二人で生活する分くらいはちゃんと稼いでるよ。神子は安心して大学に通ってればいいんだよ。」

「でも……。」

「デモも、へつたくれもない。神子は今やることをしっかりやって、それにアーティストになるための勉強だつてしなきゃならないだろ。とにかく、今は自分のことだけ考えて、生活のことは俺に任せておけばいいんだよ。」

「うん。」

そう返事しながらも納得はしていなかった。

結局あたし自身は高校を卒業して大学に行くとはいえ、ちっとも自立をしていない。

世話になる相手が親から雅紀に代わっただけだ。

いつかは独りできちんと生活をしないとイケない。

誰かに頼っていては一人前ではないし、このままでは雅紀とも対等な付き合いは出来ない。

そんな気持ちになつていた。

雅紀との新生活が始まったが、最初に考えていたような浮かれた気持ちはなくなっていた。

雅紀は勤めがあるからいつもあたしより早く起きて、あたしは雅紀のいなくなつた部屋で独りで朝食を食べて、大学に通つて、お金もないから遊びに行くこともなく学校が終わって帰つてくると雅紀はまだ仕事をしていて、独りぼつちの時間を過ごした。

雅紀は帰ってくるのと疲れているのに、無理して遅くまで起きてあたしと話をして付き合ってくれ。

それがかえって申し訳ない気持ちになる。

それに週末は必ずどこかに遊びに連れて行ってくれる。

買い物やアトラクションなど毎週のように出かけた。

本当は疲れているのだから週末はゆっくりしたいはずなのに。

雅紀にそれを言うと、

「神子と遊んでいるのが俺の癒しだから。」

そう言って取り合ってくれない。

やっぱり歳もずっと下だし、あたしには甘えられないと思っているのだろう。

でも、本当はもっと甘えて欲しかった。

あたしが甘えていたのが負担でそんな気にはなれないことはわかっていたけれど、あたしのことを大事に思ってくれているのは感じるけど、自分のことももっと大事にして欲しかった。

『自立したい。』

この頃からその気持ちが自分の中で徐々に膨らんできた。

エピソード9：転機

大学に通うのも慣れてきた頃、時間のやりくりも付いてきたので、アルバイトを探すことにした。

食事等の生活費や歌のレッスン料などすべて雅紀が負担してくれていたが、せめて自分の小遣いとレッスン料くらいは何とか自分で稼ぎたかった。

さらに、歌だけではなくできればピアノやダンス等も習いたかった。

街に無料で置かれている「アルバイト広告」を読み漁った。

「何々、時給1300円！いいな、うん？電話でのアポイントセールスカ・・・口下手なあたしには無理かな・・・。うん？軽作業、時給1500円、あつ夜中かぁ。マークン怒るだろうな。」

どのバイトも似たり寄ったりで、ちよつと条件がいいとたいていは夜中や肉体労働やセールスだった。

そんなある日、千葉の栄町の商店街の片隅に「高収入アルバイト」と書かれた無料冊子に目がとまった。

持ち帰って見てみると、いわゆる“風俗アルバイト”の募集だった。

援交をしていたとはいえ、ちよつと風俗には抵抗があったので、あきらめかけていると、その中に“フロアレディ”という項目があり、読んでみると、いわゆるホステスだった。

千葉だけではなく、東京の情報も地域別に入っていて、その中で

“銀座”のところ目がいった。
探してみるといずれも時給3000円くらいで、女子大生歓迎、
と学生アルバイトもOKのようだった。

「これだ！」

お酒は飲めなかったが、《お酒がダメでもお気軽にご相談ください。》などと書かれている店も多く、時間も夜とはいえ五時くらいから“応相談”と書かれていたので、早速、数件の店に電話を入れたところ、「明日にも面接を。」と3件ほど誘いがあった。

次の日、学校帰りに銀座に足を伸ばして、面接に行った。

“クラブ フォルテ”最初の面接場所だ。

早速店に入るとちょうど開店の準備中だったのか、3人くらいのバーテンダーらしき人があっちこっち忙しそうに動いていた。

「あおう。面接に伺ったのですが。」

その中の一人に声をかけた。

「あつ？高津さんですか？」

「あつ、はい、高津神子です。」

「ああ、お待ちしました。すみませんね、ちょうど準備中なもので、どうぞ、奥の事務所まで来てください。」

思ったより丁寧な対応だった。

さすが銀座なのか店の中は変にケバくもなく、落ち着いた雰囲気

だった。

事務所に入るとダブルのスーツを着たオーナーらしき人が座っていた。

年の頃は五十代前半くらいの人だった。

「あつ、高津さん？この店のオーナーの中林です。」

そういつてサツと名刺を渡された。

貫禄があるせいもあつて、ちよつと腰を引きながら両手で名刺をいただくつと、

「お！礼儀正しいね。きちんと名刺を両手で受けてお辞儀をするなんて、イマドキの女子大生では珍しいよ。」

褒められているのか、ビビッているのを見透かされたのかわからなかったが、悪い印象は与えなかったようつで、少しホツとした。

「まあ、掛けてください。」

そういつて、事務所とは思えないふかふかのソファに腰掛けさせられた。

「こついつ仕事は初めて？」

「あつ、はい、全くの初めてです。」

「お酒は？」

「あ、飲めません。それに、まだ18なんです。」

「そつつか、18じゃ、お酒はダメだよね。」

少し微笑みながらそう言われた瞬間『しまった。』と思った。
18歳じゃ未成年だから、無理と言われてしまつかも。

「うちは無理にお酒は飲まなくていいですよ。18歳ならまだ未成年だし、本来お酒は飲んではいけないしね。でも、お酒を飲めなくても接客は出来るから。そういうコウちの店にも何人かいるから安心していいですよ。」

ホツとした。

そう言えばアルバイト広告に18歳以上と書いてあったのを思い出した。

一応18歳以上だから、その点はクリアした。

「話は出来るかな？つまり、接客のためのおしゃべりは得意な方？」
「えっ、あっはい、慣れれば話は出来ると思います。」

「そう、でも、今は緊張してるね。全然、心ここにあらずって感じだね。」

見透かされていた。

考えてみれば夜の商売とはいえ接客業に変わりはない。

口下手なあたしがうまく出来るかは自分でも怪しかった。

「まあ、いいですよ。容姿は問題ないですし、何日か体験入店してそれから決めてくれていいですから。ただし、その間は時給1800円ってことになりますけど・・・。」

『容姿は問題ない』という言葉が妙にひっかかったが、とりあえず体験入店とやらを試みることにした。

「いつから来られますか？」

「明日にでも大丈夫です。」

「そうですね、あと、服装ですが、なるべく清楚な感じの服にして欲しいんですけど、そういうのありますか？」

「そういいながらオーナーはあたしの今日の服装を上から下までチェックしていた。」

軽い気持ちで面接に来てしまったこともあり、短めのスカートにボーダーのポロシャツというラフなスタイルだったのは失敗だった。

「あつ、すみません。気をつけます。」

「アハハハ、いいですよ。普通の女子大生には当たり前の格好でしょうから、できればスカートの丈はもう少し長めで、上はブラウスとかでも構いませんから。他の女の子の服装を見て徐々に研究していってください。」

貫禄に押されていたが、本質的には悪い人ではなさそうだ。

ものの言い方も丁寧だし、それに嫌味な感じはない。

ここなら何とかやっていけるかも。

「わかりました。では、明日は何時頃入ればよいでしょうか？」

「そうですね。学校もあるでしょうから、六時くらいではどうですか？」

「はい、大丈夫です。では、六時に伺います。」

その後、店のシステムや給料の支払いが日払いでも出来ることや、店の様子などを見せてもらいながら説明を受けて、その日は店を後

にした。

他にも2件面接の約束を入れていたが、なんとなく1軒目の店が気に入ってしまい、『体験入店も決めたから、ここでいつか。』とすっぽかしてしまった。

翌日、学校を早めに出て、新宿へ出かけた。服を見るためだ。

実際、昨日オーナーに言われたような“清楚な服”なんて持ち合わせていなかった。

とりあえずそれらしいものを見つげるために、伊勢丹に向った。

平日の夕方にも関わらず、新宿は相変わらず、いったいどこからこんなに人が湧いてくるのかというくらい、賑わっていた。

東口から伊勢丹に向う道も、人でごった返していた。

伊勢丹についてレイスフロアのアダルト向けの階に向った。

いわゆるブランド物の店が並んでいて、どこも敷居が高い。

確かに清楚な感じの服はあったが、ちょっと値札をみると、簡単に10万とか書いてある。

とても手が出ない。

仕方なく、ヤングフロアに向かい、よく言うお水系の服が売っている店を覗いた。

なかなか可愛い服もあり、値段も1万くらいからあったなので少しホッとした。

いくつか物色して、試着をさせてもらった。

「いい！可愛いですね。よく似合いますよ〜。」

とってつけたような店員のお愛想言葉が返ってきた。

「そうですか・・・派手じゃないですか？」

「ぜんぜん。可愛いし、このくらいの色目の方が若い方には人気ですよ。」

人気と聞いてやる気を無くした。

元々“人と同じ”が嫌いなあたしは、試着した服を返して、別の店へ向った。

「どうですか？なんかしっくりくるのありました？」

次の店へ行つてしばらく服を探していたら店員が声をかけてきた。スラツとしたきれいな系だが、やさしい感じの人だった。

「何か目的があつて服探してます？」

「あつ、はい。」

ちよつと驚いた。

こちらがただ服を見ているのではなく、今夜の出勤のための服を探していることを見抜かれた。

「やっぱり、なんとなく目的がありそうだなって、思ったんです。」

「どうしてわかつたんですか？」

「ん〜ずっと、おとなしめの服を見ていたし・・・それって実際はあなたが好むような服ではない気がして・・・。」

また、驚いた。

何で、こちらの趣味までわかってしまったんだろう。

どうしてかと尋ねると、

「簡単ですよ。だって、今日のあなたの服装とまるで違う服見てるんですもの。」

『あーそうか。』と理解できた。

今日は雅紀に買ってもらったTUMORIの短めのワンピースにヒスのパンツを合わせていた。

とても“清楚”とは言いがたい。

「実は、今日から銀座のバーで働くんです。それで、店長に『なるべく清楚な服を』って言われたもんですから・・・。」

「なるほど、銀座ですか、じゃあ、服装もうるさいですよね。よかったですコーディネートさせてもらってもいいですか？」

「あつ、はい、お願いします。」

普段なら店員が薦めるものを好まないあたしだが、この人はなんとなくあたしの趣味を理解してくれていそうな気がして任せてみる気になった。

「えっと、清楚な感じですよね。これとこれ、後、インナーにこのタンクトップを合わせてみるのはどうかしら。」

悪くない選択だ。

値段的にも3万以内に収まる。

早速試着してみることにした。

「どうですか？あつ、かわいいー！淡い感じ似合いますよね。どうで

す？」

実際、鏡で見ると、清楚な感じだが、おとなし過ぎず、結構主張している。

気に入った。

「いいです。おねえさん、センスいいですね。あたしの趣味をわかっているみたい。」

「そうですね？ありがとうございます。でも、可愛い人には可愛い感じで服を着てもらいたいですから。」

『可愛い人』と言われて、ちょっと恥ずかしくなった。

「可愛くないですよ。スタイルだってよくないし、だから服で誤魔化したいんです。」

「それ、マジで言ってます？自信なさ過ぎじゃない？あなた、自分の魅力をあまりわかってないですね。」

言い方にちょっとカチンと来たが、自信がないのは当たっているので何も言い返せなかった。

「ごめんなさい。気を悪くしたなら、謝りますね。でも、あたし、自分で言うのも変なんですけど、ショップの店員としては向いてないと思うんです。」

「え？それってどういう意味ですか？」

「ん〜、正直過ぎちゃってます。正直過ぎて、『この人にはこの服は似合わない。服が可愛いそう』とか思うと、お客さんにもそのまま言っちゃってます。だから、すっごい怒って帰っちゃう人とかもいて、店長には散々絞られることもあって……。」

「プツ！」

悪いと思ったが、吹き出してしまった。

『服が可愛いそう』という表現がなんとともツボにはまった。

「あつ、ひつどくい。真面目に悩んでるんですよ。私、服とかおしやれが大好きだから、この仕事絶対やめたくないんですけど、実際そういうことが続くと、『やっぱ、無理かなって。』やめて田舎に帰っちゃおうかって何度も考えるんですから。」

「ごめんなさい。『服が可愛いそう』って気持ちあたしもよくわかる気がしたんで。」

「え？」

「あたしも服とか小物とか、おしやれが大好きなんです。だから、自分に合うものを見つけたときは本当に嬉しくって。だから、あたしも、人の服装見てあきらかに『服が可愛いそう』って思っちゃう時があるんです。自分に自信がないのは確かなんですけど、服やアクセを見る目はけっこうこだわってると思うんです。」

「.....」

「だから、おねえさんが選んでくれた服、すごく満足してるし、セ・ンスの良さはバッグンだって思います。ちよっとえらそうですけど.....」

「ありがとう。なんか嬉しい。お客さんに褒められるのって最高の気分。だから、またがんばろうって思うんですよね。」

「こつちこそ、ありがとうです。実際、今日着ていく服探すのに自分の趣味とは違う分野だから、本当に困ってたんで、助かりました。」

「うづん、何か勇気付けられた。ほんと、やっぱ、ショップに勤めててよかったって、思えましたよ。」

「よかった。絶対おねえさんのセンス最高ですから、これからも服がかわいそう』って人にははつきり言ってあげてください。」

「プツ！」

「アハハ。」

「そうそう、これ、私の名刺です。よかつたらまた来てくださいね。」

『桐原えつこ』名刺にはそう書かれていた。

「あつ、あたし、高津神子、神様の子って書いてミコって言います。」

「ミコさんね。可愛い名前。神様の子って字、あなたに合ってますね。」

「いえ、そんな・・・。」

「うづん、言ったでしょ。私、嘘はつけないんです。」

「アハハハ。」

「フフフツ。」

店をあとにして銀座に向う道で考えた。

『あんなにきれいで、バリバリ働いているような人でも、悩みは抱えているんだ。あたしは悩みだらけだけど、ああやって頑張っている人もいるんだから、負けられない。夢の実現のためにもっと頑張ろう。』

店に着いた。

約束の六時少し前、やはり働くとなるとお金をもらうわけだから、入店時間の“5分前”を心がけた。

「失礼します。」

声をかけて事務所に入ると、

「お！おはようございます。ちゃんと約束の時間に来てくれたね。しかも5分前、きちんとしてるね。君は。」

オーナーが笑顔で答えてくれた。

何か認められた気がして嬉しかった。

「それに、服装もOKだね。いいセンスしてるよ。」

桐原さんに感謝だ。

「そうそう、まだ慣れないと思うけど、こういう業界は夜からだけど、挨拶はいつも『おはようございます。』だからね。だれかとその日に初めて会うときはすべてその挨拶でね。」

「あつ、はい、おはようございます。」

「アハハ、そうそう、いい感じだよ。」

夜の商売ではそう挨拶することを聞いてはいたが、自分が実際に試してみると、なんだか違和感がある。

徐々に慣れるしかないのだが。

「紹介するよ。今日から体験入店してくれる。えっと・・・あー、そうか、源氏名決めてなかったね。何か考えてきた？」

突然言われて、驚いた。

“源氏名”確かにそうだ。

こういう商売では誰もが源氏名をつけるものだと思ってはいたが、何も言われていなかったあたしは、まったく浮かばず、ふっと、唯さんの顔とミサキと言う源氏名が浮かんだ。そんなことを考えていると、

「ん〜誰か好きなタレントとか歌手とかいる？」

そう振られて困ったが、

「えっと、椎名林檎さんが好きです。」

浮かんだまま応えた。

「椎名林檎かあ、林檎・・・ん、そうだ、シイナちゃんてどうだい？名前つばいし、いいんじゃないかな？」

実際、何も浮かばなかったし、オーナーがそれで決めてくれたなら、いいと思った。

尊敬している歌手の名前を源氏名にするのはちょっと抵抗があったが・・・。

「よし！決まりだ。えっと、改めて紹介する。今日から体験入店することになったシイナさんだ。皆もよろしく。簡単に挨拶して。」

「あっはい、おはようございます。今日からお世話になりますシイナです。よろしくお願ひします。」

いっぱい、いっぱいだった。

何の打ち合わせもなく、挨拶と言われてまた、頭が真っ白になったが、とにかく言ってみた。

「よろしくお願いします。」

「よろしく！」

「よろしくね。」

皆が口々に返してくれた。

そして、拍手までしてくれた。

あたしは深々と頭を下げた。

「うちはそれほど大きな店ではないので、けっこうアットホームだよ。よくいう女の子同士のごたごたもほとんどないね。特に今はボーイも女の子もうまくいってるから、人間関係で疲れることはないよ。安心して働いてね。」

オーナーがやさしく声をかけてくれた。

「おい、伊藤君、シイナちゃんの面倒見てくれ。」

「はい！」

伊藤さんという年は25歳くらいのボーイがあたしに付いた。

「シイナさん、よろしくお願いします。伊藤です。年齢は26歳、この店には2年勤めてますので、何かわからないことは聞いてください。」

「あっ、はい、ありがとうございます。」

とても丁寧な人だった。ルックスも悪くなく、清潔な感じで、水商売というイメージではなかった。

それから、しばらく客が来る前に、一人ひとり自己紹介をされ、店のシステムやどう接客するか、水割りの作り方などを伊藤さんに習った。

そして、最初の客が来た。

「この人は、高橋さんと言って、割と常連さん、月に四、五回はいらっやいます。まずは、おそらく指名が入るので、間を見て紹介するから、こちらで待機しててください。」

『紹介する』と言われてドキドキした。

また、挨拶をするのか？おはようございますって言うのか？頭がグルグル回った。

高橋という客がテーブルについて二十分くらい経った時、伊藤さんがこちらへ向ってきた。

いよいよだ。

「じゃあ、シイナさん、ご紹介しますので、一緒に来てください。」

「あっ、はい、えっと一つだけいいですか？」

「はい、なんです？」

「挨拶って、おはようございます。でいいんですか？」

「え？あっ、アハハ。」

「・・・・・・・・・・。」

「すみません。そうですね。こういうお店は初めてでしたね。えっと、お客様には『いらっやいます。』でいいですよ。」

顔から火が出るくらい恥ずかしいとはこのことだ。
考えてみれば接客なのだから、『いらっしやいませ。』が当たり
前だ。

ちよつと冷静なら考えつくものをまったく思い浮かばなかった。

「じゃあ、行きますよ。」

「あつ、はい。」

落ち込む間もなく、テーブルに連れて行かれた。

「いらっしやいませ。今日からうちに入った新人の口を紹介させて
いただきます。シイナさんです。よろしくお願いします。シイナさ
ん。」

伊藤さんがこちらに向かい、挨拶を促した。

「あつ、いらっしやいませ。シイナです。今日からお世話になりま
す。よろしくお願いいたします。」

一瞬テーブルが静まり返った後、

「アーハハハ！」

「キャハハ！」

全員が笑い出した。

その中でも高橋という客はずっと笑が止まらず、涙を流して笑っ
ていた。

ポツンと取り残された感じのあたしはどうしていいかもわからず
にただ、立ち尽くしていた。

「『お世話になります。』はよかったな。お世話してもらったのは「うちなのにな。」

高橋という客が言った。

そうか、その言葉が皆の爆笑を誘ってしまったのか。

「キヤハハハ、高橋さん、あたしたちにいつもお世話してくれてないから、シイナちゃんに代わりに言ってもらったのよ。」

確か、“亜美さん”という人が言った。

「おいおい、参ったなあ。それなりにお金落としてお世話はしているつもりだよ。まさか新人の口を使ってみんなの意見を代弁されるとは思わなかったよ。」

笑いながら高橋さんが言った。

「ごめん、ごめん。せっかく挨拶してくれたのに、応えてなかったね。高橋といます。まあ、座って。」

「シイナちゃん。高橋さんの隣に座って。」

亜美さんから促されて席についた。

「いやあ、なんだか、新鮮でいいね。こういう店は初めて?」

「あつ、はい、初めてです。慣れなくてすみません。」

「うん、いい！全然すれてないね。シイナちゃんだけ、気に入った！」

そういつていきなり肩を叩かれた。

「あらあら、高橋さん、すれてすみませんね。」

「そうそう、どうせあたしたちは古株ですからね。やっぱり若いの方がいいわよねー。」

“美樹さん”が応えて言った。

「アハハハ、そうそう、若いコはいいよ。君たちもこのすれてない感じを見習わないとね。」

「あら、そうね。じゃあ、えっと、あたし、何もわからないんで、いろいろお世話してください。」

亜美さんが子どもみたいなしゃべり方で言い出した。

「じゃあ、あたしも、えっと、ん〜美樹なにもわかんないんで、よろしく願いますう。」

美樹さんも頭の悪そうな喋りで高橋さんに向けて言い出した。
どうすればいいのか。

気まずい。

「ん〜よしよし、その調子なら、いいだろう。でも、美樹はともかく、亜美は無理があるな。」

「ひっど〜い。どうせ、あたしはもうすぐ三十路よ。そんなに言うならもう、高橋さんのお世話してあげないから。」

本当に怒り出したように亜美さんが言ったので、ますますどうしていいかわからなくなつた。

「えへへ！じゃあ、美樹が高橋さんの愛を一身に受け止めるわ。」

美樹さんが亜美さんに向って言った。
いいのだろうか。

「あら、美樹ちゃん。あなたも無理よ。これから高橋さんの寵愛ちゅうあいを受けるのはシイナちゃんだから。ね！シイナちゃん？」

どう応えていいのか。

どうしよう。

何も言葉が浮かばない。

黙ってはいいけないのはわかるのだが、何も頭から言葉が出てこない。

「プツ！」

「アハハハ！」

「キャハハハ！」

再びテーブルは大爆笑の渦と化した。

何がおもしろいのか全く理解できてない。

「ごめんね。シイナちゃん。うちじゃ、こういうやりとり当たり前なの、先輩とか後輩とか、新人とか関係ないのよ。楽しくやるってこと。」

亜美さんがあたしに言った。

「そうそう、シイナちゃん。これが普通なの。だから、あたしや亜美さんに負けててはダメよ。言われたら言い返す！これが鉄則よ！」

美樹さんがあたしの両肩を掴みながら言った。なるほどと思い、

「じゃあ……。」

皆がシーンとなってあたしを見つめた。

「あたしが高橋さんのお世話をすればすべて丸く収まるんですね。」

さらにシーンとして、皆がお互いの顔を見合わせている。

オーナーまであたしたちのテーブルを見つめている。

「プーッ！」

「あーはははははー！」

「えらい！一本取ったな、シイナちゃん。これで君もこの店の一員だ！」

また、高橋さんが肩を叩きながら言った。

ちよつと痛かった。

「キャハハハ、参ったわ。シイナちゃん。とても初日とは思えない返しだわ。合格！」

そういつて亜美さんが手でOKマークを作つてあたしに向けた。

「キヤー、ビックリ！シイナちゃんおとなしい顔して、あたしより上かも。負けないわよ。」

そう言いながらも美樹さんは笑顔で応えてくれた。

ふと、オーナーの方を見ると、こちらをみて笑顔で頷いた後、サッとカウンターの中央へ身を移した。

あたしも、やっと笑顔になれた。

「神子、どうだい、店の方は？」

「うん、なんとかやれそう。皆いい人だし、お客も感じのいい人多いし。」

土曜日、雅紀と銀座のカフェにいた。

「そっか。でも、夜遅いから体には気をつけろよ。」

「うん、ありがとう。今のところ週三日だし、身体的にはなんとかなってる。」

「うん、でも、徐々に疲れは溜まるから、無理は禁物だよ。」

「うん。」

「それと……。」

「ん？なに？」

雅紀が何かためらっている。

「それと……いいお店みたいだけど、やっぱり水商売には変わらな
いから。つまり……お客とか店員とか、男がいるわけだから……」

「だから？」

「うん、やっぱ、心配だよ。誘われたりしない？」

やきもち？雅紀がまた可愛く思えた。

「心配？」

「うん、心配。いくら神子がしつかりしてても、男は誘ってくるもんだし、メールとか電話番号とか聞いたりしてくるんじゃない？」

「そうねー。メールは何人が教えてるかな。」

「やっぱり、いわゆる店外デートとか同伴とかするんでしょう？」

「そうねー。たまにかな。やっぱりお客様は大事にしないといけないしね。」

「そうだよね……。」

雅紀がそう言ったきりうつむいた。

「うそー！」

「え？」

「うそだよんー！」

「え？何が？」

「うちはキャバクラと違うから、一応老舗のバーなの。」

「え？何が違うの。だってそういう店は客を来させるため、頻繁に女の子から誘いをかけなきゃいけないって聞いているよ。」

「そういうお店はね。うちは違うの。お客と言っても常連さんがほとんどだし、女の子も6人くらいしかいないから、雅紀が想像するような客集めしなきゃならないような店ではないし、そういう雰囲気全くないの。」

「えーでも、誘われたりはするんだろ？」

「それも、ないよ。オーナーがアットホームさを大事にするから、お客さんにも女の子への個人的な接触は持たせないの。ほら、色恋沙汰になるとせつかくのお店の雰囲気は壊れちゃったり、女の子がやめちゃったりするでしょ。もちろん、男性店員にも厳しく言うてる。」

「そうなの？ そんなお堅い水商売があるわけ？」

「あたしも最初は半信半疑だったけど。ほんとにそうなの。だから、お客とも店員ともメールアドレス一つ交換してないよ。最もオーナーには教えてるけどね。後、ボーイの伊藤さんって言う人だけは女の子の世話係りだから、女の子全員のメルアド知ってるけど、お店の用件以外のメールは一切しないよ。」

「ほんと・・・なんか心配して損した。」

雅紀がホツとため息をついた。

こんなにあたしのことを好きでいてくれるんだと改めて思い、胸の辺りがじわりと温かくなった。

「ありがとう。マーくん。心配してくれて。」

「ん？ いや、勝手に想像膨らましてやきもち妬いてたから。なんかいい年こいて恥ずかしいよ。」

「ううん、そんなことない。嬉しいよ。あたしを大事に思ってくれてるのわかるから。」

「うん、大事だよ。神子のことしか考えてないから。」

「あたしだって。マーくんのことしか考えてないよ。」

「神子……。」

そう言って、雅紀がそつと手を伸ばしてきた。
あたしも雅紀の手を握り返し応えた。

「おはようございます。」

「おはよう、今日で一週間の体験入店が終わるね。どうだい、店のほうは慣れたかい？」

「はい、できればこのまま続けさせていたきたいと思います。」

「そうか、皆もシイナちゃんのことを受け入れたみたいだし、店としてもこのまま続けてもらいたいと思っていたので、お願いするよ。」

「ありがとうございます。よろしくお願いします。」

体験入店の期間を終わって本格的に店に出ることになった。

オーナーから時給も3000円に上がることを告げられ、さらに頑張ってくれと肩を叩かれた。

「正式入店おめでとうございます。」

伊藤さんが声をかけてきた。

「あっ、ありがとうございます。また、よろしく願います。」

「こちらこそ。シイナさんは可愛いし、接客も丁寧だし、残ってくれるのは、お店的にはたいへん嬉しいと思いますけど……。」

「が？なんですか？」

「ん〜、うまくは言えないのですが、夜の商売、つまり、こういう

水商売なんかをやっている人ではない気がして。」

「……………」

「うまく言えないんですけど、もっと表舞台って言うか、活躍の場が違ふ気がして。」

「あたしも、今よくわからないんです。実際にお金が欲しいのが一番の理由です。夢は他にあるし……、でも、夢の実現のためにはお金もいるんです。」

「夢ってなんですか？よかつたら聞かせてください。」

「歌手に、アーティストになりたいんです。笑われるかもしれないけど……………」

「笑いませんよ。アーティストですか、歌を唄いたいんですか？」

「そうです。あたしには歌しかないんです。子どもの頃からそれしか夢見てきませんでした。他のことは何も考えられないんです。少し変なんです。」

「そんなことないですよ。素敵な夢です。実は……僕もバンドやってたんです。つい去年までは、都内のライブハウスでギグっててインディーズのデビューも間近だったんです。」

「凄いいじゃないですか！それでどうしたんですか？」

「事務所の所属を決める寸前で、マネージャーが『この話はなかったことにしてくれ』って言い出したんです。」

「何ですか？！おかしいじゃないですか。」

「大手の、メジャーレベルから横槍が入ったらしいんです。結局インディーズといっても今はメジャーの子会社化しているから、上の方から言われればすぐに僕らのような弱小バンドは消されてしま

う。」

「酷い、なんで？そのまま引つ込んだんですか？」

「もちろん抵抗しましたよ。レーベルの上の方に会わせろって何度も掛け合いました。でも、所詮は『上からの一言』で門前払いです。理由だってよくわからず仕舞いですしね。」

「……………」

「結局、音楽的な力があっても、政治力がなければこの世界じゃ上には上がれない。身にしみてわかりましたよ。シイナさんの夢……壊すように悪いですけど、それが現実です。」

「関係ありません。あたし、歌が唄いたいです。多くの人に聴いて欲しいんです。ただ、それだけなんです。」

「でも、歌う場所を閉ざされたら、誰にも聴かせられないですよ。」

「確かにそうかもしれないけど、でも、歌う場所はどこだってあります。ライブハウスでも、路上でも、たとえインディーズやメジャーでCDが出せなくても、歌を聴いてもらう場所はあるはずですよ……………」

「現実には力、政治的な力かもしれないけど、本当に自分の歌を聴いてもらいたいんなら、場所は探せばあるはずですよ。」

「すみません。くだらない話をして……仕事に戻ります。」

「伊藤さん！負けないでください。あきらめないでください。」

「ありがとうございます。」

そう言って寂しげに笑った伊藤さんは店の奥へと消えた。

伊藤さんの話を聞き、自分自身ではかっこいいことを言ってしまう

ったが、内心の不安はどんどん膨らんでいた。

大学に入学して、雅紀と同棲を始めて、店に勤めだして、一見前に進んでいるようだけど、実際、歌のためになることは何一つしてない。

夢を語ることは出来るが、その夢の実現のために前に進むことは、何一つ出来ていない。

このままでいいわけではない。

伊藤さんの言葉は急にあたしの焦りを呼び起こした。

「神子、起きなよ。今日はテストだろ、早めに学校行って勉強するんだろ。」

「うーん、もうちょっと、ちゃんと行くから、学校。」

「しつかりしろよ。いくらバイトが遅くたって、本分を忘れたら何にもならないよ。」

「わかってるよ。ガミガミ言わないで！子どもじゃないんだから！」

「子どもだろ、まだ、学生だ。親に養われてる子どもと一緒にだよ。」

「なに！マーくんはあたしの父親？面倒見てるって思ってるの？管理しなきゃいけないって思ってるわけ？あたしはマーくんの子ども？！」

「なんだ、その言い方は！テストに遅れたら困るだろうって思うから起こしてやったのに！勝手にしろ。俺は行くよ！」

「……………」

激しくドアを閉める音と共に雅紀は出て行った。

バイトを始めてひと月が過ぎた頃、生活のリズムが狂ってきた。

オーナーは気を遣ってくれて、いつも、他の女の子たちよりも早めに店を出させてもらい、千葉行きの終電に間に合うようにはしてくれていた。

でも、週三日との約束が、お店の都合で四日になったり、時には平日すべてが出勤などということも出てきた。

雅紀は優しいから毎日バイト帰りには駅まで車で迎えに来てくれて、帰ってくる途中で一緒に食事をして、家に着く頃はいつも二時か三時、当然雅紀はあたしより早く会社に行かなくてはならないから平均睡眠時間は三時間か四時間。

お互いのイライラが募ってきていて、今朝のような喧嘩が多くなってきた。

同棲をして四ヶ月目、何とか部屋は二人で寝られるくらいのスペースは確保しているが、どうしても荷物は増える方が多く、そんな閉塞感もイライラに拍車をかけている。

『ちゃんと自立しなきゃ。そして、歌のために何かしなきゃ。』

そう思うがずっとあたしの中にあって、それがどんどん膨らんできている。

このままじゃ、雅紀との関係も悪くなる一方だ。

「何とかしなきゃ……。」

エピソード10：スカウト1

「おはよう、ニコー！」

「おはよう、静ちゃん。」

大学内で唯一友達となった静香が声をかけてきた。

「どう、社会学のテスト、いけそう？」

「わかんない。授業も出席採らないから結構サボっちゃったし、静ちゃんのノート借りたけど、読んでてもチンプンカンプン。」

「だよなー、私もノートに書いててもぜんぜん頭に入らなくて。」

それに、人の名前が覚えられなくてさ。外人ばっかだし。」

「キャハハ、確かに外人ばっかだ。ジョンだの、ジョージだの多いしね。」

「笑い事じゃないわよ。それに教科書も小学校と違ってイラスト一つないから、読んでてもすぐ眠くなっちゃうし。」

「そうそう、いっそ漫画にしてくれたらわかるのにね。」

「そうそう、私たちのような活字離れした世代にはそのくらいの工夫が欲しいわよね。」

「明日は法学の試験もあるし、あつたま痛いわ。」

「あつ！いっけなーい。もう、こんな時間いかなきゃ。」

「ほんとだ。急ごう、三号館だっけ？」

「そうそう、ここからダッシュでも三分はかかる。あと、五分しかないー！」

「いこう！」

静香とは授業を選択するオリエンテーションで出会った。

相変わらず人嫌いのあたしは一切自分からは誰にも話かけたりしなかったのだが、なぜか静香は向こうからあたしに寄ってきて、『授業を何とつた』とか、『学食へ行ったか』など聞いてきた。

自分から話さないあたしだが、話しかけられると、妙に愛想よく答えてしまう。

元々人を好きではなくせに人に嫌われるのが怖い性分のため、そういう受け答えをしてしまう。

本当は『形』だけの受け答えなのに静香はあたしのことを気に入ってくれたらしく、学校であたしを見かけるたびに静香から声をかけてくれる。

別にあたし以外にも友達を作っているみたいだし、サークルとかにも入っているみたいだが、なぜかあたしがいると他の友達から離れてあたしのそばに来てくれる。

「間に合ったあ。」

「はあはあ、運動久しぶりだから堪えるわ。」

「ミコ、運動不足でしょ。何かサークルとか入ったら？」

「バイトでそれどころじゃないよ。こっちは生活かかってるから。」

「わかるけどさあ。『夢のこともあるし』でしょ。」

静香には自分の夢のことを話している。

たまたまバイトがなかった日に静香と帰ることになって、駅前の喫茶店でお茶しながらお互いのことを色々話した。

「身体、もたないよ。そんな生活してたら。」

「わかってるけど、お金必要だし。今以上に生活レベル下げたくないし。」

「レッスンとが行ってるの？」

「今は全然、卒業と同時に地元で受けてた先生が子ども出来ちゃって産休に入っちゃったんだよね。それ以来他の教室も探したんだけど、ピンと来る先生いなくて。」

「そういうのって指導者によるもんね。相性とか。」

「そうそう、あたし叱られるとすごく凹むから。ほめて伸ばしてくれるタイプの先生じゃないとダメでさ。」

「わかる、わかる。やっぱり上手な指導者はほめて伸ばすタイプだね。」

「よくわかんないけど、あたしには叱るタイプはダメだな。」

「こら！そこ、テスト始めるぞ！おしゃべりはやめる！」

「ヤバ！やっぱり、指導者は褒めるタイプだね。」

「叱るタイプはダメだね。」

「クスッ。」

なぜか、静香とは普通でいられる。

サトちゃんとはタイプは違うし、あたしもまるで違う。

いわゆる本当に一般的で、個性が強くない女の子だから、普通にしていられるのかもしれない。

「終わった。」

「終わったね。手ごたえはどう？」

「ふう……って感じ。」

「やっぱ？だよな。単位取れるかな？」

「ん〜、サークルの先輩の話だと、社会学はほとんど落とさないって言ってたから、大丈夫とは思っただけど。」

「そっかあ、その先輩のお言葉を信じるしかないね。」

「だね。」

「このあとは？」

「ん？今日は帰る。てか、買い物行く。」

「え？授業は？」

「サボる。」

「え〜いいなあ。あたし、三限にもうひとつテストあるんだよね。サボれない。」

「ご愁傷様。じゃあね。ノートありがとう！がんばってね。」

「はいはい、がんばります。ミコはお買い物かあ。」

「じゃあねー！」

うらやむ静香を後にして学校を出た。

渋谷に着き、いつも行っているお店を一通り回って駅へ向う途中

声をかけられた。

「ねえ、君、モデルとか興味ある？芸能界とか？」

いつもなら、この手のスカウトみたいなのはほとんどが風俗やAVの類たぐいなので無視するのだが、その日に限って立ち止まってしまった。

やはり、何も前進していない焦りがあつたのかもしれない。

「ちよつと、ちよつとでいいから時間くれない？話だけでもいいから。あつ念のため言っとくけどAVとかじゃないから。本当の芸能プロだからね。安心して。」

そついうのもスカウトの常套手段じょうそうしゅんだということとはわかつている。まあ、話を聞いて胡散臭うさんくさそうならとつと逃げ出せばいい。

「ありがとう。時間くれて。なに飲む？」

「じゃあ、コーヒーを。」

「おねえさん、コーヒー二つね。」

「あ、えーと、始めまして、俺、こういうもんです。」

差し出された名刺には“芸能プロダクション RJプロモーション スカウト部 辰見信二”と書かれていた。

「えつと、さっき言ったけど、AVではないからね。雑誌のグラビアとか、映画とか、あと、舞台とかね。ちゃんとタレントを育てている芸能プロだよ。」

「歌手は？歌手はいますか？」

思わず聞いてしまった。

「歌手？もちろんいるよ。まだ、メジャーではないけど、インディーズレベルでは何人かデビューしてるよ。知ってるかな。クワイアットファイブとか、ソウ・シールとか。」

「知ってます。ソウ・シールのアルバムは聴いています。一度ライブにも行ったことあるし。」

「ほんと！じゃあ、話が早いや。そいつらのマネージメント手がけるのがうちだよ。」

「そうなんですか。」

「そうそう、じゃあ、君は歌手になりたいの？」

「はい。」

「そっかー。でも、歌手になるのは結構大変だよ。レッスンもしなきゃいけないし、歌だけではなく、ダンスとかもね。それに、レッスン料とかタダではないしね。」

「……………」

「最近では、グラビアとかタレントからデビューする歌手もいるから、そっちの線から攻めてみるのはどう？」

「よくわからないんですけど。」

「んー、つまり、最初はグラビアの仕事とかして、名前が売れてきたら、テレビなんかに出て、そこから歌手の道を目指す。その方がコネもできてデビューしやすいんだよ。どっちかというところ今の歌手のほとんどがそっち方面からのデビューだからね。多少歌が下手でもデビューできてるのはそのせいだから。」

『歌が下手でも』という言葉にカチンときたが極力表情には出さなかつた。

「どうだろう。するしないはあとにして、いっぺん事務所に来てみない？ 詳しい資料とかもあるし。」

「はあ。」

「今から時間ある？ 一時間くらいでいいんだけど。うちの事務所すぐそこだから。」

「はあ。」

「よし、決まり。とにかく一度来てみて。話はそれからしよう。」

辰見というスカウトマンは半ば強引にあたしのことを事務所まで連れて行った。

「おはようございます!」

「おはようございます! おっ辰巳さんスカウト? いい子連れてきたじゃない?」

そこは松涛まつたけにある小奇麗こきれなテナントビルの二階にあった。

事務所の中では四、五人の男女が忙しそうに動き回っていた。

「紹介するよ。うちのチーフマネージャ。日比生ひびさんだ。」

「よろしく、えっと……。」

「あー、名前聞いてなかったね。えっと?」

「あつ、はい、高津神子です。神様の子と書いてミコです。」

「ミコちゃんか? 年は?」

「十八です。」

「十八？もつと大人に見えたよ。でも、きれいな顔立ちしてるから化粧栄えするかもね。」

「……………」

「ああ、ごめんね。いい意味で大人っぽいうこと。写真写りとかいいんじゃない？」

「よくわかりません。」

「……………」

「えっと、そうそう、他にも紹介するね。奥にうちの社長がいるから、ちよつと待ってて。」

そういつて辰見さんは奥の部屋に向つた。

「ごめんね。気が利かなくて。名前も聞いてないなんて、あいつはスカウト失格だな。」

日比生さんが言った。

「いえ、こつちが名乗りませんでしたから。なんだかわからないうちここへつれてこられたので。」

「はあ、ますます失礼だね。あいつ、とにかくせつかちでね。いつも、それでちゃんと説明もしないから、女の子に警戒されて何人も逃してるんだよね。人は悪くないんだけど……………」

「あたしもそう思います。」

「え？あははは、言うね。」

「あつ、すみません。何も知らないのに。」

「いやいや、いいよ。ものごととはつきり言うのはこの世界では大事だからね。」

「お待たせしました。あれ？日比生さんなにニヤニヤしてるの？」

「いや、べつに。」

「そうですか。まあいいや。じゃあ、ミコちゃんちょっといいかな？」

「はい。」

「今から社長に会ってもらうけど気を遣うことはないからね。ただ、質問にはハキハキ答えてね。社長まだるっこしいの嫌いだから。」

ハキハキというのはあたしの最も苦手とするところだ。

もっとも中学まではハキハキしていることをよくほめられていたのだが。

「失礼します。高津神子さんをお連れしました。」

「失礼します。」

「どうぞ。お入りください。そこにかけて。」

部屋に通されて驚いた。社長は女性だった。

「あなたが高津神子さん？あたしがRJプロミーションの佐竹です。」

そういって、握手を求めてきた。気後れしながらその握手に応えた。

「えっと、スカウトの辰見から聞きましたけど、歌手志望なんですか？」

「はい、歌を歌いたいとずっと思っていますから。」

「辰見がどこまで説明したかわからないけど、正直に言います。うちは立ち上げて二年ばかりのまだ新進の事務所です。若い力もあるのですが、この業界はやはり大手のプロダクションである程度牛耳られているところがあります。だから、こういう若いプロダクションはその隙間を縫って仕事を取るしかない。そうなると当然テレビであるとかメジャーな仕事は少ない。まずは雑誌のグラビアやファッション誌や広告のモデル、そういう仕事が中心です。歌手ではインディーズでやっと二組デビューさせただけの実績です。それも男性のバンド中心。女性歌手のデビューは実現させたことはありません。だから、うちで仕事をしていただけならまずはグラビア、しかも男性誌のですから、それなりにセクシーなものになります。それで、よければご検討ください。」

いきなりまくし立てられ少しビビッたが、とても正直な人だということはわかった。

それに辰見さんが言ったようにまだるこっしいことは嫌いなようだ。

「あ、えっと、高津さんもいきなりじゃ返答できないよね。とりあえず社長の意向はそういうことなんで、一度検討してもらえるかな。来週くらいにまた連絡したいんで、携帯の番号とかメルアド聞いていいかな？とりあえず失礼しようか。」

そういつて、辰見さんは社長の佐竹さんに一礼をして部屋からあしを連れ出した。

結局あたしは一言も発することもなく、社長との面談は終わった。

「ごめんね。うちの社長せっかちでさ、人は悪くないんだけどね。」
「プツ！」

思わず吹き出してしまった。

「なになに？え？なんかおかしいこと言った？」

少し離れた席で日比生さんも笑っていた。

「なになに？二人してどういうこと？まあいいや、じゃあニコちゃん連絡先聞いていいかな？」

「はい、えつと電話は……。」

電話番号とメルアドを伝えて、その日は事務所を後にした。

エピソード10：スカウト2

「ねえ、どう思う？」

「うーん、要はグラビアアイドルの仕事ってことだろ？しかも男性誌、セクシー系といえば脱ぐのも覚悟ってことだろう。」

家に帰って雅紀に今日の出来事を相談した。

「たぶん。そういうことだよな。雑誌と言ってもどっついう雑誌なんだろう？プレイボーイとかメジャー誌ならチャンスもあるかな。」
「ちよっと待って。そういう問題ではないだろう。雑誌で脱ぐってコトは世間にそういう印象を与えちゃうんだよ。それから歌手ってことはありえないだろう。」

「そうかな？今はタレントでもほとんどは雑誌のモデルとかグラビア出身が多いし、まんざら無理とはいえないんじゃない？」

「おいおい、甘いよ。そりゃ確かにAVからタレントになってる人もいるけど、そういうのはまれだし、一旦脱いじゃったりしたら、それがエスカレートしてドンドン露出が増えて、最後はAVって方に行くのが普通だよ。」

「そうなのかなあ・・・マークくんはやっぱ、反対？」

「反対。そりゃそうだよ。脱ぐ脱がない以前にそういう仕事で表に出ること自体恋人としては『はい、そうですか』ってOKは出せないよ。」

「そっか、そうだよな。ましてや脱いだりしたら、嫌いになっちゃうよな。」

「……………」

「ごめんね。つまらないこと相談して。忘れて。あたし、もともと容姿に自信ないからグラビアなんて無理だし。あきらめるから。」

「神子、俺、神子の足かせになってる？」

「え？そんなことないよ。」

「俺、神子が歌手になることは望んでるよ。そうなったら俺といることができなくなるのも覚悟してる。だから、おまえがやりたいことは極力邪魔しないって思っではいる。でも、心配なんだ。そういう世界は嘘か本当かわからないけど、身体許してメジャーになるなんて話も聞くじゃない。本当にそういうことが必要なのもしれない。でも、神子がそれを望むなら我慢しようとは思ってる。でも、今回の話はそこまで上るための手段としては難しいと思うんだ。本当に必要な時になったら俺は我慢するから。」

「マークン・・・ありがとう。わかってるよ。マークンの気持ち。」

あたしだって夢は絶対に実現させたいけど、マークンは悲しませたくない。そう思ってるよ。」

「神子、ありがとう。でも、神子にとって大事なのは夢の実現だよ。その時には俺のことなんか考えなくていいから。それだけは言うておくね。」

「マークン・・・。」

翌日、学校帰りに辰見さんに連絡した。

「もしもし、すみませんお忙しいところ、今大丈夫ですか？」

「あー待ってたよ。電話、思ったより早くくれたね。どう、仕事のこと考えてくれた？」

「それが・・・やっぱりお断りしよう」と。
「え？そうなの？ちょっと待って。今から時間ある？電話じゃないから。会えない？今どこ？」

結局電話では断りきれずに辰見さんと会うことになった。

「お待たせ。ごめんね。思ったより打ち合わせが長引いちゃって。」
「いえ、お忙しいところすみません。」

「いやいや、俺が見つけた大事な金の卵だから、来るのは当然だよ。」
「プツ！」

金の卵が笑えた。

「あつれ〜また変なこと言った？何がおかしかった？」
「いえ、金の卵ってあまり聞かないから。」

「え〜言わない？金の卵、大事だってことだよ。」
「それはわかりますけど。死語・・・ですよ。それって。」

「そうなの？普通に使ってた。だからかあ、前にスカウトした子にも『辰見さんてお年の割りにオヤジですね』って言われたの。」
「キャハハ。」

「う〜ん、そっか、使うのやめよ。金の卵・・・。」
「はい、その方がいいと思います。ところで・・・。」

「あ、そうそう。そんな話してる場合じゃない。ダメ、うちの仕事？」

「はい、色々考えたんですけど、やっぱり歌手を目指したいんで、グラビアからっていうのは無理がある気がして。それに、見た目には自信がないんで。」

「そんなことないよ。見た目は充分クリアしてるよ。それに、そういう仕事していると自然にきれいになるから、自分を磨く上でもいいチャンスだと思っただけだなあ。」

「はい、そうも考えたんですけど、やっぱり男性誌の仕事ってことは脱ぐんですよね。」

「うーん、まあ、そういうのもあるけど、うちがNOと言えば脱がない仕事で収めることは出来るよ。セミナード、いわゆる着エロとかもありだけど。」

「着エロ・・・ですか。そういうのもちょっと無理だと思います。」

「そっかー、残念。ほんと、いけると思っただけだなあ、ミコちゃん肌きれいだし、スツとした顔立ちだから絶対化粧栄えするし、写真にしたらきれいになると思うよ。」

「ありがとうございます。嬉しいんですけど、今回は・・・。」

「うん、わかった。無理やりしてもいいことはないしね。で、話変わるんだけど。」

「はい？」

「歌手になりたいんだよね？」

「はい。」

「ちょっと紹介したい人がいるんだ。実は他の芸能事務所の社長なんだけど。」

「え？だって、辰見さんRJの専属じゃないんですか？」

「表向きはね。こういう業界じゃ珍しくないよ。特にスカウトなんてどこに入れたかというより、いくつ入れたかが勝負だから。まあアルバイトってことかな。」

「え、いいんですか？」

「本来はスカウトしてうちの事務所紹介した子にはこういうことはしないんだけど。ほら、どこでどう漏れるかわかんないね。気をつけないと。でも、ミコちゃんはなんとなくその一途さが気になるんだよね。このままほっておけないって言うか。」

「でも、辰見さんのご迷惑になる気がします。」

「いいの、いいの、全然迷惑にはならないよ。むしろ、うまくいけば俺にもマージンが入ってくるから、いわゆる“とっばらい”だね。」

「そうなんですか？それで、どういう事務所なんですか、そこ。」

「お！聞いてくれる？よしよし、実はね……。」

辰見さんの話だと、RJに移る前に所属していた先でそちらは同じ芸能プロでも音楽関連に力を入れていて、傘下に芸能人の養成所も抱えているらしい。

開業からの年数も15年くらいでRJとは比較にならないのと。

社長は昔メジャーバンドのリーダーをしていてその経験から事務所を始めたらしいので、業界にもツテやコネが多いとのことだった。

「とにかくさ、今日は無理だけど、アポ取っておくから、一度事務所いって見ないかな。」

「はい、お願いします。歌手というなら、ぜひ行ってみたいです。」

「よし、決まりね。じゃあ、また、連絡するよ。あ！いつけね。もう、こんな時間だ次の仕事に間に合わないかも。ここ、払っとくから！お先に！」

そう言っつて辰巳さんは伝票をわしづかみにして出て行った。やっぱりせつかちな人だ。

でも、こんどこそ歌手の仕事の話だ。これはチャンスと捉えていいんじゃないか。

そう思いながら自分が舞台上上がる姿を想像していた。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

「昨日はゆっくり休めた？今日もよろしく。」

「はい、お蔭様で。よろしくお願ひします。」

オーナーが声をかけてくれた。

「おはようございます。今日もよろしくお願ひします。」

伊藤さんも寄っつてきて声をかけてくれた。

「おはようございます。あの、伊藤さんちょっといいですか？」

「はい？」

伊藤さんに昨日から今日にかけてあった出来事を話し芸能プロの話聞いてみた。

「うーん、まだ、名前わからないんですよ。その事務所の？」
「あ、はい、聞いてませんでした。」

「なんとも言えませんが。養成所抱えてるってことはけっこう大きいことは確かですけど、そういうところは逆に何百人とタレントの卵を抱えてるから、デビューするのは難しい気はします。」

「・・・そうですね。」

「それに、おそらくは、先に養成所に入れられると思うんで、養成所はタダではないので、年間に何十万とかお金がいるかもしれませぬね。」

「そうなんですか？何十万ですか？」

「ええ、たぶん、まあいろいろグレードがあつたり、人によっては“特待生”みたいな制度もあるところも聞きますけど、ほとんどは横一線でスタートだと思えますから、お金は必要ですね。」

「そうですね・・・。」

「まあ、想像だけではなんとも言えませんが、一度話だけ聞いてみてはどうですか？」

「はい、そのつもりです。また、相談に乗ってください。」

「はい、いいですよ。頑張ってくださいね。」

「ありがとうございます。」

伊藤さんの話は現実的だ。

少し悲観的な見方が多い気はするが、自分の経験からも気をつけなければならぬことをたくさん知っているのだろう。

「ただいま。」

「お帰り。めし行く？」

「うん、おなかすいた。」

「よし、じゃあ、今日はどこ行く？」

「ん、イタメシがいい。」

「了解、じゃあ、ベルトして。」

「はい。」

いつものように仕事帰りに駅まで雅紀が車で迎えに来てくれた。

「どうだった。今日の仕事は？」

「うん、いつもと一緒かな。常連の、ほら、前に言った高橋さんで、最初についた客。」

「うん、覚えてるよ。それが？」

「その、高橋さんが酔っ払っちゃって、亜美さんに迫るの。ほんと子どもみたいでおかしかった。」

「おっさんだろ、その高橋って人？」

「うん、もう、五十いくつって言ってたな。なんか、仕事でやなことあったみたいで。」

「ふん、酒で誤魔化せる人はいいな。俺は酔っ払えないから、発散もできない。」

「何か嫌なことあったの？」

「いや、そういうわけではないけど、酒で発散できる人がうらやましいと思つてさ。」

「うん、まあね。マーくんはあたしで発散してよ。嫌なことあったらちゃんと言つて欲しいな。」

「うん、そのつもりだよ。」

そう言いながらも雅紀の返答はそっけない感じだった。やはり、あたしには頼れない。そう思っているのだろう。

「そうそう、芸能プロのこと断つた？」

「うん、断つた。でもね……。」

「でも、何？」

「断るのに電話ではなんだからつてもう一回そのスカウトの人と会つたの。」

「うん、それで？」

「そうしたら、別の事務所紹介するつて。それで、また連絡するつて。」

「おいおい、なにそれ、そんなことあり？」

「うん、よくわからないけど業界ではあるんだつて、そういうこと。一見その事務所の専属みただけど、他のツテはいくつか抱えてアルバイトみたいにスカウトした人を他の事務所に紹介してマージンを得てるんだつて。」

「へえ、ハイエナみたいな世界だな。」

「うん、まあね。」

「で、どういいう話なのその事務所ってのは？」

そう聞かれて、辰見さんから聞いた話、伊藤さんの反応のことなどを話した。

「うん、伊藤さんの意見が正しいかな。」

「マークくんもそう思う？」

「うん、やっぱりタダでってことはないだろう。だいたい、そういう事務所は、養成所とかで稼いで、自分のところのタレントを養ってるって聞いたことあるし。」

「やっぱり、そうなのかなあ。お金要るんだね。」

「うん、だろうね。とにかく話は聞いてみたら？相談はそれからししよう。」

「うん。ごめんね。なんかそんなことばっかで。」

「いや、大事なことだろ、神子にとっては将来のことなんだから。」
「ありがとう。マークくん。」

そう言いながらも、きつとお金がかかることだと雅紀は反対をす
るだろう。

第一そんな金はどこにもないのだから。

エピソード10：スカウト3

ブーン、ブーン
メールが入った。

《辰巳です。今日午後空いてますか？お返事ください。》

なんともそっけないメールだ。こんなところにも辰見さんのせつかちさが出ている。

《はい、時間は何時ですか？》

あたしもせっかちに返信した。

《午後四時頃でしょうか？》

《了解しました。場所は？》

《渋谷のスタバで一階の窓際にいるようにします。》

《渋谷のスタバに四時ですね。了解しました。》

すでに三時を回っていた。その後の授業を勝手に休講にして渋谷へ向った。

「ごめんね。急に呼び出して。相手も忙しいらしくてこの時間しか取れないっていうから。」

「いえ、あたしの方はバイトのない日は暇ですから。」

「いやあ、助かったよ。これ逃すと次はいつ会えるかわかんないからね。」

「どうすればいいんですか？」

「あ、そうそう。五時に別の喫茶店で待ち合わせしてるから、それまではここで寛いで。」

「はあ。」

寛ぐといってもせっかちな辰見さんとだと寛ぐ気がしない。

「どうかな。考えくれた？」

「え？」

「いやあ、事務所入りのこと。これから紹介するさ。」

「いえ、まだ、何も。とりあえず話を聞いてみないと。」

「そっか、そうだよな。何か焦っちゃってるの俺のほうだね。ごめん、ごめん。」

何かいつも以上に辰見さんはそわそわしていた。

「あーもう、こんな時間だね。時間前に先に入っているのが礼儀だから、そろそろ行こうか。」

「はい。」

といっても十分前に座ったばかりだし、その喫茶店がどこにあるかは知らないが、まだ四時半前だった。

「とにかく、うちの佐竹社長もはっきりした人だけど、今日会う社長、江角さんって言うんだけど、この人もかなりはっきりしていて

長い話は嫌いだから、八キ八キと答えてね。」

「はい。」

早足で歩きながら少し息を切らし気味に辰見さんは話しかけてきた。

「それと、今度の社長は、あつ江角さんね。キャリアが長くて業界でも一目置かれてる人だから、言葉遣いとかは気をつけてね。それと……。」

辰見さんはその江角という社長を明らかに恐れている。

そんなにメジャーな人なのだろうか？

歩きながら少しだけこっちも緊張してきた。

「よし、15分前、大丈夫だろう。急がせてごめんね。実は江角さんてせつかちで待ち合わせすると最低でも十分前には現場に来てるんだよね。それで、『遅い!』とか言われちゃうの。」

それで、辰見さんが焦っているのがわかった。

初めからそう言ってくればよいものを。

「ん〜、まだ、だな。よかった。あそこの席に座ろうか。」

そういつて店の奥の窓際の席に向った。

「あーコーヒー二つ。」

あたしに何がとも聞かずに勝手にコーヒーを頼んだ。

まあ、それはいいのだが、ますます、辰見さんがそわそわしているのが手に取るようにわかった。

「あっ！」

そう言って急に辰見さんが立ち上がった。
釣られてあたしも立ち上がった。

「お待ちしてました。お忙しいところお時間をいただきありがとうございます。
」

見ると風体はいかにも業界人という感じでスーツではなく、ジーパンに上には派手な感じのシャツを羽織っていた。

「おう！辰見君、久しぶり！元気しotta？」

「はい、お蔭様で。あっ、今日はちょっといい子を見つけたんでご紹介しようと思って。」

「わかってるがな。まあ、一服させてくれや。こっちも朝から休みとつとらへんねん。」

「ああ、失礼しました。えっと、お飲み物は？」

「ビールあるかな？」

「あっ、はい、おねえさんビール一本。」

流石というか、本当にうわさで聞くような“業界人”って言うのはいるんだ。

しかも、バリバリの関西弁。

昼間から打ち合わせでビールを飲むのは当たり前前ってことか。

「で、その子かいな。紹介したいっていうのは。」

「あ、はい、えっと高津ミコさんです。自己紹介して高津さん。」

「あ、はい、高津神子です。神の子と書いてミコです。年は18です。」

「ほう、じゃあ、高校生？」

「いえ、大学生です。今年大学に入りました。」

「ほうほう、で、この世界にはなんで入りたいの？」

「あ、はい、あたし歌手になりたいんです。唄いたいです。唄ってみんなの心を癒したいんです。あたしの思っていることを伝えたいんです。」

自分でも驚いたが、言葉がどんどん出てきた。

「歌で癒したい。思っていることを伝えたい、か・・・。」

そうやって江角さんはしばらく黙ってビールをグツと飲み干した。すかさず辰見さんがビールを継ぎ足す。

「ミコちゃんいうたかな。この世界で、自分が歌いたい歌を唄っている歌手がどれだけおると思う？」

「え？どれだけって？」

「つまりや。自分が思っていることを唄って、人を癒せてる歌手がどれだけおると思うってことや。」

「どれだけって、自分で作詞作曲してる人はそうじゃないんですか？数で言つとよくはわかりませんが。」

「フフフツ、そうやな、素人目にはそう見えるもんやし、実際そう見せてるのがわしらの仕事やからな。」

「・・・・・・・・・・」

「ええか。ミコちゃん。実際に唄いたい歌唄ってるのはこの世界でも数人や、それも超ビックと言われたり自分で事務所抱えてるような歌手だけや。あとのもんは、自分で確かに作ってはおるけど、実際にCDになるときは大勢のライターやらアレンジャーから歌詞も曲も変えられて、出来上がるときにはもう『自分の歌』やあらへん。これが現実や。」

「・・・・・・・・・・」

「いきなり、重い話ですまんな。でも、まだ若いあんたは夢ばかり見てるんとちゃうんかと思つてな。所詮この世界は虚構やから。その中でどう生き抜くか。並大抵ではいかんからな。」

正直シヨックを相当受けた。

確かに曲を提供されているような歌手は自分の思い通りの歌が唄えるわけではないと思つていたが、いわゆるシンガーソングライターまで、曲や詞を変えられている。

世間に出す時は色々な人の手が加わつて思い通りの曲は歌つてないという話はあたしの中で相当なダメージになった。

「どうかな。ミコちゃん。その上で、うちに来る気はあるか？もつともどこの事務所に入つてもその現実が変わらんけどな。それを覚悟でうちに来るんやつたら。面倒みたるけど。」

「えっと、もう少しお話を聞いてもいいですか？」

「うん？なんや、他に聞きたいことあるんやつたら、何でも聞き。」

「あのーやつぱり最初は養成所で練習生つてことになるんでしょ？か？それとその養成所はどれくらいお金がかかるんですか？」

「お！こらあ驚いたなあ。養成所の話かいな。今わしが話したことは消化済みってことかい。」

「いえ、消化済みではないですけど、お金かかるのは無理なんです。学生ですし、家にお金がないもんですから。」

「今日じょうび中流家庭で出せんような金はとらへんで。年間五十万程度や、大学に入ってもそのくらいはかかるやろ。それにうまくいけばそんな金は1年で五、六倍になって返ってくるで。」

「一年で五十万ですか。それって分割とかでもいいんですか？」

「こらまた、現実的な話やな。一応ローンや分割もあるけど、ローンは親の承諾がいるし、分割言っても、前期、後期くらいで半分ずつやな。」

「二十五万ってことですか。」

「そうや。」

「……………」

「なんや、親は出してくれはらへんの？」

「無理です。」

「働いとんちやうの。親は？」

「いえ、生活保護なんです。しかも、今あたしは親戚の養子になって奨学金で学校にいつてます。」

「え、今日けふびそないな苦勞人があるんかい？しかも若い女の子の。」

「……………」

「しかし、事情はどうあれ、養成所からスタートは確かやし、金も

必要なのは変えられへんな。」

「そうですか……。」

「そやな。」

流石に気の毒に感じてくれたのか、あきれたのか江角さんはそのまま黙ってビールを飲みだした。

「えっと、とりあえずお話はこの辺で。結論は後日ってことでいかがでしょう?」

辰見さんが助け舟を出してくれた。

「そやな。これ以上は時間も無駄やし、ほな、ミコちゃん。考えたら連絡してや。辰巳君に連絡してくれたらええから。」

「はい、ありがとうございます。」

そう言っただけで立ち上がったあたしは一言というのが精一杯だった。

「ほな、行くわな。辰見君ここはええのんやろ?」

「もちろんです。お疲れ様でした。ありがとうございます。」

「ほな!」

そう言っただけで江角さんは、さっさと出て行った。

取り残されたあたしと辰見さんは、しばらく沈黙が続いた。

「生活保護って、聞いてなかったよ。ごめんね。もう少し事情を聞いてけばよかったね。」

「いえ、いいんです。最初からお金のこと気にはなっていて、それがあれば無理ってわかってましたから。」

「親御さんはどこか身体が悪いの？もしかして母子家庭かなにか？」

「いいえ、両親とも健在で寝たきりというわけではないんです。親が勝手に働かないだけなんで。」

「なにそれ？子どもがいるのに働かないの？」

「はい、そういう親なんです。もっとも母親は足が悪くて外へ働きに行くのは無理なんですけど。」

「そうなんだ。まあ、あまり深くは聞かないね。どうする、この話？」

「少し考えさせていただいてもいいですか？」

「うん、無理はしないでね。連絡待ってるよ。とりあえず出ようか？」

「はい。」

そう言って席を立ち、店を出た。

すっかり夜の街になった渋谷を駅に向った。

「じゃ、俺はここで、返事待ってるね。気をつけて。」

「はい、ありがとうございます。連絡します。」

そこで辰見さんと別れて再び駅に向った。

『五十万』そのことが頭を巡った。

ここ一月で稼いだバイト代はようやく十五万くらいだが、最初のバイト代は調子に乗って服代に消えた。

いつまでと期限を聞いてはいなかったが、返事をすればすぐに養成所の話が出て、お金も必要になるだろう。

今のバイトでは短期にそんなに稼げない。

雅紀に相談するか。

でも、これ以上雅紀には金銭的負担はかけられない。

『何とかしなきゃ。でも、どうすれば……。』

「どうだった？ 芸能プロの話。」

「うん、聞いてきたよ。」

「だから、どうだった？」

「無理。お金かかるって。」

「いくら？」

「年間で五十万。」

「五十万か……。」

そう言っつて雅紀はしばらく黙り込んでしまった。

やはり、雅紀に頼るのは無理そうだ。

「ごめんな。出してやりたいけど、今貯金はほとんど底をついでる。生活費と遊興費使い過ぎて。」

わかっていた。

毎日外食だし、休みの日は必ずと言っていいほど出かけて、ショッピングしたり、そのほとんどがあたしの物を買ってくれている。

お金がないのはわかっていた。

「神子は？バイト代いくらくらい貯まつてる？俺も十万くらいなら何とか出せるよ。」

「あたしのバイト代は十五万くらい。でも、後期の教科書代とか払わなきゃいけないから、奨学金ではそこまで出ないし。いつそ学校やめようかな。」

「何言ってるんだ。せつかく頑張ってる学校だろう。ダメだよやめちゃ。」

「でも、あたしの夢に学校は関係ない。」

「そうかもしれないけど、ちゃんと卒業するって言ってたじゃない。やり始めたことは最後までやり遂げるって。」

「わかってるよ。そんなこと。でも、状況が変わったの。折角のチャンスなんだよ。こんなところで立ち止まっても、夢に向って先には進めない。」

「でも、それが本当にチャンスかはわからないじゃん。養成所に入ったって何百人とそういう人がいるんだろ。その中で芽が出てデビューできる人間なんてほとんどいないんじゃない。」

「マーくんはあたしには無理って言いたいのか？才能ないって？」

「そうじゃない。神子の歌の良さはわかってる。才能だつてあると思ってる。でも、伊藤さんの言ってたようにこの業界はそれだけでは成り上がれない。養成所なんて入ったらそこから這い上がるのはもっと難しいと思う。だったら、オーディションとかそういうのどんどん受けてくとか、ライブハウスで地道に活動するとか、そつちにエネルギーかけたほうがいいって思う。」

「確かにそうかもしれないけど、高校時代も何度かオーディション

受けたりしたけど、何度も落ちてる。その都度落ち込んで、もうやめようって思う。そんなことを何度繰り返しても無駄。オーディションだって、本当は出来レースだって。初めから合格する人は芸能プロから推薦があつて、そういう人じゃないとメジャーなオーディションは通らないの。そういうことを散々聞かされてきたの。」

「じゃあ、ライブハウスは、ライブで認められてデビューしてる歌手だっているじゃない？」

「あれだって、ただの話題作り、メジャーデビューしてから、その歌手の苦労話みたいなものでライブハウス回ってたとか、路上で頑張ってたとか、全部虚構なの。そういう世界なの。歌手の実力でメジャーになれるんじゃない。ほとんどはその芸能プロの力なの。」

「そんな虚構の世界にどうしてもいきたいのか？現実の世界じゃダメなのか？俺と一緒に現実の世界で生きようって思わないのか？」

「・・・・・・・・・・。」

「俺と一緒にいて幸せになれないのか？俺は神子といることで幸せを感じて、それが生きる糧になつてる。今の神子との生活が俺の人生に潤いを与えてくれている。この先も神子と一緒にいたい。一緒に生きたい。」

「それって、プロポーズ？」

「そうつとつてくれて構わない。もちろん、今すぐ結婚してって言つても神子は学生だし、でも、卒業したら、本当に一緒になりたい、って思ってる。」

「・・・・・・・・・・。」

「その気持ちはずっと前から持っていたよ。神子と一緒に生きて行きたい。」

「ありがとう。でも……ごめんね。今は考えられない。あたしは夢のことだけで精一杯。」

「神子……神子にとって俺はなんなんだ？」

「……、大切な人、それは間違いない。でも、結婚とか、そんなこと考えられない。あたしまだ十八だよ。やりたいこといっぱいあるし、マークくんとは一緒にいたいけど、そばにいてくれるだけで満足してる。それ以上のことは今、考えられない。」

「……、そうか、そうだよ。俺、もう三十七、もうすぐ三十八だ。おっさんだもんね。神子とは二十歳も違う。へたすりゃ親子だよ。何か俺一人盛り上がって馬鹿みたいだね。ごめんね。勝手に熱上げちゃって。」

「ごめんね。今は……これしか言えない。」

その日からあたしと雅紀の歯車が少しずつつ狂い出した。

エピソード11：デリヘル1

「おはようございます。」

「おはよう！ん？なんかシイナちゃん元気ないね。なんかあった？
彼氏と喧嘩したとか？」

オーナーからの言葉が凶星だっただけにちょっと慌てた。

「いえ、そんなんじゃないです。大丈夫です。今日もよろしくお願
いします。」

「ならいいけど、身体は大丈夫？目が死んでるから。」

目が死んでいる。

確かにそうだろう。

夕べはずっと泣いていたのだから。

「おはようございます。」

「あ、伊藤さん、おはようございます。」

「どうしました？この前の芸能プロの話。」

「やっぱり伊藤さんの言うとおりでした。養成所とかの話。」

「そうですね、お金かかるんですよ。」

「はい、年間で五十万だそうです。」

「五十万、相場は上がってますね。僕らが芸能界入り考えてた頃は
三十万くらいとか聞いてましたが。」

「そうですね。」

「で、入るんですか、その事務所。」

「無理です。お金そんなに貯まってないし、学費だけで精一杯です。」

「そうですか、うちの給料だけでは払えませんか。あと数ヶ月働けば稼げる額ではあると思いますが。」

「そうですね。でも、時間がないんです。もうすぐ返事はしなきゃいけないし、OKしたらすぐに養成所に入るみたいですし。」

「そうですか、僕の貯金でもあれば貸してあげるんですけど・・・借金のために働いてるくらいですから。」

「そんな・・・そんなこと・・・すみません、余計な心配かけて。」

「いえ、ただシイナさんはお店で明るくいてほしいですから。ただ、それだけなんです。」

「ありがとうございます。すみません。」

「さあ、今日も頑張りましょう。仕事中は忘れてくださいな。」

「はい。」

そう言っても忘れられるものではなく、その日は客の話を上の空で聞いていて、機嫌を損ねたり、水割りの量を間違えて文句を言われたり、拳句の果てに客のズボンに酒をこぼして店にクリーニング代を請求されてしまうという失態も犯して、さすがに温厚なオーナーにも目玉を食らった。

ポロポロだった。

店を出て帰りの電車の中でボーっと金のことばかり考えていた。

ブーン、ブーン、

メールが入った。唯さんからだった。

《おひさ〜、どう最近調子は？メジャーデビューに向ってがんば
つとるかね（^^）》

『メジャーデビュー』・・・なんてタイミングだ。

少し涙が出てきた。

《そのメジャーデビューで悩んでいます。今度時間もらえますか。
相談したいんです。》

《なに？決まりそうなの？すごいじゃない！！！（^^）！OK
いつにする？》

明日時間をとってもらえることになった。

渋谷に八時、唯さんと出会ったスタバに集合になった。

「おひさ〜、どうしたの窓から見えたよ、ミコの浮かない顔。
「すみません。時間作ってもらって。」

「いいよ〜、今日は遅番だから店は十時位に入ればいいし、可愛い
妹が悩んでいるとあってはほつとけないじゃない。」

「ありがとう。お姉ちゃん。」

「そうそう、その調子。で？どうしたの？」

唯さんに今までのいきさつやそのことで雅紀とうまくいかなくな
っていることなど、ほとんどすべてを話した。

「なるほど・・・彼氏、ミコにマジなんだね。ある意味うらやましい。」

「それはそうなんですけど、正直重くって。」

「わかる！あたしもかなり年上と付き合ったことあって、そいつが四十過ぎてまだ、一度も結婚もしたことない奴でさあ。結婚を迫られた時には正直ウザかった。」

「いや、それとマーくんとはちょっと違うんですけど。念のため。」

「なーによそれ、一緒じゃない。結婚迫られたんでしょ？」

「いや、今すぐってわけではないし、別に結婚してって迫られたわけではないし。」

「はいはい、ミコのマーくんは素敵ですもんね。会ったことないけど。で？肝心のメジャーデビューがピンチなワケでしょ。」

「そうなんです。お金、今のバイトではとても無理なんです。」

「ふむ、困ったわね。じゃあ、うちの店で働くかあ、なんてね。」

「はい、お願いします。」

「はい？何言ってるんのミコ？マジで言ってるの？」

「マジです。」

「ちょっと待ってミコ。よく考えて。あたしがどついう店で働いてるかはご存知よね？」

「はい、ご存知です。」

「ったく。まあいいわ。確かに五十万くらいなら一月で稼げるけど、男の、それも見ず知らずのチ○ポ加えるんだよ。精液まで口に出されるんだよ。一日何本もだよ。あんた耐えられるの？」

「はい、大丈夫だと思います。援交してた時も何度も精液飲みましたから。」

「まあゴツクンすればオプシオンで三千円とか入るけどね、ってそういう問題じゃなくて。」

「キャハハ、乗り突っ込みですね。唯さん。」

「最近腕上げたでしょ。ってそういう問題じゃなく、援交で慣れるっていつても毎日じゃないでしょ。一月五十万ためるとなるとほぼ毎日だよ。それに今の店どうすんの？やめるわけ？」

「ん〜何か理由を言って休ませてもらいます。それで一月こっちに専念します。」

「彼氏にはなんて言って誤魔化すの？」

「別にいつも店には出てますから、バーに行ってると思わせておけば大丈夫です。出勤が増えることにすれば一月ぐらい誤魔化せます。」

「ふう・・・、本気なんだね。ニコ。」

「はい、夕べ唯さんからメールもらってから考えたんです。風俗なら短期間で五十万貯めるのもできるんじゃないかって。それで、今日決意してきました。」

「あんた。本当に夢が大事なんだね。」

「はい、それ以外は考えられませんから。今は彼氏より大事です。」

「そこまで言い切るなら、わかった。紹介するわ。本当はあんたはあたしの可愛い妹でいて欲しかったんだけどね。」

「妹としてお姉ちゃんの仕事を理解するのも必要でしょ？」

「あなたには負けるわ。」

そうして、明日早速店に出向くことになった。

今いるバーにはその日にオーナーに話して、母親が怪我をしたということにして一月休みをもらった。

最初は渋っていたオーナーも、何とか許可してくれた。

「緊張してる？」

「はい、少し。。。」

「だよな〜当たり前か…でも店長いい人だから安心して。」

「はい。」

唯さんと約束通り待ち合わせて早速事務所に向った。

やはりこの業界でも初めは“体験入店”になるらしい。

ただし、もらえる金は体験期間でも同じで、働いた分はきちんともらえる。

しかも、唯さんの話しでは一日6時間くらいの拘束で最低三万は入る。

本数（男の数を”本”というらしい）次第では五万くらいになると言われ、ますます頑張ろうという気になっていた。

正直なところ、病気とかは少し怖い気がするが一日三万以上は魅力的だ。

うまくやれるかは多少不安があるが、デリヘルの場合一人あたりの拘束時間が長いのでやることをやったら残りの時間はおしゃべりをしてればすむと言われた。

もつともそのおしゃべりが苦手ではあるが、水商売と違って男の方が気を遣って話しをするらしいのでわざわざ話題を作る必要はないらしい。

それに移動時間には眠ることもできるから身体も適当に休ませることもできると言われた。

「覚悟はいい？」

「はい、大丈夫です。」

いよいよ事務所の前に来た。

唯さんに促され、まだ開店前の事務所に入った。

入口はただの雑居ビルの二階だったが階段を上がると、「プチエソングエル」と店の名前が書かれていた。

「おはようございます!」

唯さんが元気よく挨拶をして中に入った。

「オハヨース!」

「ヨース!」

中には二人若い男がいて、こちらを見ずに返答してきた。

「あつ!あー言ってた体験のコだね。」

一人の男が唯さんとあたしに気付いて聞いてきた。

「そうなんですよ。このコはニコ。まだ十八のピチピチですよ。」

「ハハッ、相変わらずミサキはおばはんくさいなあ」

「ええ、やり手ババアですから。」

「はいはい、あーごめんね。えっと…ミコちゃんだっけ？」

「あつ、はい！高津神子です。」

「プツ！」

「アハハハハッ」

「…？」

「アハハ、ごめん、ごめん。いやあ、フルネームで自己紹介する」
なんてめったにいないから。」

「そうそう、学校みたいって思っちゃったよ。」

「……。」

「あつ、気い悪くしないでね。あまり真面目な答だったからつい…。」

「そうだ。俺が店長の深見、こっちがドライバー兼副店長の白井。
よろしくね。」

「そしてあたしがこの店のやり手ババア、ミサキです。」

「あはは。」

「まったくミサキには参るね。」

明るい雰囲気だ。

従業員と女の子がうまくいつてるようだ。

「そうそう、で、早速なんだけど今夜から入れるの？」

「はい、大丈夫です。」

「えっと、こういう店は初めて？」

「はい、初めてです。」

「えっと、男性経験は当然あるよね。」

「あつ、はい、あります。」

いきなり“男性経験”といわれて少し恥ずかしくなった。

「こら、あたしの妹はウブなんだから、いきなりそういう質問はやめなさい！」

「はいはい、やり手ババアにはかなわないね。」

「それと、うちは聞いてると思うけど、デリヘル、あ、デリバリーヘルスの略ね。だから、お客さんはホームページの写真とか見て女の子を決めるんだ。そこで、写真を撮りたいんだけどいいかな？」

「あ、はい、大丈夫です。」

「掲載する写真はその子に応じてなんだけど、顔出しNGの場合はボカシとか入れるし、目だけならいいとか、口元だけならいいとか、その子の希望で撮ってる。もし、顔出しOKなら毎回の出勤の際に手当てが一本、つまり一万円、上乘せで付くけど。」

写真だけで一万円、迷わず

「顔出し、してもいいです。」

「え？本当に？でも、ばれる可能性大だよ。友達とか、親とか。」

「たぶん大丈夫だと思います。うち親はパソコンとかないですし、友達も少ないですから、女友達が少々で、サイトを見るような男友達はいません。」

「そう。彼氏は？」

「え？はい、います。」

「彼氏は見ないかなHP。」

「たぶん、最近あたしと付き合ってから風俗とかいってないと思いますし、住んでいるのは千葉なんで、東京の店のサイトは見ないと思います。」

「そう、なら安心だ。じゃあ、奥で早速撮りたいんだけど。いいかな？」

「あ、はい。」

唯さんがピースサインで奥に入るあたしを見送った。

「えっと、そのベッドに寝てくれる。あ、最初は腰掛けてくれればいいや。」

「あ、はい。」

「それと、写真は3枚掲載するんだけど、一枚は服でいいんだけど、その・・・もう一枚は下着でお願いしたいんだけど。大丈夫？」

下着と聞いて今日はどんな下着を着てきたか考えた。

一応、店に出ることを想定してまともな奴を着てきたつもりだ。

「はい、大丈夫です。下着。」

「いや、下着が大丈夫というか、そういう写真は撮ってもいいかな？ってこと。」

「はい、大丈夫です。写真撮られるの好きですから。」

「そうなの？じゃあ、張り切って撮っちゃおうかな。実際掲載は三

枚だけど何枚か撮らせてね。」

「はい。」

「じゃあ。まずは服のままね。」

そういつてセッティングをしてシャッターを切り出した。

結構本格的なスタジオ風になっていて、幹部の白井さんが使ってるカメラもデジカメだが一眼レフの高そうなカメラだ。

あたしは中学の時から写真も好きで、自分は買えなかったが友達にマニアがいて、親から一眼レフのカメラを借りてきて一緒に撮ったりしていたので多少知識がある。

部屋の採光も考えられていて、ちゃんとレフ版やフラッシュの傘もあった。

ストロボがピツとなる度に段々と撮られていることに快感を感じてきた。

「いいね〜可愛いよ。いい表情するね、ミコちゃん。」

そういわれてますます乗ってきた。

「よし、じゃあ、次下着いいかな。」

「はい、ここで脱いでいいんですか？」

「あ、ごめんね。着替えの場所とかないんだよね。後ろ向いてるからその間に脱いで下着の位置とか調べてくれる？」

「はい、わかりました。」

別に見られてても恥ずかしくはなかった。

色々な男の前で脱ぐのは援交で慣れていた。

最も援交のときは脱がせたる男がほとんどだったから自分から脱ぐことはあまりなかったが。

「いいです。準備できました。」

「よし、ほう、可愛いね、その下着も。OKいくよ。」

再びシャッター音が響き、ストロボが焚かれると深く写真の世界に引き込まれるような感覚でだんだんハイになってきた。

「OK! いいよ。完了。服着ていいよ。」

「はい、どうですか？出来は？」

「うん、最高！モデルがいいといい感じに撮れるね。いや、正直言うとこの世界も必ずしも可愛い子ばかりじゃないから、写真に修正加えたり、結構大変なんだよね。」

そういえば、雅紀が前に風俗の話をしてくれた時、デリヘルの場合同写真で選ぶけど、かなり修整されているようで、実際に来る子で写真とは全く違う子が来ることも結構あったと言ってたのを思い出した。

「ほら、見てくらん。」

デジカメなのですぐにその場で見られる。便利な世の中だ。

「わあ、これあたしですか。きれいに撮れていますね。修正していますか？」

「おいおい、これは撮ったままだよ。修正はパソコンに落としてからじゃないと出来なから、素のままのミコちゃんだよ。君が美しいってことだ。」

そう言われて急に恥ずかしくなって顔が熱くなるのを感じた。

「可愛いね。ミコちゃんは。照れてるの？でも、お世辞じゃないよ。最近なかなかここまできれいに撮れる子はいなかったからね。」
「本当ですか？」

「うん、本当だよ。ばっちりだね。修正はいらないな。店長にも見てもらおう。」

「はい。」

「お！終わった？どう、出来は。」

「まあ、見てくださいよ。」

そういつて白井さんは店長の深見さんにデジカメの画像を見せた。

「マジで！素材はいいと思ってたけど、ここまできれいに撮れてるのは凄いね。モデルの表情が生き生きしてる。」

「でしょ、まあもちろんカメラマンの腕もありますけど、こんなにうまく撮れたのは久しぶりですよ。本当にモデルのよさですね。」

「うん、こりや顔出しOKなんでしょ？ちょっと今夜は忙しくなりそうだな。早速落として。」

「はい。」

「ちょっとなあにさっきから、ミコの写真見て興奮しちゃって。そろそろあたしの新しい写真もアップしてよね。」

唯さんが不満そうに言った。

「はいはい、今日はこの気分の高揚をそのままにしたいからね。」

「なにそれ、感じわるい。いいわね。ニコは、可愛くて！」

「すみません。」

「キヤハハ、やっぱり可愛い！うそよ！あたしの妹だもん、誇らしいわ。ちょっと白井さんあたしにも写真見せて。」

そういつてパソコンに向った白井さんに唯さんが走り寄った。

「いや、マジで君みたいなコが来てくれて、うれしいよ。今夜は本当に忙しくなりそうだよ。」

「ありがとうございます。こちらこそよろしくお願いします。」

「接客も丁寧そうだね。躰が出来てるね。あと、自信がない子の為に“講習”をしてはいるんだけど、大丈夫かな？」

「講習……ですか？」

「うん、まあ、なんとなくわかると思うけど、フェラとか手コキの練習をすんだけど、相手は俺か白井なんだけど。必要かな？」

「えっと、何か特別なやり方とかあるんですか？」

「いや、特別なやり方はないんだけど、男のこういうところが気持ちいいとか、ここを刺激されると早くイクとか。もっともツボは男によって違うから、一概には言えないんだけど。」

「必要ならします。」

「うーん、まっいつか。何かこっちが恥ずかしくなってきたから。もし、今日働いてみて難しい相手に当たったらその時考えよう。」

「はい、その時はお願いします。」

「了解、じゃあ、しばらくそこら辺に座って休憩してて。そのお菓子とか食べていいからね。飲み物は冷蔵庫から勝手に飲んでね。」

なんか、急に店長がドキマギした感じになった。

“講習”というのがこういう店では付きものと聞いてはいたので覚悟はしていたのだが、なんだかとってもいい人たちだと思えた。

「アップ出来ましたよ、店長。」

「おう！じゃあ、そろそろ受付だから準備始めるか、白井は何本目だと思っ？」

「ずばり一本目ですね。」

「ミサキは？」

「マジ可愛いね。あの写真、ミコのよい表情が出てる。あたしも一本目。」

「えーじゃあ賭けにならないなあ。仕方ないから俺は二本目。」

「えっと、何ですか一本目とか二本目とか？」

「あーごめん、ごめん。体験入店のコが入った時には俺たち賭けをするんだ。今日の子の電話が何本目に入るか。可愛い子の時は当然一本目、そうじゃない子のときは何本目とか指名無しとか。あー気を悪くしないでね。店の出勤してくる女の子にも賭けてもらってるんだ。一人千円だけどね。」

「そうなんですか。じゃあ、あたしも賭けていいですか？」

「え？」

「ん？」

「えへへ、あたしは三本目！」

「えーどうしてよ？ミコ、あんなに可愛く撮れてるのに。」

「だって、今日はミサキお姉さまが出勤でしょ。一番人気のミサキお姉さまには常連さんがいるはずだから、まずは先を争ってその人たちが掛けてくる。その人たちが二本入った後、あたしの写真を見た新しい人が掛けてくると思うんです。」

「す、すごい。読みが深いね。俺も三本目に変えていいですか？」

「おいおい、だめだろそれは、じゃあ、俺は一本目にするぞ。」

「いいすよ。じゃあ、三本目。ミサキは？」

「じゃあ、あたしは二本目にする。これなら賭けは成立よね。」

「よし、決まった。そろそろ他の女の子も出勤してくるから部屋の方の掃除して。」

「はい、他の幹部連中もそろそろですね。ドライバーも。」

「そうだな。あーミコちゃん、一応こういう店だから、会った人には『おはようございます』って挨拶はしてね。ただし、自己紹介とか気を遣って話したりとかはしなくてもいいから。女の子の待機部屋では各々好きなことやってるから、ミコちゃんも自由にしてね。それと肝心なこと忘れてた。名前、源氏名どうしようか？ミコでいい？」

「え？できれば、変えたいです。」

「だよ。何か思い浮かぶ？」

「すみません。考えてなかったもんで。」

「チサトってどう？」

ミサキさんが言い出した。

「チサト？」

「そう、実はね。あたし子どもの頃妹が欲しくて、人形とかにチサトって名前付けてたの。どうかな、ミコ？可愛くない？」

「いいです。チサト、可愛いです。気に入りました。」

「ほんとーじゃあ、決まりね。どう、店長？」

「いいね。チサトね。合ってる感じだ。おーい、白井！源氏名アップしといて、チサトでいくぞ。」

「はい、チサトですね。いい名前ですね。OKです。アップします。」

奥の待機部屋から白井さんが返事をしてきた。

「よし、あとは賭けの結果だな。楽しみ、楽しみ。」

そういつて店長は嬉しそうに準備を始めた。

「おはようございます。」

「おはー！」

「おはようござりますう。」

ゾクゾクと女の子が入ってきた。

同時に幹部やドライバーらしき人も来た。

思ったより普通の人が多い。

こういう業界だからヤクザがらみの感じの人もいるのかと思っていた。

そのことを唯さんに話すと、

「あー十年位前はそうだったらしいけど、最近は脱サラでこういう店始める人も多いから。うちの店長も三年前は大手の会社のサラリーマンだったのよ。」

「えーそうなんですか。脱サラですか。じゃあ、ヤクザとかからんでないんですか？」

「うーん、正確にはいわゆるシヨバ代っていうか、そういうのを納めてるって聞いたことはあるけど、店長からはそういう話は一切出ないし、サイトとかにも暴力団関係者とか刺青のある方はお断りって書いてあるしね。」

「へえ、じゃあ、安心ですね。」

「まあね。あーでも、一つ気をつけて。」

「なんですか？」

「確かに客は普通の人だけど、普通の人の方が性質が悪いことあるから。」

「え？」

「つまりい、本番求めてくる奴、割と多いから。」

「本番・・・ですか？」

「そう、ドサクサに一度は入れてこようとするから。そういう時はきっぱり断りなよ。そうすれば99%はやめるから。男のほうも店に言われたら、怖いお兄さんが来るって思ってる人多いみたいだから、だから、新規の客には身分証明させたり、ドライバーが最初に部屋に入ったりして点検するのよ。たまに独りと見せかけて大勢男

がいて輪姦されたって話もあったから。そういつことがないように
気をつけてるの。」

「輪姦……ですか？怖いですね。」

「そうね。まあ最近は何かないけど、とにかく本番する奴は絶対い
るから、必ずきっぱりね。きっぱり。」

「きっぱりですね。」

そういいながら、きっぱり言うのは、最も苦手なことだ。どうし
よう。

「あと、断つてもしつこくしてくる奴。残りの1%ね。そういう奴
は場合によっては逆切れしてなんでさせないんだ！って当たり前の
ように言うてくるやつとかいるし、中にはあと一万上げるからさせ
てとかいう奴もいるから。気をつけなよ。」

「気をつけたいとは思いますが、実際当たったらどうかわけばい
いんですか？」

「あたしの場合は、蹴つ飛ばして逃げてくる。あるいは『これ以上
やったら店に電話します。』って言う。そうすると男も現実に戻る
みたいで、たいていは萎^なえるわ。」

「萎えますか？」

「うん、萎える。そうすれば何もしなくてもお金だけもらえるわね。
」

そういつて唯さんはウインクした。

「でも、万一されちゃったら、切れちゃだめよ。そのまま必ず帰っ
てきて幹部に言うて。緊急措置を講じるから。」

「緊急措置ですか？」

「そう、警察に通報する。ホテルだと逃げられる場合ほとんどだけど、自宅ならマジに逮捕してもらおう。りっぱな強姦罪だからね。」
「強姦ですよ。やっぱり。」

そついいながら少しそついう男が可哀相に思えた。

「それと、身体へのケアね。本番する奴はゴムなんか当然つけないから。中だしする奴もいるし、たとえ外だししても、妊娠の危険性があるから。」

「妊娠・・・それは困る。」

「でしょ。だから、緊急措置で医者に言って七十二時間以内にピルを飲むの。」

「七十二時間以内ですか？」

「そう、七十二時間、本当は二十四時間以内がベストなんだけど。どうしてもって時にはそれで生理の周期を変えて、妊娠しないようにできるのよ。医者はちゃんとした専門医を紹介してくれるから大丈夫。」

「そうなんですか、すごいですね。そんなことできるんですか？」

「そう、医学は進歩してるのよ。」

「はあ。」

そついう問題ではないと思ったが、とりあえず安心はできた。

” プルルルルル...”

「はい、毎度ありがとうございます。プチエンジェル担当白井でございます。」

一本目だ。

「はい、はい、ありがとうございます。で、お時間は？はい、はい、じゃあ、それではお時間通りにお届けします。はい、ありがとうございます。」

電話を切った白井さんがこちらをチラッと見てニヤリと笑った。

「ミサキさん、ご指名ですー！」

あたしと唯さんに向かって親指をグツと突き出した。

「やったあー！」

唯さんがバンザイをしてあたしに抱き着いてきた。
横で店長がグツタリうなだれていた。

「やったね。やっぱり最初の指名はお姉ちゃんだったね。」

あたしも嬉しくなって、唯さんを抱きしめ返した。

”プルルルル！”

二本目が入った。

「はい、ありがとうございます。プチエンジェル担当白井です。」

二本目を切り終わると今度も白井さんはピースサイン。
そして、唯さんに向かつて

「ミサキさんアウト！負けだよ。二本目もミサキさん！」
「やったあ！」

あたしは思わず叫んでしまった。

あたしの考えに乗った他二人ほどの女の子とドライバーが同時に
ガッツポーズを取った。

”プルルルル！”

いよいよ二本目。

今度は店長が出た。

「ありがとうございます。プチエンジェル担当深津でございます。
はい、え？はい…チサトですね…」

「やったー！」
「バンザイ！」

あたしに乗った人たちが口々に叫び出した。

おかげで店長は電話の応対に苦慮してる。

電話の向こうの客もなにごとか、と思ってるだろう。

あたしの予想通り、二本目にあたしの指名が入ったのだから、驚
きだ。

しかし、ここでふと思った。

今馬鹿騒ぎを聞かれた客はあたしの初の客になるんだ。

そう思ったら浮かれ気分がすつとんだ。

「あーあ、まいったなあ。こつも簡単にチサトさんの思い通りになるなんて思わなかったよ。みんなー上がるとき賭けの精算忘れんなよー。さ、いこつかミサキさん。」

そう言つて唯さんを連れて白井さんが出ていった。すると唯さんがあたしに向かつて

「初体験、がんばつて!」

と耳打ちして白井さんのあとに続いた。

「じゃ、チサトさんもそろそろね。準備してね。」

店長に、そう言われたが何から手をつけていいかわからなかった。ドギマギしているあたしに、

「あんた初めてなんだよね。持つてく荷物は奥のロッカーだよ。私物は基本的には自分で持つていく。無くなつていいものだけ置いてきな。」

確かチナツさんと呼ばれてる人が教えてくれた。

「すみません。さつき店長に教わつたんですけど、ドギマギしちゃつて…。」

「気にしなくつていいよ。あたしも初日はそうだったから。」

そう言つてチナツさんはニコリと笑つた。

真面目顔はちよつと冷たい感じだけど笑つととても優しい目になった。綺麗な人だ。

「あ、あと、ローション見ときなよ。減ってたらその大きいのがら補充しときなね。」

「ありがとうございます。大丈夫そうです。」

「そ、まあ、あんまり緊張しなさんな。相手の言われる通りに動けばなんとかなるさ。」

そう言っでチナツさんは、あたしの背中をポンツと叩いて送り出してくれた。

「行ってきます!」

「いってらっしゃい!」

「がんばって!」

店長を始め口々に皆が励ましてくれた。

ドライバーは金子さんという人だった。

年は四十でこの仕事はバイトで昼間はサラリーマンをしてるとのことだったが、半年前から会社の業績が悪く、残業はもちろん、給料も三分の二に減らされて、それからこのバイトを始めたそうだ。

そんな話をしてるうちについに現場に着いた。

「初めての客なんで最初に僕が面通しめんとおしてくるから。僕が戻ってきたら交替で入ってね。」

「はい。」

車のエンジンをかけたままにして金子さんは客の部屋のあるマンションに入っていった。

あとから聞いたのだがエンジンをかけっぱなしにするのは、相手がヤバイ人間の場合すぐ逃げられるようにするためだそうだ。

そんな危険もあるのだろうか。

「お待たせ、大丈夫そうだ。年は三十くらいかな。優しそうな人だから大丈夫だろう。でも万一何かあったらすぐ部屋を出て電話入れるんだよ。僕は次があるから一時間くらい空けるけど終わる十分前には、ここに戻ってるから。危ない時は荷物なんかほっといいていいからね。」

「わかりました。行つてきます。」

金子さんの教えを反芻しながら部屋に向かった。

エピソード11：デリヘル2

マンションはオートロックなのでインターホンで部屋番号を押した。

「はい。」

「あ、プチエンジェルのチサトです。」

そう言つと自動ドアが開いた。

4階までエレベーターで上がると一番奥の角部屋だった。ドアホンをならすとほどなく扉が開いた。

「あ、どうぞ。」

見た感じは優しそうだったが話し方はぶっきらぼうだった。

「失礼します。」

そう言つて中に入るとワンルームだがよく整頓されていて男の独り暮らしにしてはきれいだった。

あたしと雅紀の部屋とは大違いだ。

「あ、初めまして。チサトです。よろしくお願いします。」

「あ、こちらこそ。えっとまずお金かな？」

「はい、すみません。九十分なので二万五千円になります。」

「はい、じゃあこれ、ちようど二万五千円。」

「はい、確かに。ありがとうございます。」

客に寄っては三万出して釣りはいらないうつ人もいると聞いたが初めからそれは無理か。

「えっと、ちよつと待つてください。お店に電話入れますから。」

店からは携帯を渡されていて入室したらず電話を入れるように言われている。

これは時間の管理と女の子の安全のためだと言われた。

同じように終了十分前にも電話が入る。

これも同じ理由。

だから電話はマナーモードにしないように言われている。

中にはなかなかイカなくてしつこく最後まで粘る客がいるのでこの電話でタイミングをはずす意味もあるらしい。

「もしもし、チサトです。今入りました。はい、大丈夫です。はい。じゃあ。」

店長が大丈夫かと心配してくれた。

「えっと、こついう場合何か気の利いたおしゃべりとかするんだろうけど、俺、話下手なんで、すぐ風呂に入っていいかな？」

いきなりで少し驚いたがあたしも話は苦手だったのでかえってよかった。

「じゃあ失礼します。」

そう言って服を脱ごうとした。

「待つて。」

客が止めた。

「できれば脱がしたいんだけど…いいかな？」

「あつ、はい、いいですよ。」

そう答えるとスツとあたしの背後に回り、薄手のキャミソールとタンクトップを一枚ずつ脱がされた。

続いてスカートに手が掛かり、片手でプチッとホックをはずすと、スツとチャックを下ろして足元にストンとスカートが落ちた。

そしてパンティーに手がかかり、お尻の方からめくるようにスルツと脱がされた。

なかなか手馴れている。

そうしてすべてを取られたあたしは、次にどうしていいかわからなかった。

「今度は僕を脱がしてくれる？」

「はい、じゃあ、失礼します。」

そう言つて、まずはシャツのボタンをひとつずつ外した。

中にTシャツを着ていたので、それを万歳をさせるようにして脱がすと、客の眼鏡にひっかかってちよつと慌てた。

下は短パンを履いていたのでボタンを外しチャックを下ろして、足元に落とした。

最後はブリーフだった。

すでに、固まりつつあるモノの輪郭がはっきりと伺えた。

男がよく言うテントが張った状態とはこのことだと思った。

ブリーフをお尻の方から下げると前が客のモノで引っかかって、勢いよく下げて、脱がした後に反動でピンツと跳ね上がった。けっこう大きい。

「えっと、じゃあお風呂お願いします。」

「うん、ちよっと待ってて。」

そういつと風呂場に向かいシャワーの栓ををひねってきた。

「お湯の温度が安定するまで、ちよっと待って。」

そう言い終わるか終わらないかの隙にいきなり身体を寄せてきて、キスをされた。

でも、乱暴ではなく、やさしく愛撫するように唇を重ねてきて、徐々にあたしの唇の中に侵入を始めた。

さらに、両手で髪をかき上げられ耳元やうなじに手を這わせてきた。

身体から力が抜けているのを自覚した。

そして立ったまま首筋に唇や舌を這わせてきて、徐々に下の方に進んできている。

左手はすでに乳房をつかまれ、優しく揉み始め、指の先で乳首を転がされた。

ちよっとまずい。

かなり濡れてきた。

その時フツと唯さんの言葉が浮かんだ。

「あつすみません。ここではそこまで。あとはお風呂に入ってください。」

そう言われて、ハツとした客は、すまなそうな顔をして『わかりました。』と言いながら風呂に入った。

唯さんの“きっぱり作戦”は成功のようだ。

「じゃあ、失礼して身体洗わせていただきます。石鹸はこれでもいいですか？」

「ああ、それで、いいよ。」

やはり、さつき良いところで止めたので機嫌が悪いのか、応え方がさらにぶっきらぼうになった。

「じゃあ、今度は前を向いてください。」

そういうと明らかに不機嫌そうな顔でこちらを見ずに身体を前へ向けた。

ちよつと可愛いと思い、仕方ないから少しだけ気持ちよくさせてあげようと石鹸のヌルヌルした両手で、客のいきり立ったモノを優しく包み込み、軽くねじりながら上下に動かした。

「うっ！」

思わずうめき声がでたらしい。

次に前の方からお尻の方まで手を伸ばし、ヌルヌルと股間に手を這わせた。

「はあ、はあ。」

客の息づかいが荒くなっている。

さらに、左手でしごいているスピードを速めてみた。

「あつ、つちよ、ちよっと待って。」

そういつて客はあたしの手をつかんで止めた。

「このままじゃ、いっちゃうよ。さっきのお返しかい？」

あたしは笑顔で、

「はい、さっき可愛がっていただいたお返しです。」

と答えた。

「まいったなあ。何か君、チサトちゃんだっけ？いいね。うまくいきそうだ。」

「はい？うまくいく？」

「あー、ごめんね。えっと、俺、時々こういうデリヘルとか呼ぶんだけど、ほら、こういう性格で言い方もぶっきらぼうだから、怖がられたり、さっきみたいにせつかちに責めて女の子にマジ切れされたりして、あまりいい思い出ないんだ。まあ俺の仕方が悪いんだけど。でも、こういう返され方は初めてだよ。なんか、ちよっと気に入っちゃった。」

急に饒舌じょうぜつになったのも驚いたが、気に入ってくれたようなので嬉しくは思った。

「あつよかったら名前で呼んでくれる？ヒサシっていうんだ。」
「はい、ヒサシさん、ありがとございます。気に入ってくれて嬉しいです。」

「よし、今度は俺が洗ってあげる。」

そういつて自分の手に石鹸を塗りつけると、あたしの背後から背中をマッサージするように石鹸だらけにすると、案の定、手を回してあたしの両方の乳房を愛撫し始めた。

「あん！」

わざと可愛らしい声を上げてみた。

「いい、かわいいね。チサト。俺のわかるだろ？」

そういつてあたしのお尻の溝にヒサシのカチカチになったモノを擦り付けてくる。

それにすでに呼び捨てだし。

「いやーん、すごい。」

「そうだろ、けっこう大きいだろ。入れたらすごく気持ちいいんだよ。」

来た来た。

本番への軽いアプローチだろう。

この辺は別に風俗も援交と男の様子は変わらないことがわかった。

「だーめ、続きはベッドで、ね！」

「よし、洗おう、流してくれ。」

ザツとヒサシの身体を流し、自分も浴び終わるとバスタオルを巻いて部屋に戻った。

ヒサシはもう、我慢の限界らしく、少し乱暴にあたしのバスタオルを剥ぐと、そのままベッドに押し倒してきた。

でも、荒々しさはそこまでで、キスを始めてからはさっきの優しい感じが戻った。

本質的には悪い人ではないんだろう。

また、一連の愛撫を続けてきて、あたしが濡れているのを確かめると、ゆっくり指を入れてきた。

「あつ！そこ、気持ちいい。」

「ゆっくり動かすからね。でも、だんだん激しくなるよ。」

そういって、指を徐々にリズムカルに動かし始めた。確かに気持ちがいい。

あたしの中の感じる部分を的確に刺激してくる。

「どうだい、感じてきた？気持ちいいだろう。気持ちいいって言うてっらん。」

「気持ちいい！」

男はどうして、色々と言わせたがるのだろうか。

それは雅紀も例外ではなかった。

女の口からいやらしいことを言わせることで興奮する気持ちはわからないでもないが。

「イキたければ、イッテもいいよ。もっと気持ちよくなって。」

「うん、気持ちいいよ。ヒサシさん上手、気持ちいい！」

そう言いながら、まだ、深くまでは感じていなかった。

確かに気持ちはいいし、いこうと思えばいける気はするが、やっぱりのめりこめない。

さっき、風呂に入る前ならわからなかったが、この男の本質を見てしまった気がしてからは、また冷静なあたしが蘇ってしまった。でも、仕事なのだから相手の気持ちも汲まなくてはならない。

「あ！だめ！いっちゃう！イク！イクよ！」

「いいよ。いいよ。イッテ、イッテいいよ！」

「あ！あー！ー！ー！」

「はあはあ、いっちゃった？可愛かったよ、チサト。」

「はあはあ、ヒサシさん上手、本気で感じちゃった。」

そういつと嬉しそうにニヤリと笑い、再びキスをしてきた。

「今度はお返ししなきゃ。」

そういつて身体をひるがえ翻し、ヒサシの上に乗った。

「おう！積極的だな。どんな風に攻められるのか楽しみだよ。」

「うふ、でも、本当は今日が初めての出勤なんです。ヒサシさん初めてのお客さんなんですよ。だから、うまく出来ないかもしれないのでリードしてくださいね。」

「え？マジで？HPに体験入店とは書いてあったけど、本当に俺が

初めてなの？」

「はい、本当です。初めてです。」

男は“初めて”にも弱いらしい。

以前援交のとき、たまたま生理間近で、やった後にタイミングよく生理がきた。

最も初日だったので量が多くなかったせいもあり、どうも処女と思われたらしい。

その男はすごく感激して、2万も多く払ってくれた。濡れが甘くて少し痛がったのも効果があったらしい。

「うわあ、ますます感激だなあ。これは何かの縁かもしれないね。大丈夫、チサトの攻撃なら全部感じるよ。」

「うれしい！じゃあ、ここはどうですか？」

そういつて乳首を舐めてみた。

男によつては乳首を刺激されるのをものすごく好む人もいる。

「おお！いいよ。俺、乳首感じるんだよね。」

「そうなんですか？じゃあ、がんばっちゃおう！」

そういつて、両方の乳首を交互に舌で転がして、空いたほうの乳首は手で愛撫してみた。

確かに感じているようだ。

さっきよりヒサシのモノが大きく反り返っている。

乳首から徐々に入その方に舌を這わせると、ヒサシの息遣いも荒くなってきた。

唇は腹の辺りを愛撫しつつ、手は内腿を撫でるように刺激した。

これも利いているらしい。
ヒサシのモノがピクピクと反応している。

そのまま舌をヒサシのモノの根本に這わし、一気に舐め上げてみた。

「うー！それ、すごい、いいよ。もう一度やって。」

気に入ったらしい。

リクエストにお答えして、でもさつきよりはゆっくりと舐め上げてみた。

「うう！それもいい、お願いだよ。啜えて。」

「はい。」

少し弄ぶもてあそぶように、指と手の腹でヒサシのモノを愛撫すると、懇願するように言ってきた。

先の方から徐々に舌で刺激をして、少しずつ深く啜え込んだ。

先の方を啜えたまま口の中で舌を転がすと、そうとう気持ちがいいらしく、かなり大きな声を上げた。

「チサト、うまいね。マジ最高だよ。耐えられないかも。」

「耐えなくていいですよ。いきたい時にいつてくさいね。」

そう言ってさらに手の動きを早めてみた。

同時に上下に口を動かし、より深くヒサシのモノを喉の奥のほうまで導いた。

「あー！たまらないよ。ちょっと待って。」

「だめです。あたしだっていかしてくれただから、ヒサシさんも

感じるままにイッテ！」

「あああ、もうー！」

そういうと、ヒサシの身体は急に硬直し、次の瞬間、大量の精液があたしの口の中に放出された。

「はあ、はあ、マジもたなかった。凄く気持ちよかったよ。チサト。」

答えたくてもヒサシの液体が口いっぱい溜まっていて話せなかった。

その様子にやっと気がついて、ヒサシがティッシュを数枚取ってくれた。

そこに吐き出したが、口の中にはまだヒサシの味が残っている。

「ありがとう。ほんとに気持ちよかったよ。こんなに心から感じたのは久しぶりだよ。また、指名していいかな？」

「もちろんです。ぜひ、指名してくださいね。」

こうして、最初の客は無事に終わることができた。

エピソード12：プチ整形

デリヘルの仕事は順調だった。

これといったトラブルもなく、ここまででは付いた客とのトラブルもなかった。

しかし、今店に帰る途中、車の中であたしは泣いていた。

「チサトさん。大丈夫ですか？ いったい何を言われたんですか？」

ドライバーの金子さんが、優しく聞いてくれた。

「ううん、何でもないです。ただ、ちょっとお客さんに言われたことが……。」

「何か、嫌がらせ的なことを言われたんですか？」

「いえ、ただ気にしていることをずばり言われたんで、ちょっと……。」

実は、客に目の二重のことを指摘された。

つまり、本当は一重で、アイプチして二重にしていることを、言われてしまった。

客としては、ただ、何気なく「アイプチしてるでしょ？」と言ったつもりだったらしいが、触れて欲しくなかったところなので、余計に落ち込んだ。

もちろん、客の前では泣いたりはしなかったが、終わった後、車に戻って急に情けなくなつて涙がこぼれた。

次の日、雅紀が出かけた後、ネットで整形について調べた。

目の二重にはいくつか方法があるらしい。

埋没法、切開法・・・値段も2万〜15万くらいまで様々だ。

とにかく迷っていても実際に診てもらわないとわからない。

思い切ってネットで見た整形外科に電話してみた。

話を聞いてみると施術前のカウンセリングは無料だという。

早速、予約を取った。

その病院は新宿にあった。

雑居ビルの二階で外見は、あまりキレイなところではなかったが、中はそこそこ清潔な感じだった。

「高津神子さん。」

呼び出されて診察室に入った。

中には40代くらいの医師がお決まりの格好で、座っていた。

「えっと、高津・・・ミノさんですね。」

「はい。」

「えっと、ご希望は？」

「あ、はい、目なんですけど、二重にしたいです。」

「あー、目ですね。ちょっと失礼。」

そう言って医師は私の両目を交互にマジマジと見た。

「今は、アイプチしてるね。二重の幅はこんな感じでいいのかな？」

「あ、できればもう少し広くしたいんですけど。」

「こんなかんじかな？」

そう言って、医師はピンセットのような器具で、あたしの瞼まぶたを押えてクイツと押し込んで鏡で見せた。

「あ、こんな感じです。」

「そう、わかりました。それで……。」

その後、手術のことや終わったらすぐに帰れることやまだ未成年なので親の同意がいるとか、色々説明をされた。

そして、もっとも気にしていた手術代のことを言ってきた。

「あなたの場合、切らなくてもすみそうなので、いわゆる埋没法で大丈夫でしょう。こちらは、比較的安くて両目でうちの場合11万です。その他は初診料が3千円かかるだけです。」

「そうですか、いったん考えます。」

そういつて病院を後にした。

11万か……、デリヘルの仕事で今現在稼いでいるお金を全部つぎ込めば何とかなる金額だが、それでは、事務所の費用が支払えない。

どうすればいいのか……途方にくれながら、雅紀の家まで帰ってきた。

部屋の明かりも点けずボーっと考えていると雅紀が帰ってきた。

「わあ、ビックリした。部屋真っ暗だったからまだミコは帰ってないかと思った。どうしたの暗くして？」

「はあ。」

ため息しか出なかった。

「なに？何かあった？言ってごらんよ。」

優しい雅紀の言葉に促されて、二重の手術のことを言った。もつともデリヘルの客に指摘されたことは伏せていたが。

「そっか、二重にしたい？」

「うん。」

「そうだよな。そうすれば、毎朝化粧で時間がなくなることもなくなるか。」

「うん。」

「だよな。よし！わかった。出すよその金。」

「え？だめだよ。雅紀お金そんなにないでしょ？」

「大丈夫だよ。実は密かに貯金もしてるから、11万ぐらいだったら何とかなるし、たぶん出せるから。ただ、月末まで待ってもらっていいかな？」

「もちろんだよ。ありがとう。雅紀ごめんね。」

「いいよ。それで、ミコが化粧の時間短縮できれば、出かける前に喧嘩にならずに済むしね。」

「ひどーい、でも、確かに化粧が短くなるとは思っけど……。」

「だろ。じゃ、決まり、よし！じゃあ飯食いに行こう！」
「うん！」

また、雅紀に金銭的に頼ってしまった。

雅紀は大丈夫とは言っていたが、実は借金をしていることを知っていた。

カード会社から毎月返済の用紙が来ているを見てしまった。

知っていても、どうすることも出来なかった。

目の前の整形して美しくなるといふ欲望に勝てなかった。

手術当日、午前中の10時に予約をしていた。

その日はアイプチせずに来てくれといわれたので、伊達^{だて}眼鏡をして病院まで行った。

私にとって一重の目を世間にさらすことは許されなかった。

「高津さん。準備をしますのでお入りください。」

着いて間もなく、看護師から声をかけられた。

手術のための準備室に通された。

入るとそこには手術台があって、服のままでよいので寝るように指示をされた。

そこからグリーンのカバーを全身にかけられた。

良くテレビで見る手術シーンのようだった。

“プチ整形”というくらいなので、軽く見ていたが、こんなに大

げさな準備をするとは思っていなかったので少々緊張してきた。

「はい、では、今から瞼に麻酔をしますが、まず、液体の麻酔薬で表面を濡らしますから目を閉じていてください。」

医師の話では、その後、少し瞼の皮膚が麻痺したところで、注射をして完全に局所麻酔をするとのことだった。

局所麻酔なので、手術中は周りの物音も聞こえるし、医師も時折話しかけるので応えてくれと言われた。

そして、いよいよ手術が始まった。

これが終われば、あたしの目はずっと二重のままです。

そう思えば多少の痛みなど耐えられる。

そう考えて臨んだが、実際には何の痛みもなく、目を閉じてちょっとウトウトしている間に手術は終わってしまった。

一応目には包帯がされていて、しばらく別室で横になっているように指示された。

1時間もした頃に看護師に呼ばれ起き上がり目の包帯を取った。

鏡で見ると瞼が腫れている。

ちょうど、泣きはらした後の酷い時のような感じに瞼が赤紫色に腫れている。

「ちょっと驚いたかな？でも、大丈夫だからね。当然少しは傷をつけたから今は腫れているけど、3日〜1週間もすれば、腫れはひいて、ちゃんと二重になるから、気になるようなら眼鏡をしてちょっとの間、外出を控えておいてください。あと、化粧は腫れがひくま

ではないでくださいね。」

そう言われたが、こんな腫れた目では化粧などする気にもならない。

その後、雅紀から貰った11万を支払い、病院を後にした。

帰りの電車では、みんなに見られて笑われているような気がして、ずっと俯いたまま電車に乗っていた。

それから、徐々に腫れはひいて、医師の言うように、一週間後は、くつきりとした二重になっていた。

アイプチで毎日幅が決まらないのを嘆くこともなくなり、化粧も時間を短縮できるようになった。

鏡を見るのが楽しくなった。

大げさな話だが、生れて初めて何か成功したような気分さえなつた。

エピソード13：自立1

「お帰り。」

「ただいま。」

いつものように雅紀が迎えに来てくれている。

「どうだった？今日の仕事は？」

「え？ああ、いつも通り、酔っ払いの相手も楽じゃないわ。」

「そうみたいだね。なんかいつも以上に疲れてるみたい。」

それはそうだ。今日はデリヘルで、十二時まで四人の客を相手にした。

どの人も悪い人ではなかったが、なにより身体が疲れた。特にアゴと腕が。

雅紀には悪いが、今日はしゃべる気がしない。

折角の二人の時間だが、今日は応えられなかった。

「相当参ってるね。そんなに嫌な客だったの？」

心配してくれる雅紀だが、本当のことは言えない。だから、あれこれ誤魔化すのも疲れる。

「うん、かなり、ヤバかった。お店の他の子に手出そうとするし、オーナーも怒るし。」

フェアリーの人たちが聞いたら怒るだろうな。

「めずらしいね。そんな客が来るの。」

「ほんと、めずらしい。ビックリしたものだ。」

「ふーん、そりやお疲れだったね。そろそろ出ようか。」

雅紀は気を遣ってくれて食事もそこそこに店を出て帰宅してくれた。

「じゃあ、早く風呂入って寝な。俺は先に寝てるね。」

「うん、ありがとう。じゃあ、お風呂入ってくる。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

毎日徐々にはあるが、会話が少なくなっている。

少しずつ二人の間に壁のようなものがあり、その厚みが増しているような感じがした。

「ミコちゃん久しぶり!」

「わあ、サトちゃん!」

「べっぜーん!何してんのここぞ?」

「ここぞって、それはこっこの台詞せりふ、ここはあたしの学校のそばでしよ。」

「ああ、そっか、私が本買いにここまで来たんだ。ゼミで使う本が、

この界限かいわいにしか売ってないのよ。マイナーな教授だからさ。」
「ええ、もうゼミとかやってるの?」

「うん、といつてもプレゼミっていうのかな。三年生のゼミに参加させてもらってるの。うちの学校そういう交流が盛んなんだよ。」
「へえ、あたしなんか一般教養じょうきょう取るだけでヒイヒイ言ってるのに、さすがお嬢様学校は違うわね。」

「なーにそれ、皮肉?でも、まんざら違うとは言えないわね。正直友達とかは疲れる。マジでお嬢様多いんだもん。」

「やっぱり。あたしたち庶民には付き合い辛いわよね、お嬢様とは。」

「ほーんと付き合いづらい。」

「どうですか、ここは庶民同士、ファミレスでも。」

「いい!ちょうどもう授業もないし、サークルは休みだし、暇だったんだ。」

「はいはい、どうせあたしはずっと暇ですから。」

「あーん、また凹む。いこう!ファミレス!」

「はい、お話聞いてね。」

「はいはい。」

本当に偶然だが、里子と久しぶりに会った。
どれくらいだろう?」

少なくとも三ヶ月以上は会ってない。

でも、あたしたちの間は今までと変わらなかった。

それが嬉しかった。

「ふう、やっぱりファミレスは落ち着くね。何か学校の友達でファミレス行ったことないとか言う人がいて、ビックリしたよ。ほんまもんのお嬢様で、外食はホテルのレストラン以外したことないんだって。」

「ふーむ、そういう方は人生損してるね。こんな寛げる場所が世の中にあるなんて知らないってことでしょ。それは、損以外のなにものでもないわ。」

「そうねー、ホテル以外の世界を知らないってことだしね。」

「そうそう、あたしなんかラブホ以外はホテルと言わないから。」

「それもどうかと思うけど。」

「キャハハハ！」

「えへへへー！」

やっぱり里子といると落ち着く、今は雅紀ともギクシャクしてるから余計この空間がホッとする。

「ところで、最近どうなの？」

「え？何が？」

「またまたあ、雅紀さんのことに決まってるじゃん。その後進展は？」

「うん、それがね。」

そう言っつて、半年前くらいから同棲を始めたこと、水商売を始めたこと、事務所の話、風俗を始めたこと、雅紀とギクシャクし始め

たこと等など、順番に話していった。

「ひえ〜、めまぐるしいね。よくこれだけ短期間にそれだけのシチュエーションがかわるもんだ。」

「変なところを感心しないでよ。真面目なんだからこっちは。」

「ごめん、ごめん。いやあ、それに比べたら私なんか平凡すぎて、なんだか、逆に凹むわ。」

「ちよつとあたしの悩みを話してるんでしょ。なんでサトちゃんが凹むのよ。」

「なんかねー贅沢だとは思っただけど、恋人ができるわけでもなく、家と学校の往復で、本当に進学してよかったのかなって時々考えちゃうんだ。」

「サトちゃん……。」

「あつ、ほんとごめんね。平和ボケだよな。本当は幸せなのわかってる。でも、人間て欲が深いでしょ。だから、あるものの大切さに気づかないで、ないものばかり追っちゃう。それが人間の弱さでもあるのかな。」

「あるものの大切さ……か。そうだね。なんか、あたしも結局は夢を追ってるから、そっちにはかり気が取られて、今あるもの大切さを見失ってるのかも知れない。」

「うん、多分そうなんじゃないかな。雅紀さんは大切な人であることとは変わらないんでしょ？」

「うん。」

「ほら、人間近過ぎるとよくものが見えないときあるじゃない。同棲を始めて毎日傍にいてくれることで、かえって見えない部分があ

るんじゃないかな。」

「そうかもね。ほんとはその近くにいることを望んでたのに、ないものねだりなのかな。あたしが子どもだから。」

「うん、ミコちゃん本質的には甘えん坊だもんね。欲しいものが入っちゃうと、次の欲しいものに目が行っちゃうんじゃない？」

「あーある。そういうところ、さすがサトちゃんあたしのことよく分析してるわ。」

「伊達^{だて}に長年付き合っていないからね。」

「なんか嫌そう・・・。」

「ばれた？」

「ひっどーい！」

「でも、たぶん今のミコちゃんの状況も私の状況も見た目は全然違うけど本質的には同じ悩みに直面してるんじゃないかな。」

「うん、そんな気がする。こんなところまで気が合わなくていいのにな。」

「クスツ、ほんとにネ。やっぱり根底が一緒だから。」

「根底がね。」

「ありがとう。なんかちょっと見えた気がする。周りの状況に乗っているようで、振り回されてたんだね、あたし。もうちょっと、客観的に自分を見つめてみれば、もっといい方向に向う手段はあるかもしれないよね。」

「うん、大丈夫だよ、ミコちゃんは。大きな夢もあるし、やさしい彼氏もいるし。でも、風俗のことは言うのはヤバイよね。」

「うん、でも、何か言っちゃいそうなんだよね。隠し事嫌いだし、それを受け入れてくれるのが恋人だって変なポリシーみたいなのもあるし。」

「えーでも、雅紀さんだつて男だよ。援交は過去のこととして認めなくても、現在進行形はやっぱまずいんじゃない？」

「うん、確かにね。でも、風俗は風俗で、援交と同じ金を稼ぐ手段でしかないし、別に客に心を奪われてるわけじゃないしね。だから同じなんだけどどっちも。」

「だから、考え方は一緒でも、過去と現在では違うでしょ、相手の受け取り方が。」

「それが、受け止められないんだつたら、別れるかも。」

「えーそれはわがまま過ぎない？あくまでミコちゃんの主観でしかないわけだし。」

「わかってるけど、それも含めてあたしを愛してくれる人じゃないとあたし、ダメだと思う。」

「ん〜、言ってることはわかるけど、やっぱ男の人だし、現実問題は違う気がするなあ。」

「サトちゃんの言ってるほうが正しいってわかってるよ。でも、これは理性ではなく感情の問題だから。あたしは女だし、頭では考えてない。子宮で考えてるの。」

「あーあ、そう来ちゃったら何も言えないわ。あたしも女だしね。」

「ミコちゃんの考え少なからず納得しちゃってるから。」

「やっぱ、あたしたちには結婚は無理なのかな。」

「そうね。そういうことを理解してくれる男性が現れない限り無理

だわね。」

「やっぱね。雅紀は結婚のことも考えてくれてるみたいだけど、このままのあたしはさすがに受け入れられないわよね。」

「そうね。難しいかも。でも、私たちは一生友達だから、おばあさんになっても一緒にいるからね。いつそのこと適齢期逃したら一緒に生活しよっか？」

「ああ、いい、それ！賛成！今から家買う金貯めとくわ。」

「うんうん、田舎の一軒家がいいね。一緒に畑とかしてさ。」

「えーやだ、やっぱ東京の高層マンションのペントハウスよ。部屋がいっぱいあってそれぞれが好きなお仕事しながら、ご飯だけは一緒に食べるの。それで、一緒に寝るの。」

「えー、ミコちゃんはやっぱ都会が好きなんだ。」

「そう、年とってばあになっても東京に住むわ！」

「ひえ〜ついていけないかも。」

「ついてらっしゃい！」

「はい、まいったわ。」

「キヤハハハ！」

「ふう……」

そんな話をしながらも、現実には常に付きまとっていることを自覚している。

里子に話した風俗を雅紀にばらすというのは本心だ。

あたしのわがままであることは承知しているが、恋人にはいつで

もその時のそのままのあたしを愛してもらいたい。

「こんなおかしな女はおそらく誰からも愛されることは難しいだろう。」

男に愛されることはこの先一生ないかもしれない。

“ブーン、ブーン”

辰見さんからメールだ。返事の催促か？

《どうかなあれから。決心ついた？それとお金のことなんだけど、今電話できる？》

早速こちらから電話した。

「あー久しぶり、ごめんね急がせて。例の事務所の社長からどうかって話が出てね。まだ決断しかねてるって言ったら、なんかいい顔しないんだよね。ほら、せっかちだし、まだるっこしいの嫌いだし。でさ、金のめどがついたらきつと入りますって言っちゃったんだよね。俺。」

「えー、でも、お金のめどがつくのはどんなに早くても二ヶ月くらいかかります。」

「だよなー、せめて来月の中旬くらいには返事が欲しいんだよ。じやないとあの社長引き止めておく自信俺にはないからさあ。」

「来月の中旬で一カ月後ですよ。ちょっと厳しいかもしれませんが。」

「んーあのね。実は、そう言うと思って、金が稼げるバイト仕入れ

てきたんだよ。」

「バイト？」

「うん、あー電話ではなんだからさ、会ってこないかな？今日、夕方空いてない？」

「何時ですか？」

「五時でも六時でもいいんだけど。」

「じゃあ、六時なら。」

「ありがとう。じゃあ、いつものスタバのところでいいかな？」

「はい、わかりました。」

そう言つて電話を切つたが、バイトつてなんだろう？まさか風俗紹介するなんていうんじゃないかな。

それならもうやってるっていわなきゃいけないし、いやだな。

まあ、考えていてもしょうがないので、とりあえず出かける準備をした。

「よう！悪いね。ご足労かけちゃって。あれ？なんか痩せた？」

「いえ、体重は変わってません。」

「そりゃ失礼。でも、なんかやつれたってどうか。」

「はあ、苦勞が絶えませんか。」

「言うようになつたね。」

いや、それは本心だ。

「まあいいや、えっと、実はね。金になるバイトって言うのは……」

そういつて何か鞆の中からごそごそと取り出した。
何かのサンプル写真のようだ。

「これ。」

え？目を丸くした。これって……。

「そう、見たとおり、A V。アダルトビデオの出演なんだ。」

「えーそれはちょっと。」

「まあ話だけでも聞いてよ。実はね。この会社のA Vは素人の企画モノ専門で撮ってるんだけど、いわゆるプロじゃダメなんだよ。本当の素人じゃないとどうしても最近の視聴者は目が肥えていて、バシるらしいんだよね。だから、リアル感を追求するために絶対素人しか使わないんだって。」

「はあ。」

「わかるよ。そりゃ所詮はA Vだ。やることは一緒なんだけど、ギヤラ聞いてよ。いくらだと思う？」

「いくらですか？」

「一本で二十万！すごくない？」

「すごい、一本出るだけで二十万ですか？」

「はつきりいつてこんなおいしい話はないよ。ただし、素人の単体（独りで出演すること）モノ、つまり、企画ではあるけどメインに

出るから顔出しも当然あるけどね。普通の企画モノや素人モノのギヤラなんて十万以下だし、たいてい平均で四、五万だしね。扱いがひどいと一万とかザラなんだよ。」

「そうなんですか？でも、前テレビで見ましたけど、有名なAV女優なら一本百万って聞きましたよ。」

「それって、二、三年かもっと前の話だよ。今の相場はいくら有名でもそうとうハードな内容でようやく百万超え、普通の単体じゃ七十万くらいが相場だよ。」

「えーそうなんですか、あんなにやられて七十万ですか。なんか淋しいですね。」

「だろ、今はAVの会社も弱小含めたら数百社あるし、その分コストを下げないと制作費が出ないからね。当然しわ寄せはギヤラにくるし、男優なんかもつとかわいそうだよ。あれだけ体力使っているところ、素人参加みたいな企画で男優もどきを集めて、いわゆるぶっかけとかさせて、ギヤラは千円交通費込みだよ。まあもつともそいつらは本当に素人で、AV嬢に手コキとかフェラとかされることを目的に来てる奴らだけだね。」

「ひえ〜、厳しい世界なんですね。そういうところも。」

「そう、厳しいよ。だから、この企画モノは破格中の破格だよ。」

「でも、内容はどんなものなんですか？やっぱハードなんですよね？」

「うーん、そのサンプルにある感じかな。」

「これっていわゆるSMって感じですか？それと3Pとかいうやつ・・・ですか？」

「うーん、まあね。でも、撮りはほとんど一日だから拘束時間は実

際七、八時間でスタッフもしっかりいるとこだし、メイクなんかもきちんとしてくれるよ。もちろん表AVだからモザイクかかるしね。」

「顔のモザイクは無しですよね。」

「あー無しだね。どうかなあ。これなら二本出れば四十万、すぐに養成所の金、出せるでしょ?」

「確かに、そうですね、やっぱりちょっと抵抗はありますよね。」

「『ちよつと』なんだ。八八八、普通の子ならいっぱい抵抗あると思うけど。」

「言葉のあやですよ。少し考えていいですか?」

「うん、でも、できれば来週頭には返事が欲しいんだよね。相手先もそれ以上は次の企画に間に合わないようだから。」

「わかりました。今週末には返事します。それと、これって表に出るってことは大量にレンタルとかに出回るんですか?そうしたらあたしだってことばれて、将来デビューできても表沙汰になっちゃったりしませんか?」

「その点は大丈夫。このメーカーのはレンタル禁止なんだよ。いわゆるインディーズレベルと違ってくれればわかりやすいけど、モザイクもヘアとか出しちゃうんだけど、そういうのはレンタル店には置けないんだよね。だから、主にアダルトショップか、通販でしか販売しない。それとデビューの時の話だけど、年間どれだけAVが出されるか知ってる?五千本以上だよ。ミコちゃんがデビューするまで何年かかるかわからないけど、借りに三年かかったとしてもその間に一万五千本ものAVが出てどんどん淘汰されてるから、販売物のAVなんてあつという間に消え去るよ。だから、安心して。」

「そういうもんですか・・・。」
「そ、そういうものだよ。」

まあ確かに世の中には腐るほどアダルトビデオの類は出されているようだから、よほど話題性がない限り一部の視聴者を除いてはほとんど見る機会などないだろう。

「じゃあ、とりあえず考えておいて。週末にまた連絡するよ。じゃあ！」

そういつて辰見さんはまたせつかちに店を後にした。

風俗の次はAVか。

でも二十万は魅力だ。

撮影も二本限定らしいし、それだけで四十万になるから今まで稼いだ金で充分養成所の金が出る。

でもあたしには金を貯めたいもう一つの理由がある。
自立だ。

いくら彼氏とはいえ雅紀の家にいるのはやっぱり居候の気分は拭えない。

前から思っていたように人間として自立しなければ対等な付き合いはできないと考えているから。

これはチャンスかもしれない。

AVに抵抗がないわけではないが、援交をしてた時と本質的には変わらない気がする。

周りに見られてるか見られてないか、その他大勢が画面を通してあたしのセックスを見てるだけだ。

それに見られたり、撮影されたりすることは元々好きだから。

注目を浴びるといふ点ではAV嬢もアーティストも変わらない気がする。

すでに気持ちは『やってみよう』という気になっていた。

あとは雅紀に言うべきかどうか。

普通の女なら当然言わない。

嫌われて別れられるのが落ちだからだ。

でも、あたしはそういうことを全部含めてあたしだから、それを認めて受け入れてくれる人じゃないとダメだ。

もっともそんな男はこの世の中にいるはずもない。

だから、一時を過いっときごす恋人になつたとしても結婚して普通の幸せを得ることは初めから諦めている。

でも、雅紀はあたしとの将来のことも真剣に考えてくれている。

この先一緒に歩んでいけるか、ここが勝負どころかもしれない。

エピソード13：自立2

「お帰り。」

あたしが帰ると珍しく雅紀が帰っていた。
まだ七時だというのにどうしたんだろう？

「早かったね。どうしたの？体調でも悪いの？」

「いや、そういうわけじゃないよ。ただやることなかったから早めに帰ってきただけだよ。」

そう言いながらも、どこか元気がない。

「ならいいけど…ずっと遅いしあたしの仕事のせいで不規則だから疲れが出るんじゃないかと思って…」

「そんなことないよ。神子が勤め出して二ヶ月くらい経ったし、慣れてきてるから大丈夫だよ。」

そうは言ってくれるがかなり負担なことは確かだ。

「ごめんね。負担がかかっているのはわかってるから。でも、どうにもできないから、本当にごめんね。」

「いや、それはいいんだ。ただ、俺はそれなりに協力してる気ではいるよ。だけど、その気持ちが必要しも神子に伝わってない。そんな気がするんだ。そう思うと俺の存在ってなんなんだろう。神子にとってなんなんだろう。ってわからなくなるんだ。」

「マーくん…。」

「神子、俺のこと信じてる？俺の神子への気持ち信じてくれてる？」

「もちろんだよ。マーくんのあたしへの気持ちは痛いくらいわかってるよ。」

「じゃあ、なぜ嘘をつくの？」

そう言っただけのあたしの前に紙切れを投げた。

ハッとした。

あたしのプチエンジェルの名刺だった。

出来上がったばかりのものだ。

でも、何故雅紀が…。

「悪いとは思ったけど、今日定期忘れてったろ？そこに転がっていたから、何気なく拾ったら、いやに厚みがあるから中見たんだ。そしたらそれが束になって出て来た。正直ちょっと手が震えたよ。」

言葉もなかった。

ついさっき、風俗のことやAVのことを雅紀に話そうって考えていたけど、先にばれてしまった。

今更『話そうと思ってた。』なんて言っても普通は信じない。だから、そう言うのはやめた。

「いつからなの？風俗始めたの？」

雅紀が力無く聞いてきた。

「二週間くらい前から。」

「やっぱそうか。神子がやたら疲れて帰ってきた日からか？」

「そう。」

何も言葉が浮かばなかった。

だから、雅紀の聞かれるままに答えることにした。

「いわゆるデリヘルだよな？どこの場所は？」

「事務所は目黒寄りの渋谷んだけど、行くのは都内全部と都下や千葉の東京寄りのとこまで。」

「……、悪いとは思ってないんだ？俺に内緒でデリヘルなんか勤めて悪いと思わなかったんだ？」

「……。」

思ったよ。

悪いと思っただし、だから話そうと思っただよ！って出かかったが、言い訳にしか聞こえないので、言葉を飲み込んだ。

「俺はね。確かに風俗されたのはショックだったし、でも、神子が金を貯めたいことわかってたから、それを俺がカバーして上げられないんだから、そこは仕方ないとも思った。一番嫌だったのは『嘘』をつかれたことなんだよ。」

「！」

「今までずっとお互いに隠し事せず、水商売のことだって話し合ってお互い納得して始めたじゃない。だから…俺を信じてもらえなかったのが、一番ショックだった。」

「話してもいい？」

「どっぞ。」

「言い訳になるから黙っていたんだけど…マークんに話そう、実は今日話そうって考えながら帰ってきたの。」

「……。」

「信じられないとは思っけど…本当にほんとなの。でも、先にばれちゃったから、やっぱり言い訳になっちゃおうよね…。」

「わかった。ちゃんと話してみて。」

そう言われて風俗を始めるまでのいきさつや実際の仕事のこと、唯さんを始め周りの人のことを順を追って説明した。

「経緯はわかった。周りの人たちがいい人ってことも。でも、やっぱり反対だよ。見ず知らずの男と絡むことも危険だし、やっぱり嫌だし…。本番はないと言ってもキスはするんだろ？ある意味そっちの方が耐えられないよ、俺には。」

「…だよ。それが普通だと思う。これ以上一緒にいることはやっぱり無理だよ。」

「ちょっと待って。それは、風俗やめて俺と続けることを選ばないってこと？」

「……。マークんとは一緒にいたいよ。でも、あたしには夢が…やっぱり夢が一番大事、マークんは大切だっと思ってとも、夢とは比較できない。あたしにはマークんの存在と夢の実現を同じ次元では考えられない。どっちも大切なの。わがままだし、そんなのずるいつてわかってる。でも、それが本心なの。」

「…、少し考えさせて…。」

そう言った切り雅紀は黙ってしまった。

五分、十分、と時間だけが過ぎた。

「神子が…、夢と俺を比較できないことは、何となくだけど理解した。」

雅紀が口を開いた。

「夢の実現のために金が必要なのもわかってる。しかも短期間に金を作らなければならぬことも。じゃあそのための手段として選択肢は風俗しかないのか？そこを考えてみようよ。」

「実は…。」

「ここまで来たらすべてを話そうと思ひAVの誘いがあることも話した。」

「AVはやっぱりまずいと思う。その辰見さんが言うように腐るほど販売はされてるけど、デビューとかして有名になれば必ずスキャンダルを捜す奴がいるし、そのネタを提供する奴もいるから、汚点になる可能性はかなり高いと思うし。やめた方がいいよ、AVだけは。」

やはり反対された。

「これもごく当たり前の反応だろうし、雅紀が話している意味も理解できる。」

でも、あたしの感情が納得していない。

「何か別の手段考えようよ。必要なら俺も会社に内緒でバイトするよ。それこそデリヘルのドライバーでもしようか。」

真面目に言ってくれる雅紀に本当にすまない、と思った。
でも、短絡的かもしれないが女が大金を得るには身体を張るしかない。と思う。

だから、援交に走ったし、水商売や風俗も始めたのだから。

「ありがとう。でも、風俗やAVをやるのは、もう一つ理由があるの。」

「……。」

「自立。ちゃんと自分で自分の生活を支えたい、て思ってるの。今のままじゃマークくんにおんぶに抱っこで自分の足で歩いてるって言えない。それじゃマークくんとも対等な立場で付き合ってるとは言えないし、それはただの依存だと思うし。うまく言えないけど、マークくんのこと大好きだからちゃんと同じ自立した人間として付き合っていきたい。そのためにはお金をためて独りで暮らして、自分の力で生活してみたいの。」

「別に神子は俺に依存なんかしてないよ。そりゃ金銭的には多少みてるけど、それは今の立場が違うだけだよ。神子は学生で俺は社会人でもかいい年のおっさんだから。別に養ってるなんて恩着せがましいことは思ってないよ。」

「わかってる。マークくんがそんな風に考えてないことはちゃんとわかってる。これはマークくんの問題じゃなくてあたし自身の気持ちの問題なの。あたし元々コンプレックスの塊かたまりだから、自分が自分の手で生きてるっていう実感がないとその気持ちは拭えないと思うの。そこだけは理解してほしい。」

「……。」

また雅紀は黙ってしまった。
さつきよりより頭をうなだれて、背中がやけに小さく見えた。

「ここを…出ていきたいの？」

ようやく雅紀が話し出した。

「うん、出ていきたい。もちろん嫌だからとかマーくんが嫌いになつたとかではなく、マーくんのことを本当に愛してるからこそ、出て行って自立したい。」

「……。全てはすぐに理解できないけど、話していて神子の本心はわかった気がする。仕事のことを受け入れられるかまだわからないけど、そこまで神子が決意してるなら俺は反対できる術すべはないよ。大金持ちではないから全てをカバーしてやることは俺の力ではできないから。」

「そういう意味じゃ…。」

「わかつてる。神子がそんな風に考えているじゃないことはわかつてる。でも、神子が自分の考えがあるように俺にも考えや感じ方があるから。そう考えてしまふのは認めてほしい。」

やはり雅紀を苦しめてしまった。

わかつていたことなのに。

あたしは消えてしまった方がいいのかもしれない。

「すべてを消化できてはいないけど、神子が思うようにやってもらん。俺には見守るしかできないけど。でも、俺になんでも話してほしい。これから神子に起きる出来事はどんなに俺にとって嫌なことでも、隠さず話してほしい。そうしてくれることで俺自身のキャパ

を広げていこうと思う。俺も負けないから。」

「マーくん…、ありがとう。やってみるね。自分がどこまでできるかはわからないけど、試してみるよ。自分の力がどこまであるか。だから、見守っててね。マーくんが見守ってってくれるって思えば頑張れるから。」

「神子…。」

久しぶりの温かいキスだった。

毎日形だけのキスはしていたが、心の通ったキスは本当に久しぶりだった。

そして、自然に愛し合った。

やっぱり風俗ではどんなに上手な人でも身体の奥深いところからは感じないけど、雅紀とのセックスは身体の芯から感じる。

やっぱり愛とセックスは別のものなんだ。

愛がなくてもセックスはできるけど、セックスがなくても愛は得られる。

セックスと愛が結び付けば一番幸せなんだ。

雅紀の愛撫を受けながらそんなことを考えてしまった。

「神子、俺には神子がすべてだよ。なにがあっても愛し続ける。」

「ありがとう。あたしだって愛してるって言えるのはマーくんだけだよ。それだけは信じてね。」

「神子…。」

再び強く抱き合った。あたしたちはそのまま絶頂へと向かった。

エピソード14：AV体験1

《決断してくれたんだ。助かるよ。じゃあ打ち合わせしたいから今から会えるかな?》

例によって相手の都合を考えないせつかちな辰見さんのメールだ。

《わかりました。今からなら五時には渋谷に行けると思います。》

《じゃあ五時半にスタバで!》

こっちの意向は聞かずか。

《わかりました。五時半にスタバで。窓際にいます。》

返事はなかった。忙しい人だ。

いや、自分で忙しくしてるんだろう。

約束より早く渋谷に着いたので少し街を廻った。

そういえば最近一人でゆっくりしたことがない。

西武の方からパルコに立ち寄ってサラッとだがウィンドショッピングをした。

なんだかホッとする。

人間独りで好きなことをする時間は必要だ。

独りでずつと生きていくことは辛いけど、独りになる時間は持つべきだろう。

そんなことを考えていたらすぐに約束の時間になった。

「お疲れ様！悪いね。いつものことだけどこっちまで来てもらっちゃって。」

「いえ、いいんです。お世話かけているのはあたしの方ですし。」

「ん〜謙虚だねえ。えらい！そういう謙虚さが大事だね。最近の若い人にはそういう謙虚さが足りん！」

「はあ。」

「あーごめん、ごめん。また横道に逸れちゃった。そうそう、A Vの話OKなんだね。」

「はい、ただ確かめておきたいのは、インディーズでレンタル店には出ないってことと、ギャラはちゃんと20万もらえるのかってことと、それは前払いですか、後払いですか？」

「おー、なかなかビジネスライクに来たね。よしよし、まず、レンタル店には絶対出ない。出してるレンタル店があったら、それは違法だから。それと、ギャラはきっちり20万。税金とかは取られない。あと、払いは後払い。ただし、仕事が終わったその日に現金で支払われる。これは間違いない！」

「最後のは誰かの真似ですか？」

「わかった？間違いない！似てる？」

「ん〜どうぞでしょう。」

「あー、まあいいや、とにかくそういうこと。他に質問は？」

「そうですね。内容は？どの程度までわかります？」

「えっと、やっぱりちょっとハードだね。軽くSMが入って、次が4P、それと・・・アールがある。」

「ええ！アールってお尻ですか？」

「そう、お尻、アールセックスの中だしがある。もちろん、あそこ
の時はゴムするけどね。アールは生。」

「ええ〜。」

「急にトーンが下がったね。アールはしたことない？」

「ないです！」

「まあまあ、落ち着いて。そりゃそうか、十八でそこまではしない
か。」

「……………」

「やっぱ、やめにする？いきなりお尻はきついよね。」

「いえ！やります。ただ、病気とか大丈夫ですよ。エイズとか。」

「それは大丈夫、男優は全員性病検査が義務づけられてるから。男
優がエイズになったら商売できないでしょ。結構男優は大変なんだ
よ。プライベートでもほとんどセックスはしないらしいから。まあ
人によるだろうけど。」

「そうですか。なら、がんばります。」

「本当にいいんだね。OK出してから、すみませんじゃ、すまない
よ。逆に違約金取られるからね。」

「はい、もう、決めました。やります！」

「わかった。じゃあ、先方に連絡つけておくから、明日にでも撮影
日とか連絡するよ。ちなみに絶対ダメな日とかある？」

「えっと、大丈夫です。時間的にもそちらを優先します。」

「よし、決まったな。じゃあ、また連絡するから。じゃあ、いくね。」

そういつて、いつも通りそそくさと辰見さんは店を後にした。

辰見さんと別れた後、またしばらく渋谷の街をぶらついた。

今日は風俗の日だから、このまましばらくショッピング（といってもウィンドウだが）をしよう。

本当に都会はめまぐるしい。

でも、なぜあたしは都会が好きなんだろう。

田舎は嫌い。

サトちゃんみたいに老後は田舎で、なんて絶対考えられない。

やっぱりあたしがおかしいのか。

でも、都会の方が何でも便利だ。

買い物だつて近くで出来るし、電車が発達してるから車もいらない。

年をとれば足腰も弱るから、なおさら近くに買い物できる場所がある方がいいはずだ。

それに、人が多い分だけ安全でもある。

最近犯罪の多くは地方都市や田舎で発生している気がする。

確かに人の交流は少ないかもしれないけど、結局気の合う人間同士でくっついていれば交流を広める必要もない。

年を取ったら田舎という考えは間違え。

これからは『年を取ったら都会』だ。

我ながらいいキャッチだとかだらないことを考えて歩いていたら、いつの間にかデリヘルのある松涛まで来てしまった。

この辺は同じ渋谷でもどこか閑静な感じがする。

実際マンションも多く、居住地区だから、それなりに環境も整備されている。

『家賃はいくらなんだろう？』そう思っていたら、ちょうど不動産やがあつたので、表の広告を覗いてみた。

2LDKで27万！一月の家賃が27万、ほとんど生活費より高い。

1LDKでも22万。

風俗で稼いでもほとんど家賃で消えるな。

やっぱ、この辺りでは無理か。

代々木や初台、笹塚でも2Kで7、8万。
でも、築年が1972年とかだ。

あたしが生まれる十年以上前に出来た物件だ。
そういえば雅紀のマンションが7万とか言ってたな。

新築だっていったし、同じ家賃で二十年も違うのか。
やっぱり都会に住むのは至難の業だ。

でも、いつかきつとこういう家に住んでみせる。
根拠はないがそんな気持ちになった。

そんなのを見ていたらいつの間にか時間が過ぎて、もう、出勤時間になった。

『今日もがんばろう！』珍しく前向きな気持ちだった。

《日程が決まったよ。12日月曜日、時間は朝10時から、待ち合わせは新宿の南口、ターミナルのある辺りだよ。》

翌日、早速辰見さんからメールがあった。

いつもながら用件のみ。

愛想がない。

《了解しました。12日ですね。時間は10時に新宿南口のターミナルあたりですね。なんていう人が来るんですか？名前とか見た目とかわかります？》

《監督は新井さんという人だけど、一応僕も現場までいくから。撮影は見ないけど。》

現場まで来ると書いてあってちょっと驚いたが、撮影は見ないならいいか。

さすがに知ってる人に見られるのは嫌だ。

《ありがとうございます。お手数かけてすみません。では、その時に。》

こっちも対抗して愛想なく返信した。

しかし、返信は返ってこなかった。

やはり、愛想のなさでは辰見さんの方が一枚上手だ。

12日と言えば3日後だ。

今更ながら少し緊張してきた。

しかも、アールセツクス付き。

ただでさえ、初めてのAVなのにいきなりそんなハードなことがこなせるのか？

自信は当然ないが、結局はなるようにしかならない。

風俗の時同様、相手に任せればなんとかなるか。

そう思ったら少し落ち着いた。

とにかく20万のため、そう思うことにした。

「お帰り、お疲れ！」

「ただいま。お疲れ様！」

今日も仕事のあと、雅紀と食事に行った。

「AV決まったよ。」

「え？いつ？」

「12日。」

「3日後じゃん。すぐだね。」

「うん。」

「大丈夫？できそう？」

「うん。自信はないけど、お金のためにがんばるよ。」

「そっか、そうだよ。お金のためだよ。」

お金のことになると雅紀は急にトーンが下がる。
やはり、自分の不甲斐なさみたいなのを感じているのだろう。
あたしは全く気にしていないのだが。

「内容は？聞いてる？」

「え？ああ、うん。聞いてる。」

「どんな？」

「うん、食事中に言うのが憚はまられる内容。」

「え、どんな？ハードなの？」

「うん、かなり。」

「SMとか？」

「ずばり！さらに4Pもある。」

「4P?!」

「それと。。。」

「まだあるの?!」

「うん、そのお…アール。。。」

「え、アールセックス?!」

「そう、それ。。。」

「マジかよ。。。」

そう言って雅紀はガックリうなだれて、そのまま食事もやめてしまった。

「ごめんね。食事中なのに。」
「いや、確かに食欲はなくなったけど、ちゃんと話してくれてありがとう。」

「さすがに初めてなのにお尻はびっくりしたよ。」
「20万の意味がわかった気がするね。」

「だね。」

それからしばらくして店を出て帰った。

「ふう、疲れたね。」

「ごめんね。疲れ倍増させて。」

「いや、そういう意味ではないけど、確かにビビったな。」

「ねえ、お願いがあるの?」

「ん?」

「して欲しいの。」

「え?なにを?」

「ア〇ルセックス。」

「ええ?」

「だって、撮影でされちゃうんだよ。やっぱり初めてはマーくんにして欲しい。」

「神子……。わかった。お風呂入ろうか。」

「うん。」

こんなことを頼む女はめったにいないだろう。
でも、見知らぬ男が初めてでは嫌だった。
なんだか処女の気分だった。

「でも、どうすればいいんだろう？俺もお尻ではしたことないんだよな。」

「そっか、やっぱり何かヌルヌルしたもの、ローションとか必要かな。」

「だよな。なんかある？」

「これはどうかな？ベビーローション。」

「開けてみて。ん〜少しさらさらした感じだけど。試してみる。」

「その前にやっぱり、ちゃんともして欲しいな。」

「神子、可愛いよ。」

雅紀は優しくキスをしてくれて、いつものようにあたしの体中を愛してくれた。

「そっか。このヌルヌルなら。」

そう言っただけで雅紀はあたしの愛液をすくうとお尻の穴に塗りだした。

「あっ、やん！」

くすぐったくって、でも、案外気持ちいい。

もちろん雅紀にも舐めてもらったりしたことはあるけど、こっちに雅紀のモノを入れるかと思うとドキドキした。

「最初は指入れてみるね。」
「うん、うん。」

ゆっくりと雅紀の指が入ってきた。
意外だったが気持ちがいい。

雅紀の指は男の割には細くてきれいな指をしていたので、とてもやわらかく感じた。

「どう？大丈夫？痛くない？」

「うん。大丈夫、ちよっと気持ちいい。」

「ほんと?!じゃあ、もう少し広げてみるね。」

「うん、ゆっくりね。」

「わかった。」

そう言つと雅紀は指を二本にして徐々に深くまで差し込んできた。そして、中で指を少しずつ広げたりすぼめたりして、筋肉をほぐしていった。

「どうかな、いけそうかな？」

「わかんないけど・・・試してみる。」

「うん、じゃあ、俺のにもローション塗るね。手でしてくれる？」

「うん。」

雅紀の固くなったものをより硬くするためにローションを塗りながら、愛撫した。

「あつ、いいよ。じゃあ、してみるね。」

「うん。最初はゆっくりお願いね。」

「うん、ゆっくりね。」

いつもとは違う位置に雅紀のモノがあてがわれた。

徐々に力を入れられ、先のほうが入った気がした瞬間、物凄い激痛が全身を突き抜けた。

「痛い！だめ！やめて！」

「痛かった？ごめん。急すぎたかな。」

しばらく声が出なかった。

こんなに痛いものなのか。

とても、撮影の時に出来そうもない。

今更ながらいきなりではなくてよかった。

「やっぱ、無理かな？やめておく？」

「うん。大丈夫。雅紀のを最初にしたいの。あたしのお尻の処女奪って。」

「お尻の処女か。俺が最初に欲しい。」

そういうと雅紀のあそこはより硬くそそり立った。

「もう一回いくよ。最初に指から始めえよう。」

そういつて再び指を入れてきて、一本、二本と増やし、解きほぐしていった。

充分にやわらかくなったところで、雅紀の硬くなったモノが再び侵入を始めた。

「ああ！痛い！でも、大丈夫、耐えられそう。」

「大丈夫？うっ、きつい。俺のも締め付けられてすごいきついよ。力抜ける？深呼吸して息吐いてごらん。」

言われたとおり大きく息をして、吐いてみた。

するとおなかの力が緩まりさつきより楽になって、雅紀のモノがより深く入ってきてても耐えられた。

「入った。入ったよ。痛くない？」

「うん、大丈夫。あげちゃったね。お尻の処女、雅紀のものだよ。」

「うん、嬉しいよ。最初に俺が神子の男になった気分だよ。」

「うん。動いてみて。そつとね。」

「いいかい？動くよ。」

「あああ！」

お尻の中に雅紀を感じる。

同時に、痛みと紙一重の凄い快感が、全身を駆け巡った。

「ああ！いいよ。気持ちいい！」

「ほんと？！もっと動いても大丈夫？」

「うん。動いて、あたしの身体を貫いて。」

「うん、動くよ。俺も気持ちいい。凄いよ。凄い締め付けだ。」

「あああ！来てる！お尻で、お尻でいつちやいそう！」

「ほんとに?! いいよ。イッテ!俺も中でイッテいい?」

「いいよ。出して、雅紀の・・・全部あたしの中に出して。」

「出すよ! いい?!」

「うん! いい! あたしもイク! いっちゃう!」

「ああ!」

雅紀の硬いモノが脈打って、おなかの中に熱いものが吐き出されているのを全身で感じる。

「神子、最高によかったよ。今までにはない快感だった。」

「あたしも、あつ、まだ入ってる。雅紀の熱・・・感じる。」

「神子・・・。」

まだ、あたしの中に入れたまま雅紀はキスをしてきた。

ゆっくりと愛情一杯のキスをくれた。

すごく幸せな感じがした。

雅紀とできてよかった。

雅紀がティッシュを取ってきて、やさしくあたしのお尻を拭いてくれた。

「いやあん。なんか赤ちゃんになった気分。」

「うふ! 可愛い赤ちゃん、お漏らししちゃだめでちゅよ。ふきふきしてあげまちゅね!」

「やだあ、赤ちゃん言葉なんか使って。マークン実はそういうプレ

「イ好きなの？」

「さあ？どうでちゆかね？」

「好きなんだ。いやーん。マーくんの見方変わったやう。」

「いいでちゆーよー。神子も好きになるように赤ちゃんにしちゃいまちゆう。」

「やんやん、やでちゆー。赤ちゃんじゃないでちゆよー。」

「ほら、乗った！」

「ちがうもん！マーくんに合わせてあげただけだもん！」

「かわいいね。神子は。」

「もう、知らない！馬鹿にしてえ。」

「うふふふ。」

「キャハハ。」

こうしてずっと雅紀とじゃれあっていたい。

この時間は永遠ではないし、再び同じ時間を持つことはない。

でも、今確かに、ここに雅紀とあたしはいる。

二人の存在を確かめ合っている。

全身で、お互いの心で感じている。

エピソード14：AV体験2

ついに撮影当日、朝早くは辛かったが、時間には間に合った。

「ようー！つちこつち！」

辰見さんが大声であたしの方に声をかけてきた。

まだ、十メートルくらい離れているのに、この人には恥ずかしさというものがないようだ。

「あ、おはようございます。時間には間に合いました。」

「うん、よかったよ。このちよつと先に皆待機してるから、行くところか。」

「はい。」

ターミナルから少し離れたところにロケバスを停めているのとどこだった。

数十メートル歩くと角を曲がったところに小型のロケバスが停めてあった。

「おはようございますー！」

辰見さんが大声で挨拶をした。

「おはヨースー！」

「おはようございますー！」

「おはようございますー。」

「ウィースー！」

口々に挨拶をしてきた人々はざっと七、八人はいて、女性も二人いた。

「ミコちゃん、この人が監督の新井さん。」

「あ、始めまして、高津神子です。」

「君だね。神様の子は？」

「え？」

「あははは、いや、辰見さんに聞いたんだよ。自己紹介では必ず『神様の子』って言うってね。」

「……………」

黙って辰見さんを見るとバツの悪そうな顔をしていた。

「そつだ。まずは芸名考えなきゃ。」

突然の提案で驚いた。

「芸名……ですか？」

「うん、まさか神子ちゃんのままってワケにはいかないでしょ？」

「そうですね……………」

いつも、そつだが、こういう名前とかをつけるのに、バツとは浮かばない性質たちだ。

「さやか……………」

突然監督が言い出した。

「さやか……………」

「そう、さやか。気に入らない？」

「いえ、悪くないです。」

「じゃあ、OKだね。イメージピタリだよ。」
勝手にイメージをもたれているようだ。

「じゃあ、芸名はOK！あ、それとメンバー紹介しておくね。」

そういつて、助監督やカメラマン、メイクさん、スタイリストさんと紹介をしてくれた。

とても一度では覚え切れないが、メイクが、立花さん、スタイリストが阿部さんというのだけは覚えた。

二人とも女性だからだ。

どちらも感じの良さそうな人だった。

当然あたしよりずっと年上な感じだった。

「さーじゃあ、出ようか。とりあえず都内のスタジオに入るから乗って乗って。」

バスが発車して辰見さんが手を振って見送ってくれた。

考えてみればこれだけのために朝早くからあたしを出迎えてくれたんだ。

せっかちは玉にキズだが、いい人であることは間違いないようだ。

ついに出発、時間にすれば八時間くらいだが、長い一日になりそうだった。

「さあ、着いた。女性陣は先に降りてメイクと衣装決めてね。野郎

どもは機材入れて。」

監督の号令のもと、皆キビキビ動く、正直凄いと思った。実はちよつとアダルトビデオってことで、だらだらした現場を想像していたが、とんでもなかった。

皆、本当にシャキシャキと行動する。

あっけに取られて見ていると、

「どうした？もつとだらだらしてると思った？」

「え？」

監督の新井さんが話しかけてきた。

「どうして、そう思ってるかわかったんですか？」

「現場に来る初めての女の子は皆同じ顔をするからさ。」

「あつ。」

ちよつと恥ずかしかった。

あたしは歌を作る。

この人たちはアダルトビデオという映像を作る。

同じクリエイティブな仕事であることに変わりはないのだ。

だから、そういうプライドがこの人たちにあつて、常に「いいものを作るう」という情熱を持って行動してるんだ。

少し反省させられた。

「さ、いこうか、立花さん、よろしく！」
と言って、監督は立花さんにあたしをメイク室に連れて行くように指示した。

「ビックリしたでしょ、結構体育会系で。」

「あ、はい。反省しました。」

「反省？どうして？」

「同じものを作るものとして、アダルトビデオだからって馬鹿にしていた自分にです。」

「同じものを作る？あなた、何作るの？」

「歌です。歌手になりたいんです。まだ、全然ですけど。」

「そうなんだ。でも、いいところに気づいたね。たいていのコは現場のこの雰囲気圧倒されるか、もっと馬鹿にするかなんだけど、あなたいい感性してるわ。」

立花さんにそう言われて少しホツとした。

メイク室に入ると、かなり本格的だった。

よくテレビで見る楽屋のように壁一面に鏡が並んでいて部屋には煌々（こうこう）と明かりがついていた。

「じゃあ、メイクするから、ここへ座って、上着は脱いでね。」

「はい。」

そう促されて、席に着いた。

「こういうメイクは初めて？」

「はい、初めてです。第一、人にメイクしてもらうこと自体初めてです。」

「そっかあ。いくつだっけ？年。」

「十八です。」

「キヤー、十八歳かあ。いいなあ、肌ピチピチだもんね。メイクなんか必要ないくらいだよね。」

「そんなことありません。あたしブスですから。」

「なーにそれ、どこがブスよ。きれいな顔してるじゃない。」

「いえ・・・メイクさんならばれちゃうと思うんですけど、目、整形してるんです。」

「え？そうなの全然わかんないよ。でも、イマドキ目元整形してるコなんていくらでもいるからね。それに目元の整形だけでこんな美人になれたなら素材がいいんだよ。」

「全然美人じゃないです。」

「美人よ。顔立ちもきれいだし、ちょっと幼い感じもかわいいしね。」

「そんなことないです。自信ないんです。顔にもスタイルにも。」

「めずらしいわね。たいていアダルトに出てくるコは多少なりとも自信があるから、出てくるんだけど、まあ、逆にそういうコはたいしたことないことが多いけどね。」

「一緒です。たいしたことないのは。もっと最悪です。自信ないだけに。」

「ふーん、そっか、あなた自分の良さに気づいてないわね。ちょっ

と待っててね。」

そう言うと立花さんはあたしを置いて外に出て行った。
しばらくして戻ってくると、

「OK！監督に許可もらったわ。本格的にメイクするわよ。」
「え？」

「本来はね。こういう撮影だから結局はメイク剥げちゃうでしょ。
だからそんなに念入りにはしないの。スチール撮りの時とかは別だ
けど、実際のビデオを撮るときは軽くメイクしておしまいなんだけ
ど、あなたにはきれいになってもらいます！」
「え？え？」

そうやって立花さんは自分にも気合を入れるためか、髪をアップ
にして止めたした。

「いい、あなたがどれだけきれいになるか見せてあげるから、ビッ
クリさせてあげる。」

そういうと、まず、髪をかき上げられ丁寧にバンドとピンで止め
られ、余った髪はキャップに入れられた。
まず、今しているメイクを落とされた。

「あ、ちょっと、あ、えー！」

抵抗する間もなく、目の周りもすべてメイクを落とされ、スツピ
ンにされた。
鏡を見たくなかった。

「いいわ、そのまま目をつぶっていて。全部終わったら合図するか
ら。」

そう言うとき大きなバッグを取り出し、中には何段にも色々な化粧
道具が整然と並んでいた。

よく、テレビで見るメイクボックスだ。

それを最後に目をつぶらされ、開けないように言われたため、色
々いじられてるのはわかったが、どうなっているかは全く想像でき
なかった。

時間にして、もう一時間くらい経っている気がした。

そう思った時に、髪を止めていたキャップが外された。

目を開けようとするとき、

「ダメ！あとちょっと、まだ目を開けないで。」

そう言って、ストップをかけられて再びぎゅっと目を閉じた。

ドライヤーを使って立花さんの細やかな手で髪を整えられた。

そして、

「ふう〜」

という一息と共に、

「いいわよ。目を開けて。」

ずっと目を閉じていたので光がまぶしく、しばらく鏡の中の自分
がぼやけて見えた。

徐々に焦点が合ってきた瞬間、あたしは息を呑んで言葉が出なくなつた。

『これがあたし？』

言葉にならなかつたが、心でつぶやいた。

「どう、これが、あなた。美しいでしょ。でも、誰もがこうなるわけじゃないわよ。あたしは魔術師ではないのだから、元の素材がよくなければどんなメイクアップアーティストでも生かすことはできないの。」

ここでもモノを作る人のすごさを見せ付けられた。

情熱をもって仕事をするのでこんなにすばらしい作品が出来る。

だからこそ、誇りを持って仕事に取り組めるんだろう。

「ん？気に入らない？」

ボーっとそんなことを考えているあたしに立花さんが不安そうに聞いてきた。

「はつきりいって言葉が出ませんでした。すごいです。やっぱり魔術師です。立花さん。」

「だから、素材がよくなけりゃマジックはできないのよ。ネタが大事なの。」

「ありがとうございます。なんだか自信出てきました。あたしも化けるんだって。」

「おいおい！化けたんじゃないの、美しく変身したのよ。元がある

からきれいになれるのよ。そういう意味で自信をつけなさい。」

「はい、そう思うようにします。あーでも、もったいないなあ、これが撮影でボロボロにされちゃうんですよねー。」

「うふふ、やっぱりそこらへんが十八歳ね。かわいい。また、してあげるわよ。はい、これ名刺、携帯も書いてあるから、また、会いましょ。なんかミコちゃん気に入っちゃったから。」

「ほんとですか?! 嬉しいです! 立花さん、かっこいいし、素敵だったからお友達にしてもらえたら最高です。」

「もう、照れるからやめてよ。ほら、いってらっしゃい、次は衣装よ。」

そうやって、隣の楽屋に移らされた。

本当にいい人だ。

「はい、待ったわよ。わ! 立花さん気合入れたわね。でも、すっごい、見違えちゃった。きれい、オリエントな感じが凄い出てる。」

そうやってスタイリストの阿部さんはしばらくあたしの顔を上下左右と眺めまわした。

「うん、決めた。」

そうやって、奥の衣装棚から、何やらごそそと服や小物を出してきた。

「ここはねーアダルトの現場だけでなくテレビの撮影なんかもあるところだから、結構本格的に衣装とかもそろってるのよ。もちろ

ん、これは使っちゃダメっていう衣装はあるんだけど。」

「そうなんですか。だからこんなに中身が充実してるんですね。」

「そう。だから、ミコちゃんの衣装も選り取り見取りよ。そこで、このメイクでピンと来た衣装を今から着てもらいます。」

そういつて、チャイナドレスのような服に可愛い飾りが付いた服とピンクを基調に小さな花模様がちりばめられたブラとパンティ、それと髪をまとめるためのクリスタルの髪留めを出してきた。

「下着ごと替えてね。」

「はい。」

さつそくメイクが乱れないようにそつと服を脱いで、下着を付け替えた。

「うん！グッド！サイズぴったりね。あたしの目に狂いはなかった。」

ちよつと驚いた。

一言もスリーサイズには触れてないのに、ブラがぴったりだった。

「ふふん、あたしくらいプロになると、服の上からでもスリーサイズが読めるのよ。」

「す、すごいです。ほんとにぴったりですもの。」

「うつそー、実は事前にあなたのマネージャー、辰見さんだっけ？に聞いてたのよ。あの人にはプロフ言ってるでしょ。」

騙された。

確かに辰見さんにはプロフを言っている。

でも、悪い気分はしなかった。

たとえサイズを知っていてもここまで、カップまでが、ぴったりものを選んでくれるのはやはりプロだ。

「あとは、このチャイナドレスね。着てみて。」

そう促されて、袖を通してみた。

鏡で見るとセクシーだがなんとも言えない可愛らしさがあった。

《トントン》

ノックがして、立花さんが入ってきた。

「どう？立花さん、いけてない？」

「バッチシ！さすがキッコ（阿部さんの愛称らしい）センス抜群！あたしのメイクを生かせるのはやっぱりキッコしかないわ。」

「お褒め頂いて光栄ですわー。いいでしょ。あと、髪型お願いします。」

「OK！任せて。」

そう言うつとあたしを鏡の前に座らせて、ササツと髪をたくし上げ、阿部さんが用意したクリスタルの髪留めを要所に止めて、よく中国の小さな子がするような頭の両側にクルクルと巻き髪を束ねた髪型を作った。

「かわいい！」

「キヤー最高！あたしが男なら飛びつくわ！」

二人してキヤツキヤ騒いでる。
さつきまでのカリスマぶりとは大違いだが、すつごく可愛い人たちだと思った。

そして、鏡の中のあたしを見て、

「ほんとにこれ、あたし？」

とつぶやいてしまった。

「そう、これがミコちゃんよ。正真正銘、ミコちゃんなの。自信持てたかな？」

「はい！すごいです。お二人とも本当にマジシャンみたいです。最高です！」

「ありがとう。その笑顔であたしたちの仕事は報われるのよ。」

最高にいい人たちだ。
ずっと付き合っていきたい。

「さあ、男性陣が首を長くしてお待ちかねよ。いきましょ！」

二人に付き添われながら楽屋を後にした。

現場では、準備も整い、あたしの『入り待ち』だった。

ちょっと悪い気もしたが、逆に優越感みたいなものも感じた。

男性陣の中に連れられて入るとロケバスの人数よりさらに増えていた。

俗に言う「汁男優」（顔射とかぶっかけとかだけする人たち）だ

と後から聞かされた。

ドアからはいると、ダレていた部屋の中の空気が一変して、「おー！」という歓声と共に拍手が沸き起こった。

そしてあたしが前へ進み出ると、その拍手がやみ、一瞬シーンとなった。

『あたしの顔、変なのかな。似合っていない？』

そう思った瞬間、さっきの十倍くらいの歓声と拍手が鳴り響いて、その中を監督が歩み寄ってきた。

「すっごいよ。ミコちゃん、最高だよ。もう、このビデオは撮る前から大成功を確信したね。最高にきれいだよ。ミコちゃん！」

監督から最大級の賛辞をいただいた。

周りの助監督さんも寄ってきて

「こんなにきれいで可愛らしい子みたことないよ。マジでそこらのメジャーの単体女優なんかよりずっときれいだよ。」

かなり照れたが悪い気分はしない。

さらに絡みのある男優さんからも自己紹介とともに「こんな可愛いコとできる俺は幸せ者だ。」とか「男優やってよかった。本当によかった。」等と口々に言ってくれた。

『汁男優さん』たちは呆然とあたしを見つめていて、中にはもう股間をしごき出す人まで出てきた。

「さあ、じゃあ、入ろうか。」

監督の一言とともに現場の空気が再びピンと張り詰めた。

「そうだなあ、この素敵なメイクに敬意を表して、顔射は一番最後に撮ろう。」

スタジオの奥の方で、立花さんと阿部さんがガッツポーズを取っているのが見えた。

「じゃあ、オープニング映像から、カメラさん、よろしく。俺もハンディ入るから。」

そう言い出して、準備を始めた。

皆がセッティングしている間に監督が来てあたしに動きの指示をした。

俗に言う演出だ。

監督に言われたことを自分なりにイメージして動いてみた。

「いいよ、ミコちゃん！イメージ通り動けてる。その調子で！」

きつとこの監督は『良い指導者』なのだろう。褒めて伸ばすことに長けている。

「OK！バッチリ！次のシーンいくよ。」

「次はセクシーに見せてね。スリットとか強調して、足をこっちに向けて、視線はカメラにね。」

そう言われて動いているうちに、あたし自身のアドレナリンも放出されてきたようで、ハイな気分になり、カメラの前で大胆なポー

ズも平気でとれた。

むしろそれを快感に感じた。

やっぱり人に注目されるのを身体が欲している。

「いい！マジでミコちゃん初めての撮影？すごいセクシーだよ。今の視線、俺まで勃起しちゃったよ。」

嘘だとは思うが、そう言われて女として悪い気はしない。自分の魅力が前に出ているのだから。

「よし、ミコちゃん、いよいよ絡みに入るよ。いいかな？」

「はい、お願いします。」

「よし、いい返事だ。カズさんお願いします！」

男優さんが一人入った。最初は一对一の絡みだ。

「ミコちゃんだっけ、初めてだよ。緊張しないでいいから、彼氏にされてると思って力抜いて、俺に任せてね。」

身体は筋肉隆々だが、似合わず優しい言葉をかけてくれた。

「ここからはカットは入れないから、男優さんのリードに任せればいいからね。どうしても耐えられなかったり、嫌だったら、止めていいからね。リラックスしていいこう！」

監督にも言われて緊張が解けてきた。やれそうな気がする。

「よーい！スタート！」

カメラが回りだした。もう、止めれない。

男優さんはオーソドックスにキスから始めてきた。

最初は優しく恋人にするようなキスだ。

段々と唇や舌の動きが加速されてきた。

同時に手の動きも加わってきて、チャイナドレスの前の留め金がはずされ、ブラがはだけた。

次にスリットをめくられ、パンティがあらわになった。

胸と股間を同時に攻められ、徐々に気持ちも高めてくれる。

うまい。

やっぱり男優さんだけのことはある。

何百人と女性を相手にしてきたのだろう。

そのテクニクはさすがだ。

的確に感じるツボをついてくる。

「あ、あん!」

自然と声が漏れてしまった。

「いいよ。自然にね。感じるままに。僕に委ねて。」

そう耳元で囁かれ、濡れてきてしまったのが自分でもわかった。

さらに愛撫は続き、全身がとろけていくような感覚に襲われた。

気がつくともバックスタイルでパンティのあそこの部分だけめくれ、そこをカメラがアップで撮っている。

恥ずかしい。

でも、嫌じゃない。変な気分だ。

その隙間から今度は男優の舌が侵入してきた。

あたしの愛液を音を立ててすすりながら舌を使ってあそこをかき回してくる。

どんだんあふれ出てくるのがわかる。

「はぁ、はぁ。」

息遣いも自然と荒くなってくる。

次に指が侵入してきた。

雅紀のとは違って太くゴツゴツした感じなのがわかる。

徐々に深く差し込んできて、動きに加速をつけてくる。

出し入れする際に親指の腹で最も敏感な箇所も刺激してくる。

気持ちいい。

さらに指の動きが激しさを増してきた。

「あ！だめ！イク！いつちやう！」

「うん、いいよ。イキな！」

言いながら動きは益々激しくスピードを増す。

「あ、あー！」

大声を上げながらいつてしまったが、男優はまだ動きを止めない。さらに大きな波がくる。

気がつくにあそこから液体が飛び散っていた。

これが『潮吹き』というもののなを初めて知った。

どンドン吹き出してくる。

止まらない。

どこからこんなに液体が出てくるのか不思議になった。

ようやく解放された後、あそこがジンジンした。

次はいよいよ絡み、挿入シーンだ。

少しだけ休ませてもらうと、その体勢のまま、再びカメラが回りだした。

はだけたチャイナドレスの裾から手を入れられ、再びあそこに手が伸ばされる。

今度はパンティをスルツと脱がされた。

あらわになったあたし自身をカメラの前にさらけ出す。

次に男優が手を掴み自分のいきり立ったモノを触らせる。

なされるまま男優の股間を触っていると、自らブリーフを脱ぎだし、ピンと張ったモノをあたしの顔の前に突き出した。

求めていることがわかったので、応えた。

男優のモノを最初は先の方を舌でかるく突き、くぼみのあたりから、舌を尖らせて刺激して、さらに根本から舐め上げた。

「お！いいよ。うまいね。」

男優がいったので、調子に乗ってさらに愛撫を続けた。

『あたしだったって風俗嬢なんだから』

と、くだらないことを考えながらも何とかこの男優を参らせようとあらゆる攻撃を仕掛けた。

「おお！お！いいねえ、本当に十八歳？上手過ぎます。」

そう言いながら、こちらをちらりと見てニヤツと笑ったので、あたしも彼のモノを啜えながら視線で微笑んだ。

その視線が良かったらしくカメラマンが『こっちこっち』と指でカメラに視線を向けるよう指示してきた。

そう言えばAVを見ていて確かに、視線はどんな時でもカメラに向っていて男優を見ているわけではない。

「よし、充分。」

そういうと今度は攻守交替して、少し荒っぽくあたしの足をつかんで自分の方へ、グツと引き寄せて、両足をガバツと開き、くの字に曲げさせた。

いよいよだ。

そう思ったら、一旦カメラを止めて、男優がゴムを付け始めた。そりゃそうか、と思った。

でも、さすがにすばやい。

こっちの気持ち冷める前に、付け終わると再び元の体勢に戻り、その瞬間からカメラも回りだした。

絶妙のタイミングだ。

「いくよ。」

そうつぶやくと、彼のものがグッと入ってきた。

「ああ！」

声を上げたあたしにお構いなく、さらに深く差し込んできた。

しばらく深く入れたままジツとしていて、身体を密着させてきて、キスをし始めた。

これがこの人のやり方なんだろう。と思った。

ひとしきりキスをするとう身体を合わせながら腰だけ動かし始めた。

深く、浅くが繰り返され、あたしの中がクチュクチュと音を立ては始めた。

音声さんが大きなさおのついたマイクをあたしの股間に近づけてその音を拾った。

次に身体を離すと体勢をバックにされて、今度は後ろから突き上げられた。

そのまま、バックの騎上位、回転をさせられ、対面の騎上位、男優が寝たまま上に乗って動かされ、最後は正常位でクライマックスを迎えた。

「ああ！いっちゃうよー！」

あたしがそういうと、男優の腰の動きはさらに加速を増して、

「俺も行くよ、いいかい、いくよ！」

そういった瞬間身体を離し、ゴムを取って、あたしの肌蹴たチャイナドレスの胸元に精液をかけた。

監督がゼスチャーで精子をすく上げるような仕草をしたので、指示通り、かけられた精子をすくい上げ手で弄もてあそんだ。

「OK！カット！」

監督の声と共に拍手が沸き、阿部さんがタオルをもってきてあたしにかけてくれた。

無事一本目の撮りは終えられた。

その後、昼の休憩に入ると監督に言われた。

とりあえず、楽屋に入り、精液のかかったチャイナドレスを脱いで渡されたバスローブに身を包んだ。

「お疲れ様！どうだった初撮り？緊張した？」

キッコさんが聞いてきた。

「なんかわからない間に終わってました。男優さんがリードしてくれたから。」

「あの男優さん優しいでしょ。評判いいのよね。カズさんって言うんだけど、けっこう初めてのコはあのカズさんが当たること多いみ

たい。やっぱり色々な意味で上手なんでしょうね。」

立花さんが言った。
なるほどと思った。

この業界に入ってはじめてのコはやっぱり慣れるためとこの仕事を気に入ってもらうためにそういう、「初物用の男優はつもの」というのがあるらしい。

「でも、自然だったわよ。いい感じに見えたし。」
キッコさんが言った。

「えーずっと見てたんですか？」
「うん、バッチリね！」

「やだあ、恥ずかしい。同性に見られるのってやっぱりハズイですね。」

「そうねーあたしはレズだから、同性に見られると興奮するけど。」
「すごいことをサラッと言う人だなあ。」

「ここは突っ込まない方がいいのか？そう思っていると、」

「ちょっと突っ込んでよ。レズっていうところあっさり流さないでくれる。『うっそーっ』て言うタイミングないじゃない。このまま帰ったらあたしがずっとレズって思うでしょ。」

「はい、思います。」

「この子ったら、いつからそんなすれた子になったの、ママは知りません！」

「えーん、ママごめんなさーい。」

「ミコちゃん。やるわね。あんたすごいわ。もうすっかり現場に溶け込んでる。」

横で聞いてた立花さんが目を丸くして言った。

「そんなことありません。キッコさんがリアクション欲しがるから応えたまでです。」

「それよ。その応えるってのが、普通のコにはできないって。あんたはすごい!」

「そうですか?ふつうですよ。あーでも、あたしの友達にそう人いるから、慣れてるのかもしれない。」

「その友達も連れてらっしゃい。」

キッコさんが突っ込む。

「えー!」

「キャハハハ。」

「さ、馬鹿やってないで飯にするよ!」

立花さんが声をかけた。

昼食はいわゆるロケ弁だが結構美味しかった。

一時間ほど休憩してその間あたしたち女性陣は色々なおしゃべりを楽しんだ。

アダルトの世界がこんな風に明るく楽しいとは想像も付かなかった。

本当に気さくな人が多い。

この現場だけだろうか。

エピソード14：AV体験3

午後の撮影が始まった。

次は軽いSMのあと、いよいよアールセックス付きの4Pとぶっかけだと、さつき監督から説明があった。

一応アールセックスは初めてと言ってあったのでどうしても無理そうな場合は疑似ぎじ（入れてる振り）をすることのことだった。でも、『疑似ぎじ』という言葉がひっかった。

いくらアダルトでもこれは作品作りだし、それを見てオナニーをする男の人が一杯いるのだから、誤魔化ごまかしはいやだと思った。

最初はSMからだ。

さつきとは違う衣装、というかほとんど裸に近いがいわゆるボンテージと言われるゴムや革の下着を着せられた。

かなりきつく脱いだ跡が赤くなった。
そして縄。

縄師なわしと呼ばれる専門家？に縛られたが不思議と痛みはない。

端からみてるときつそうだがうまく力が加減されていて痛みが少ないようにされているらしい。

しかし、その格好で片足を吊り上げられ後ろ手で吊られるとさすがに不自由だ。

しかも縄が股間に食い込んで、痛みも感じる。

男優が二人現れ、一人が身体をまさぐり一人は罵声はせいを浴びせなが

ら鞭を振るったり掌で叩いたりした。

口にもボールのようなものがついた猿ぐつわをつけられたので半開きの口からよだれが垂れて冷静にみると情けない格好だ。

監督の指示で始めは嫌がり男優を睨んだりするが、やがて快感に恍惚とする表情を浮かべるように言われ、その通りに演技した。蠟燭を垂らされたりバイブを使われたりと色々責められた。

しかし、やってみてわかったが本当にMでない限り全く感じることはなかったのではとんどが演技なんだと思った。

次に待っていたのは4P&ぶっかけ、そしてア〇ルセックスだ。30分ほどの休憩のあと撮影が開始された。

まずは四人の男優に体中をまさぐられいじられたあと今度は四人に順番に“ご奉仕”をさせられ全員がスタンバイになったところでア〇ル責めが始まった。

まずは浣腸を三本くらい入れられその場で皆が見てる前で脱糞させられた。

恥ずかしさよりも苦しくてとにかく出したい欲求が優先し、見られてることも忘れ排泄した。

一端カットが入れられシャワーを浴びたあと再び男優陣に責められア〇ル調教を受けた。

充分にほぐされた後、いよいよア〇ルセックスが始まった。

始め痛みを感じたが思ったよりはすんなりと入り少しホツとした。が、次に前にも入れられた時には快感と苦痛が入り混じった感覚が体中を駆け巡り同時に口と手でもご奉仕してるうちにわけがわか

らなくなった。

そうして責められているあたしに目掛けて次々に汁男優がぶっかけを始めた。

顔はもちろん体中あらゆるところに精液をかけられたあたしは全身どろどろだ。

一通り汁男優のぶっかけが終わり、責めていた四人の男優が果てた時にはもう天地もわからない状態でしばらく意識が飛んでいた。

「お疲れ。頑張ったね。いい作品になったよ。ありがとう。」

我に返ったのは監督のその言葉がかけられてからだ。

ゆっくりと男優たちに支えられシャワールームに向かった時、皆から拍手で見送られた。

シャワーを浴び『すべてが終わった』と感じた時、涙がこぼれた。悲しかったわけではなかったし、後悔したわけでもなかったが、涙は止まらなかった。

シャワー室を出てバスローブ姿で楽屋に戻ると立花さんとキツコさんが拍手で迎えてくれた。

思わず泣き出したあたしを二人が黙って優しく抱き包んでくれた。

監督が入ってきて再び^{ウツク}労ってくれた。

「ほんとに頑張ってくれたね。うちの撮影はこういう風にハードだから結構途中でリタイアしちゃうコもいるんだよ。神子ちゃんはずごいよ。頑張りもあるし演技で見せてくれた表情も最高だったよ。」

神子ちゃんさえよければまた仕事一緒にしたいな。」

『また一緒に仕事がしたい。』という言葉がなにより嬉しかった。

キッコさんや立花さんも口々にあたしの頑張りやよかったところをほめてくれた。

心の中が満たされた気分になった。

スタジオを撤収したあとロケバスで新宿駅まで送ってくれた。

そこには辰見さんが待っていてくれて約束の二十万をその場でくれた。

「ご苦労様。監督がほめてたよ。あの監督があそこまでほめるのは、めずらしいよ。」

辰見さんの話しによると、仕事には妥協がない人らしく現場で泣かされる女のコミ結構いてスタッフもついていけなくて入れ替わりも激しいらしい。

温厚な感じでもそうは見えなかったが。

「それだけミコちゃんが良い仕事をしたということだよ」「そう言っ
て辰見さんもほめてくれた。」

やったことはただのアダルトビデオに過ぎないかもしれないが、
あたしの中で大きな自信になったことは確かだ。

エピソード15：芸能プロダクション1

やっと金が貯まった。

あれからほぼ毎日風俗をこなし、もう一本ビデオに出て結局一月で七十万を稼いだ。

まだ引越し資金にはならないが、養成所に納める金はできた。

辰見さんに連絡をとり芸能プロの社長に話をつけてもらい、事務所に挨拶に行きつつ、養成所の見学をさせてもらうことになった。

「ようやくだね。よく頑張ったよ。」

「はい、うれしいです。」

「大変だったと思うよ。俺が君でもそこまではできないよ。」

「確かに大変でしたけど、色々勉強にもなりましたから。得るものも大きかったと思います。」

「すごい前向きだね。その年で立派だよ。」

相変わらず話方はぶっきらぼうだが感心してくれていることはわかる。

「ところで、養成所に入ると結構遅い時間まで拘束されるから、今の住まいの千葉じゃ帰れなくなることもあると思うけど大丈夫かな？」

「そうですね。実は引越しを考えています。」

「え？そうなの？今彼氏と住んでるんだよね？大丈夫なのその辺は

「？」

「実際お金の問題がありますから、すぐってわけにはいきませんが、彼氏にはそういうことは言ってます。」

「そうなんだ？彼氏としては不満なんじゃない？」

「ほんとはそうかも知れませんが、理解はしてくれました。」

「ミコちゃんの夢のため？」

「はい。」

「彼氏もえらいなあ。俺が彼氏の立場なら許せないかも。」

「それが普通ですよ。彼氏には感謝してます。」

「だね。じゃあ彼氏のためにも頑張らなくちゃね。」

「はい。」

事務所についた。

“ 梶芸能プロダクション ”

ベタな名前だが、ビルのワンフロアを占めていた。

やはりアダルトビデオのプロダクションとは雰囲気が違う。

「失礼します。」

ちゃんと受け付けがある。

「はい、いらっしやいませ。」

受付嬢も綺麗だ。

「三時からアポお願いしていた。辰見です。社長はご在宅です。」

か？」

「はい、辰見様ですね。伺っております。どうぞこちらへ。」

そう言われて受付嬢に案内されてあとに続いた。

中は机の列が十くらいあって、部署もいくつかに分かれているようだ。

一番奥の社長室と書かれた部屋に通された。

ドアを抜けるとさらに奥に部屋があり、手前の部屋の応接室で待つよう指示された。

フカフカのソファに腰掛け社長の来るのを待った。

二、三分待つと奥の扉が開き 社長が現れた。

「おう！辰見くん、待たせてすまんだな。色々片付けないかん仕事があつてな。」

「いえいえ、こちらこそ貴重なお時間をいただきありがとうございます。」

「高津さんもよう来たな。来ると思ってたで。」

「はい、ありがとうございます。お世話になります。」

「まあまだお世話するかはわからんけど、とりあえず養成所見学してみてや。」

「はい。ありがとうございます。」

「ほな早速いってみよか。」

そう言って立ち上がった社長のあとに続いた。

「養成所はこのビルの六階を貸し切ってるんや。まあ見て驚くでえ。」

ニコニコしながら社長が言った。

エレベーターに乗り込み六階までたどり着くと突然視界が開けた。

フロアの一番奥はガラス張りになっていて渋谷の街並も見える。

反対側はいくつかの部屋に分かたいて教室風になっている。

「ここにも受付があってレッスン生はそこで申告をして出席を伝えるらしい。」

「今ちようどダンスのレッスンをしとるんで、ちよつと覗いてみようか。」

そうやってガラス張りのフロアに向かうとそこに透明な仕切りがあり、中でレッスン生がダンスをしていた。

「ほら、今一番前の左側から二番目のコいるやる？あのコ来月デビューが決まったんや。もちろんメジャーやで。」

見ると綺麗な顔立ちで長身でスラツとしたモデル体型の女の子が、身体を動かしていた。

同時にその娘に自分を投影してダンスをしているあたしを想像した。

“メジャーデビュー” “素敵な言葉だ。”

その言葉を思い浮かべながら『ほんとにできるんだろうか』という不安と『絶対やってやる』という気持ちがあざわだかました。

「どや？きつそうやる？」

確かにさっきからもう十分以上休む間もなく踊りっぱなしだ。

「一日のスケジュールは朝九時から午前中は講義や歌関連のレッスン。午後は一時からはダンスや楽器、中には日本舞踊なんかもある。終了は日によって多少違うけどだいたい八時頃や。」

一日十時間、勉強しっぱなしってことか。
でも、好きなことだからやれる気はした。

「確かミコちゃんは学校いっとったな？」

「はい。」

言われて気付いた。

学校には行けなくなるのだろうか？

「もちろん学校通ってるコも大勢いるさかい、基本的には自分の時間に合わせてレッスンを選択するんや。そやけど専科で通っとるコに比べたらやっぱ不利やから、実際休みはなくなるで。養成所は土日もやっとする。年中無休や。」

すごい、やっぱり気合いが違う。

学校は通えるかもしれないがバイトは厳しいかも。

金が得られないと自立もできない。

その点は困った。

「ん？どうした？なんか表情が暗いけど。」

事務所を出た後、辰見さんがあたしの表情に気づいて言い出した。

「いえ、別に。ただ・・・。」

「ただ？なんか気に入らなかつたかな？」

「いえ、そうじゃないんです。ただ、お金のこと考えてて。レッスンを始めましたらバイトする時間ないかと思って。」

「ああ、そうか、当面の授業料は払えるだろうけど、レッスンが続けばまた金かかるしね。」

「はい、夜の仕事を続けるにしても、身体がもつかどうか、ちょっと自信なくて。」

「だよ。さすがに朝から夜までレッスンして夜からバイトじゃ、身体が持たないよね。それに通学にも時間かかるだろうし。」

やっぱり千葉には無理だ。

先に引越すべきなんだろうか。

雅紀の顔が浮かんだ。

「とにかく、実際に決めるかどうかは、よく考えてミコちゃんが決断しないとね。決心がついたら連絡してくれる？あの社長、見たとおりバリバリ関西人だから、しかも大阪商人だから、気が短いのであるべく早く返事は欲しいんだけど。彼氏とよく相談してごらん。」

「はい、そうしてみます。本当にありがとうございました。」

「いや、御礼を言われるのはまだ早いよ。本当にミコちゃんがプロダクションに入ってデビューが決まったら御礼してよ。」

「はい！そうします！ありがとうございます。」

「がんばって。きっとミコちゃんなら、できるよ。」

「はい、頑張ってみます。」

そうだったが、どうしようもない不安が心の奥底から湧き出てくるのを感じていた。

辰見さんと別れたあと、千葉に帰る気になれなかった。

雅紀と相談しなきゃいけないと思いながら、どうしても足が千葉には向かなかった。

そして、ほとんど無意識にミサキさんにメールをしていた。

メールの変わりに返事は電話できた。

「どうした、ミコ？」

「すみません。忙しいのに。実は……。」

少し事情を話すとミサキさんは途中で話をさえぎって

「わかった。今そっちいくから、ちょうどあたしも今渋谷にいるから。例のスタバで。」

そういつて電話が切れた。

あたしのわがままにすぐに応えてくれたミサキさんに申し訳なかったが、今話ができるのはミサキさんしかいなかった。

「おまたせ！どうした暗い顔して！」

ポンと肩を叩きながらミサキさんが、カウンター席の隣に座った。

申し訳ないのと、どうしようもない気持ちが入り混じり自然と暗い顔になっているのだろう。

今までのいきさつをミサキさんに話した。

「ふーん、そっか、やっぱり芸能界って金かかるんだね。でも、とりあえずの入所の金とか、レッスン料は払えるんだろ？」

「はい、向こう三ヶ月分くらいは。でも、その後、続けられるかわからなくて。バイトしないととてもじゃないけど無理です。もちろん風俗は続けるつもりなんですけど、それだけでは追いつかない気がして。」

「んー、実際、レッスン終わって9時入りしても、多くて3本くらいだよな。それでおそらく帰りは2時か三時くらいになるから、とても千葉には戻れないよね。睡眠時間もとれないしね。体壊すのは目に見えてるよね。」

「.....」

「おいおい、落ち込むなって。とにかく、今はレッスンを優先したら？三ヶ月あるなら、やってみてその間に、スケジュールとかそういうのうまく組めるようになれば、時間も少しは融通がきくんじゃない？」

「はい、それしかありませんよね。」

「うん、それで、夜こっちで仕事できるようになれば、ミコは人気者だから一日五本くらいこなせば日銭が7、8万は入るだろうから、週3くらいでなんとかなるんじゃないかな。」

一日に5本か.....

かなりしんどいが、それしか道がないなら仕方ない。

それにビデオの仕事も月に一、二本こなせば、なんとかなるかも。ちよつと、不安が消えた。」

「どつ？できそう？そついう生活。」

「はい、やるしかないですよ。とにかく、しばらくレッスンに専念して、スケジュールをうまくこなせるようにつてみます。」

「よかった。やつと笑顔が出たな。ミコは変に生真面目まじめだから、落ち込むと本当に落ち込むからな。」

「ごめんなさい。」

「こらこら、それがいけないの。ほら、もう一度笑顔！あたしでよければいつでも相談してよ。ミコはあたしの大事な妹なんだから遠慮すんなよ。」

そついつてミサキさんは、あたしの肩をまたポンと叩いた。

その感触がスツと心の中のもやもやしたものをサツと払ってくれた気がした。

エピソード15：芸能プロダクション2

「ただいま。」

「お帰り、遅かったね。どうだった、プロダクションの様子？」
雅紀がもう帰ってきてた。心配そうにあたしの顔を覗き込む。

「うん、やっぱり凄いよ。ちゃんとしたプロダクションって感じ。」
「そっか、で、どうするの？決めるの？」

「うん、やってみようと思う。とにかくやってみないとわからないし。」

「そっか、じゃあ、これ。」
そういつて雅紀は、手に持っていた封筒をあたしに渡した。

「ん？なにこれ？」

中を見ると札束が入っていた。
厚みからすると五十万はある。

「ちょっと、なにこれ？どういうこと？」

「まあ、俺にできるのはこんなことくらいしかないから。」

「だめだよ。こんな大金受け取れないよ。」

「なに言ってるんだよ。これがなきゃ、せっかくのチャンスも生かせないだろ。」

雅紀はあたしが風俗で稼いでいることはいつていなかったから、ビデオの出演料だけで足りないと思い、こんなことをしてくれているんだ。

「いいから。とにかく、受け取って。」

「でも、やっぱ、だめだよ。いくらなんでもそこまでしてもらったら。」

「わかった。じゃあ、この金は貸す。」

「え？貸されても返せないよ。これ以上ビデオだって出る時間ないし。」

「ばかだな。すぐに返せなんて言わないよ。出世払い。」

「出世払い？なにそれ？」

「つまり、ミコがプロダクションでうまくいってメジャーデビューしたら、その時返して。」

「そんなのもつと保証できないよ。メジャーデビューなんてできるかどうかもわからないのに。」

「だから、借金した方が頑張れるだろ。ほら、なんだっけ前テレビでやってたじゃん。有名な女優が、売れる前に凄い借金して、それを返したい一心で頑張って有名になったって。それと一緒だよ。」

「そんな。わかんないよ。そんなこといわれても頑張れるかどうかなんて。」

「なんだ、そんな程度なの？ミコのデビューへの思いつて。」

雅紀が挑発的な言い方をしたので、少しカチンときた。

「そんなことない！がんばるよ。でも、こんな借金が返せるほど頑張れるかわかんないってことだよ。」

「いいかい、ミコ。これは、いわゆる自分を崖っぷちに追い込んで力を出すためだよ。大学に入ったときを思い出しなよ。最後まで頑張ったから大学だって受かったら？それと同じように、頑張るんだよ。ミコならできるって。」

「マーくん……。」

「な、だから、とにかくその金はレッスンに使ってくれ。とにかく今はそれに専念して。」

「……うん。わかった。ありがとう。絶対このお金は返すね。」

「ああ、待ってるよ。ちゃんとギャラで払ってもらうから。」
「そういつて雅紀は優しくあたしの頭をなでてくれた。そして、スツと顔を近づけてきて優しくキスしてくれた。」

「マーくん。ありがとう。」
「言いながら涙がこぼれた。」

「ミコ、泣かなくていいよ。俺はミコのために何かできるならそれで幸せだから。」

「ありがとう。本当にありがとう。」
「それしか、言えなかった。そして、雅紀に引かれるままに身体を雅紀の胸に沈めていた。」

レッスン初日。

辰見さんに、雅紀からお金を貰った次の日に返事をして、レッスンを受けることを決めた。

同時に、フォレストに連絡をして、店をやめることを告げた。
オーナーの林さんは残念がってくれたけど、事情を話したら「がんばれ」と言ってくれた。

そのあと、亜美さんやかおりさん、そして伊藤さんからも電話が入り、応援のメッセージをくれた。

「おう、ようきたな。いよいよ、レッスン開始や。覚悟はできてるか？」

「はい！よろしくお願いします。」

「よっしゃ、いい返事や。ええか、芸能界いうと、派手な側面しか見えへんから、なんでも華やかに見えるかもしれないけど、その舞台を目指す人間はごまんという。その中で這い上がるには相当な覚悟と努力無しにはなれへん。地道に頑張った人間が、最後は勝てる。と、いいたいところやが、頑張っても無理な場合もある。努力と運の両方が必要や。」

確かに頑張ったからと言ってメジャーになれるなんて保証はない。今から始めることがすべて無駄になることだってあるんだ。

「でも、やってれば必ず何らかの形でチャンスはくる。その時……」

「その時？」

「その時、すべてを捨てて、その波に乗れるかどうかで、その先が決まる。」

すべてを捨てて、波に乗れるかどうか？

「そのチャンスは、必ずやってる人間なら一度は訪れる。でも、人によってはそれに気づかず波に乗り損ねてそのまま外海そとつみに放り出される人間もある。その見極めは本人にしかわからん。波をつかめるかどうかは周りの人間でもわからんのや。しっかり、アンテナを張

つてしつかり勉強しいや。」

「はい！頑張ります！」

そう、勢いで返事をしたが、社長の言っている意味はよくわからなかった。

ただ、地道に努力していれば、チャンスは必ず来るといふことと、そのチャンスに気づかずには逃す人間がいるといふことは理解できた。ただ、そのチャンスに気づくかどうかは本人でさえわからないことがあるといふことのようにだ。

初日は歌のレッスンからだった。

「高津神子さんだね。講師の川端だ。よろしく。」
とてもぶっきらぼうな感じでちよっと苦手だ。

最初はテストといふことで、川端さんが、ピアノを弾く、それに合わせて即興で歌えとのことだった。

最初にメロディーが流され、それを二回繰り返す。
フレーズをその間に覚え、10分間の間に歌詞を考え、すぐに歌う。

譜面はない。

「じゃあ、今の要領で、一回目弾くよ。」
メロディーが流れる。

あたしは目を閉じて音階を口ずさみながら記憶に刻み込む。

二回目の演奏が流れる。

その間に歌詞を考えながら口ずさむ。

「よし、今から10分間、考えていいよ。」

「あろう。」

「なんだ？メロディはもう弾かないよ。これで記憶できないようじや、歌手は無理だからね。」

「いえ、もう歌ってもいいですか？」

「え？もう、って歌詞は考えたのか？」

「え？あ、はい。なんとなく、浮かびました。」

「ほう、わかった。じゃあ、歌ってごらん。」

あたしを一瞥いちへつすると川端さんはピアノに向った。

メロディーが流れる。

前奏からAメロディーに入る。

あたしは思いつくままに歌い始めた。

Bメロ、サビ、再びAメロ。

時間にすればわずか二分程度のものだ。

一応歌いきった。

川端さんはしばらくピアノに腰掛けたまま黙っている。
やはり気に入らなかったのだろうか？

「いいな。」

ボソッと川端さんがつぶやいた。

「……………」

「それ、今考えた歌詞？なんかそういう歌あったっけ？」

「いえ、今考えました。」

「だよな。聞いたことない歌詞だしね。」

「……………」

「ちょっと待ってて。」

そう言って川端さんはレッスンルームから出て行った。

5分ほどすると、一人の男の人を連れてきてなにやら耳元でボソボソと話している。

「高津さん、今の歌詞、覚えてる？もう一度歌える？」

「はい、たぶん……歌えると思います。」

「じゃあ、すぐ弾くから、歌ってみて。」

「はい。」

そういつと川端さんが再びメロディを奏でだした。

先ほどと同様に、いや、気持ちの中では先ほどよりシックリといった感じで歌い終わった。

連れてこられた男の人が、腕組みしたまま、シカメ面をしている。再び川端さんがその男に近づいてボソボソと話している。

話し終わるとその男が近寄ってきた。

「高津さん……ですね。」

「はい。」

スラッとして背が高く、一見冷たそうな感じがする顔立ちで、この学校にはめずらしくスーツを着ていた。

「申し遅れましたが、滝といいます。この学校では一応副校長みたいなことをしています。本業はプロデューサーです。」

プロデューサー？テレビ局かなんかの人なのか？

「歌、聴かせてもらいました。いいですね。ちょっと明日から別メニューでやってみませんか？」

「え？別メニューって・・・なんですか？」

「あー心配しないでください。要は、個人レッスンです。普通は学校に入ると集団レッスンから始まるのですが、高津さんの場合、個人の方が伸びるような気がするんです。」

個人レッスンと聞いて正直、ホッとした。

元々集団でやるのは苦手だから、個人でもらえるならありがたい。

その時はそのくらいにしか考えてなかった。

「そうですね。ありがとうございます。助かります。集団で何かするのには苦手なんです。」

「プツ、あははは！そう、集団は苦手か・・・あははは、こりゃいい。」

急に滝さんが笑い出した。

慌てた顔を川端さんがしている。

「おい、高津君、君、意味がわかってないね？」

「はい？意味……って？」

「ばか！ちよつとおいで。」

笑っている滝さんから離されて、ピアノの方へ連れて行かれた。

「いいかい。個人でレッスンをしてくれるってことは、芽があるってことだよ。」

「メ……ですか？」

「ああ、もう、そういうところは鈍いね。」

そういわれて少しムツとした。どうせあたしは鈍感だ。

「あのね。つまり、滝さんが個人レッスンでって言ってくれたのは、デビューを想定して特別に鍛える。ってことなんだよ。わかる？」

ようやくあたしにも意味が飲み込めた。

同時に身体力が抜けた。

ふらつとしたあたしの身体を川端さんが慌てて抑えた。

「おいおい、ようやく判ったみたいだね。ったく、変わったコだよ君は。」

そういつて川端さんも笑い出した。滝さんもまだ笑っている。

あたしはただその二人の様子をうつろな眼で見ている。

「マーくん！聞いて聞いて！」

帰るなりあたしは今日のスクールでの出来事を雅紀に話した。

「おお！そりやすごい！やったねミコ！デビュー間近ってことかあ！」

「えへへ、まだ気が早いよ。ただ、その滝さんって人がプロデビューして、デビューしたコは結構いて、ほら、最近売り出した野坂まゆとか、ガーディアンズとかは滝さんのプロデューズなんだって。」

「マジで、野坂まゆは映画とかも出て女優業もしてるよね。すごいなそれ。」

「でしょ。テレビ局にもコネがあるから、目を掛けられた人はすぐに歌番組とかに出れるんだって。」

「へえ、ミコが出たら、すぐ録画しなきゃな。」

「あはは、マークんおかしい。マークんには生のミコがいるじゃない。」

「そりやそうなんだけど、やっぱりテレビに映るなら、録っとかなきや。」

そんな会話をひとしきりした後、急に不安に襲われた。

本当にそんなにうまくいくのだろうか？

今までだって期待したときには何度も人に裏切られている。

そうだ、あたしの人生でとんとん拍子なんてありえない。

「どうしたミコ？急に黙り込んで。」

「え？ああ、ううん、なんか少し疲れたみたい。」

「そっか、そうだよな。レッスン初日で緊張もしたろうし、今日は早めに休もう。」

「ありがとう、マークん。」

その夜は眠りにつこうとしてもなかなか眠れず、結局朝までうつらうつらとしただけだった。

エピソード16：滝 恒彦

「おはよう。ミコ。」

「おはようございます。ミサキさん。」

今日はデリヘルの出勤日だ。

ミサキさんにも一通り事務所での話をした。

「へえ、すごいね。あんた。さすがあたしが見込んだだけのことはあるよ。」

「ありがとうございます。これもミサキさんが色々アドバイスしてくれたおかげです。」

「また、他人行儀なこと言って。あんたはあたしの妹だろ、姉がアドバイスするの当たり前だろ。」

「そうだった。ありがとうございます！おねえちゃん！」

「そうそう、それでいいの。かわいいね。ミコは。」

なんだか照れくさかったが、ミサキさんが自分のことのようにあたしのことを喜んでくれて本当に嬉しかった。

「でも、ちゃんとデビューするまで、この仕事は続けるの？」

「うん、じゃないとお金がないし……。」

「そっか……、当然事務所にはこのこと言ってないよね。」

「うん、言ってない。言ったら大変なことになるし。」

「だよ。いいかい、絶対客とかに言っちゃダメだよ。あと、他の女の子たちにもね。こういうところには業界関係者もいるから、情

報漏れがあるかもしれないし……。」

「なんか、ミサキさん探偵かなんかみたい。情報漏れなんて。」

「ばか、茶化すんじゃない。マジなんだからね。」

「ごめんなさい。うん、気をつけるよ。」

「ふう、ミコはしっかりしているようで、どっか抜けてるからな。」

「ごめんなさい。」

「もつとも、そこがかわいいんだけどね。」

そう言っつてミサキさんはいつものようにあたしにキスしてきた。

もつ、その行為にもだいぶ慣れたが……。

「あれ、抵抗しないね。さてはあんた目覚めた？」

「ミサキさんならいつでもOKですよ！」

「言っつわね。ほんとに襲っつちやおうかな。」

「……………」

「へへへ、やつぱウブだね。マジ思っつてんの。」

「ひどーい、ミサキさんの目が本気まじだったから。」

「そつお？まあ、まんざら嘘ではないけど。」

「もつ……………」

「あははは……！」

笑いながらミサキさんは煙草に火をつけて一息大きく吸った。

「ミコ、今のフレーズはなんだ。そんな音もとれないのか？」
「すみません。もう一度やらせてください。」

「だめだ！全然気持ちが入ってない。それじゃ、何度やっても同じだ。」

「すみません。」

「すみませんは聞き飽きた。・・・、休憩しよう。」
「・・・・・・・・。」

今日も滝さんにこっぴどく叱られた。

急に個人レッスンが始まり、毎日朝から夜まで色々なレッスンをこなし、週3回はデリヘルに出ていることもあり、一月たった頃になつて急に身体がいうことを利かなくなってきた。

そのせいで声も思うように出ない。

滝さんは休憩と言って部屋を出て行ったまま、帰ってこなかった。スタッフの人が来て『今日は終わり』だと滝さんからの伝言を受け取った。

完全にあきらめられてしまったのかもしれない。
底知れない恐怖があたしの心を蝕ほしくむんだ。

「ただいま。」

「お帰りミコ、どうだった今日は？」

「・・・・・・・・。」

「どうした？また滝さんに叱られた？」

「うん。」

「そっか、でも、厳しいのはミコが見込みがあるからじゃないのかな。」

「今日レッスン途中で滝さん怒って帰っちゃった。」

「ええ?!途中で?そりゃいくらなんでも酷いな。」

「あたしが悪いの。」

「いくら、悪いっていつても、声が出ない時だってあるよ。人間なんだから。」

「それじゃダメなの。常に同じリズムで歌えなきゃ、プロにはなれないの。」

「そりゃそうかもしれないけどさ。」

「いいの。どうせあたし、ダメ人間だから。」

「また、落ち込む。そうだ、とにかくこういうときはなんか食おう。おなかすいたでしょ。」

「すかない。でも、マーくんおなかすいたよね。でも、今日は外へ出たくない。」

「そっか、じゃあ、ピザでもとろうか。」

「うん、それでいい。」

そうして雅紀はピザを注文してくれた。

「とにかく、少しでも食べないと体力持たないから。ね。」

そう言われてピザを口に運んだとたん吐き気がしてトイレに駆け込んだ。

「お、おい、ミコ！大丈夫か？」

何も食べていないので胃液しか出ない。

苦しい、でも、吐き気は治まらなかった。

そして、その日から、ほとんど食事をできない状態になってしまった。

一週間で体重が5キロも痩せた。

常に顔色が悪く、デリヘルで客にまで心配された。

当然ミサキさんもかなり心配しておかゆとか持ってきてくれて食べさせてくれたが、それさえも受け付けなくなった。

心配した雅紀があたしを強引に医者に連れて行った。

「それで、ほとんど食事を口にできないってことですね。」

「はい。」

「どれくらいになります？」

「二週間くらいに。」

「そうですか。何か要因に思い当たることは？」

そう聞かれて応えるか迷ったが、あまり詳しくは話さず、簡単にあったことを話した。

「そうですか、じゃあ、学校でその講師とうまく行かなくなったことが要因だと思うわけですね。」

「はい、おそろく……。」

「じゃあ、解決策は明快ですね。その講師とうまくいけばいい。ど

うでしょう。あなたの方から、ちゃんと話をしてみてもいい？」

「・・・・・・・・・・。」

「つまり、何らかの形でその講師とコンタクトをとって、別の場所できちんと話してみるってことですよ。」

「別の場所ですか？」

「そう、おそらくその教室とかでは講師と生徒という立場で、どうしてもその壁がこわせませんから、主従関係を意識してしまいます。」

「

「・・・・・・・・・・。」

「でも、場所を変えて、そう、例えば、どっかのレストランとかでもいいです。食事ができなければ喫茶店とかでもいいですから、できるだけ主従関係が現れないような、二人にとっては非日常の場所がいいですね。」

「非日常的な場所・・・ですか。」

「そう、ちょっと例えは変かもしれませんが、男と女ですから、いわゆるデートスポットの港が見えるホテルのラウンジとか、なるべく落ち着いた雰囲気のある場所で、できれば夜の時間帯がいいかもしれませんね。」

「・・・・・・・・・・。」

「つまり、平たく言えばデートしてる雰囲気のある場所ってことですよ。」

「

「デートしてる雰囲気ですか。」

「そう、デートしてる雰囲気です。」

よくわからないアドバイスを受けて診察室を出た。

雅紀が心配そうに様子を聞いてきたが、詳しくは話さず、とにかく滝さんとちゃんと話すように言われた、とだけ伝えた。

滝さんに連絡をつけた。

医者言う、非日常的な場所といってもよくわからないかったので、滝さんに場所の選定は任せたら、滝さんのいきつけのホテルのラウンジに行くことになった。

「すみません。お呼び立てして。」

すでに滝さんはラウンジについて一杯飲っていた。

「いや、こういうところでちゃんと話すのも必要だろう。とにかくこれからのことをきちんと言さないとね。ところで何飲む？アルコールはダメなんだっけ？」

「あ、はい。アルコールはちょっと、一応まだ未成年ですし。」

「あははは、そっか、そうだな。未成年だったな。悪い悪い、じゃあ、何かジュースがいいかな。」

少し馬鹿にされた感じでカチンときたが、なるべく平静を装ってオレンジジュースを頼んだ。

滝さんはまだ笑っていた。

「ふう、そうだな。俺が剥きになりすぎたな。まだ、ミコは未成年だよな。俺とは14も歳が違うんだよな。」

滝さんの歳を初めて知った。

32歳？失礼だがもつと上かと思った。

雅紀の方が子どもっぽいかも。

「お、飲み物きたね。それじゃ一応、乾杯！」
よくわからなかったが、滝さんから言われてグラスを合わせた。

「プツ！あははは。」

再び滝さんが笑い出した。わけがわからない。
酔っているのか？

「あははは、ごめん、ごめん。ミコのきよとんとした顔がかわいく
てさ。」

なんだこの人は？いつものクールで物静かで厳しい滝さんの姿と
はまるで違う。

「いやさ、なんか、いつもの俺とは違うって思ってるんだろ？」

凶星だ。見抜かれてる。

「いいんだよ。そう、いつもの俺と違うよね。どっちが本当の滝
恒彦だと思う？」

恒彦っていうんだ。名前も初めて知った。

考えてみればあたしは滝さんのこと何も知らない。

ただ、講師とレススン生という関係以外ないから、プライベート
な滝さんをまったく知らなかった。

もっとも、先生なのだから名前くらいは知らなければいけないの
だが。

「俺はね、ミコ、この業界でもう11年やってる。大学出たての頃、
テレビ局のADから始めて・・・、そう、ADってわかるよな。俺
はこれでも国立大出てるんだよ。それなのにさ、専門学校卒のカメ

ラマンとか、ディレクターに怒鳴られて、散々いびられて・・・、でも、今はそいつらの上に立ってる。もっともそいつらには感謝してるよ。いじめてくれたおかげで『絶対こいつらを使う立場になつてやる』ってね。その思いが俺を支えてきて、今があるんだ。」

知らないことばかりだった。滝さんも苦労はしてきてるんだ。

なんか滝さんの人間的な一面を見た気がした。

「だからさ、ついレスン生には厳しくあたっちゃうんだよね。レスン生には俺を恨んでもらっていいって思ってる。俺を乗り越える気持ちが芽生えればそれががんばれるんじゃないかってね。」

「・・・・・・・・・・。」

「でもな、もう、二年前になるかな。俺ね。一人の有望な子を殺してしまったんだ。」

「え？殺した？」

驚いた。どういうことなんだろう。

この人は殺人犯？じゃあ、なぜここにいられるの？

「ああ、もちろん、直接殺したわけじゃない。俺がね、期待しただけに、今のミコ以上に辛く当たってしまったってね。そしたら、ある日突然田舎に帰るって言って、そのまま故郷に帰ってしまったね。」

「・・・・・・・・・・。」

「俺も期待はしてただけにがっかりだったけど、そんな根性のない奴はどうせデビューしても長続きしないと思って、あきらめたんだ。」

「・・・・・・・・・・。」

「そしたらさ、一月も経たないうちに親から連絡があつて。自殺し

たつて。」

ビツクリした。

それと同時に滝さんは、どうしてこんな話をあたしにしてるんだらうと思った。

「さすがに、驚いたし、とんでもないことを俺はしてしまつたつて思つたよ。親には詫びに行つたけど、門前払いだし、訴える時まで言われた。でも、そこまでは至らなかつた。どうしてだと思つ？どうして俺は訴えられなかつたと思つ？」

「……、わかりません。」

「その子の遺書が見つかつてね。そこには、『滝さんは悪くないです。弱い自分がすべて悪いんです。私が死んでも滝さんを恨まないでください。』つて書いてくれてたんだよ。」

「……。」

「それでね。俺は、どうしても少し優しくできなかつたのかつて、それまで後悔して、レッスンにも身が入らなかつた状態だったのが、一気に吹っ切れてね。再び「鬼の滝」に戻つたつてわけ。俺の育て方は間違つていなかつたつて。でも、それからただ怒鳴つたり叱つたりするのではなく、なるべくクールに接しようつて思つて、今の俺のスタイルになつてしまつたんだ。」

「あたしも……、滝さんは悪くないと思います。やっぱり、芸能界つて厳しいところですから、デビューしてから後悔しても遅いですから、先に厳しい思いをしておかないとダメだと思います。あたしも落ち込んで拒食症とかなつてるのは自分が弱いせいだと思つています。」

「拒食症？今拒食症なのか？」

「え？あ、はい……。」

「それは、今のレッスンのせいかな？」

「いえ、違います。レッスンは充実してます。さすがにこの前、滝さんに帰られた時はショックでしたが、理由は別にあります。」

「別の理由って？」

それからあたしは、堰せきを切ったように今までの生活、親のこと、学校のこと、雅紀のこと、あたしに関するすべてのことを滝さんに話した。

「ふう、ミコ、おまえは18だよな。」

「え？あ、はい、もうすぐ19ですけど。」

「おまえの過ごしてきた18年間は壮絶だな。俺なんかと比べ物にならない。普通の人間ならとつくに死んでも不思議ない。」

「あ、すまん。言い過ぎだな。ちゃんとミコは生きてるし、頑張ってる。」

「いえ、頑張つてはいません。まだまだ、です。」

「ミコ……。おまえ、えらいな。」

「いえ、そんなことないです。」

「いや、すごいよ。いままでのそんな生活を乗り越えて、まだ夢をあきらめていない。そして、その夢を現実にしようとしてる。そのエネルギーはどこから湧いてくる？」

「え？ん、よくわからないけど、歌が好きなんです。そして、あたしの歌で、誰か一人でも幸せになってくれたらいいなって。それだけなんです。あたしの歌を誰かに聴いてもらいたいんです。」

「歌が好き・・・か。純粹だな。」

「いえ、汚れてますよ。そのために色々してきましたし。親も裏切ってるし、友達や彼氏も裏切ってるし。」

「.....」

「正直、今あたしはいったい誰なんだろうって、わからなくなってるんです。“あたし”は誰？ いったい... どれがホンモノの“あたし”なの?... もう... わからなくなっちゃた...」

葵神子、高津神子、風俗嬢のあたし、ホステスのあたし、AV女優のあたし、どれが本物のあたしなのか、本当にわからなくなってるんです。」

「歌手のミコだろ。」

「え？」

「歌手のミコだろ。みんなに歌を聴かせる。みんなをその歌で幸せにする歌手のミコだろ。」

「滝さん・・・、ありがとうございます。そうなるように明日からも頑張ります。これからもよろしくお願いします。」

「ミコ.....」

そういつと滝さんはその手をあたしの頬にあてて、優しく包んだ。その滝さんの手に触れられている部分から次第に体中に熱が広がる感じがした。

そして、あたしと滝さんはそのままラウンジを出て、滝さんはあたしをホテルの部屋に誘った。

その時、あたしは雅紀への罪悪感はなく、それが当たり前のように

に自然と身体が動いていた。

「ミコ・・・、いいね。」

あたしは、ただ、俯いて滝さんに身を委ねた。
なぜだろう。

こんなにも簡単に、よくあるパターンに、はまってる自分が信じられなかった。

別に滝さんがプロデューサーだからとか、音楽学校の先生だからとか関係なかった。

一人の男として惹かれてしまった。

滝さんはあたしの身体を優しく包み込むとあたしの耳元から首筋そして、熱いキスをしてきた。

キスをされながら頭の芯がポーンとしてきて、そのまま意識が遠のく感じがして、ただ、ぐったりと滝さんの思うがままになっていた。

気が付いた時にはすべてが終わっていた。

ベットの傍らで滝さんが煙草に火をつけていた。

見つめているあたしに気づいた滝さんはにっこりと笑った。

「ミコ、一緒に頂点を目指そう。」

最高に幸せな気分になった。そして、涙が溢れてきた。

エピソード17：別れ、そして旅立ち

今日は久しぶりに雅紀とのデートだった。

あの、滝さんとの日から、数日後、あたしは雅紀の家を出た。

雅紀には親が独り暮らしを許可してくれて金を出してくれるようになったと嘘をついたが、本当は滝さんが保証人になってくれてレッスン場に近い中野に部屋を借りてくれた。

最初、雅紀は反対したけど、あたしの夢のことをわかってくれたから、何とか折れてくれた。

それから3ヶ月が過ぎようとしていた。

部屋を出てからも雅紀とは会っていた。

ちゃんとデートをしていたし、体の関係も続いていた。

でも、どことなく雅紀もあたしの様子が変わってきたことは気づいてきたようで、少しずつだが、身体は求めなくなってきた、キスする回数も減った。

何かを感じている、いや、あたしが感じさせているのだろう。

雅紀も離婚という辛い別れを経験しているのだから、女の態度の変化には敏感なのだろう。

少しずつ会う間隔も伸びていて、今では2週間に一度会えばいい方だった。

だから、よけいに今日のデートは憂鬱うゆうだった。

「今日いわなきやね。」滝さんからの念押しという言葉「うん」と、ただただ頷うなずくしかなかった。

雅紀との別れを切り出す日。

こんな日に限って絶好の晴天、12月とは思えない暖かさ。むしろ半袖でも外を歩けるくらいだ。

やっぱり地球は病んでいるのかな。

異常気象が今年は特に多かったし。

でも異常なのはあたしの心の中だ。

あんなに…2年もの間、あたしに尽くしてくれた雅紀をこんなに簡単に裏切ろうとしてる。ほんとにヒドいやつだ、あたしは…。

しばらくして雅紀が待ち合わせ場所に来た。

「よう。」

普通だった。

でも、いつもきたらすぐに手を繋いでくれるのに今日はあたしが雅紀側の手からかばんを持ち替えて空けても、ちっとも握ってこなかった。

何となく気持ち宙に浮いたまま、おざなりにウィンドーショットピングをした。

いつもは服を見ながらあーでもないこーでもないと、会話を交わすのにどこかお互いに上の空うわのそらで、二人の間に見えない壁を感じた。

「そろそろ飯でも食おうか？」

時間はまだ5時を少し回ったところだったが、雅紀が朝から何も食べないからと言われ、あたしもそうだと応えて店に入った。

食事中少しずつだけどいつもみたいに話ができるようになってきて自分の近況を話した。

受け応えしてくれる表情がいつもの雅紀に戻っていた。

いつもたくさん食べるあたしが「ダイエットだから。」と少し残した時に「またうちに帰って食事するのかな？」と意味深なことを言われた。

言ったあとに雅紀もしまったと思ったのか急に話さなくなった。

一呼吸おいて雅紀から「そろそろ出ようか。」と言われ店を後にした。

しばらく道を歩きながらとりとめのない話をしていたが、少しかだけ空気が冷たくなってきたので今度は喫茶店に入った。

窓際のカウンター席に並んで座った。

「滝さんと付き合ってるの？」

“きた”

「うん……めんね。」

「いつから？」

「三ヶ月くらい。」

「俺の質問にあまり驚かないね？」

「うん…いつからわかってたの？」

「千葉に来なくなったこととライブの帰りが遅くて「滝さんに送ってもらった」っていつも言ってたところからかな。」

「勘…いいよね。」

「ミコの嘘が下手なんだよ。」

雅紀が笑いながら言った。少し緊張がほぐれた。

「ごめんね、でも、きちんとケジメをつけなきゃ、滝さんにもまーくんにも悪いし…だから、はっきりしないとって思ってた。」

「いつから好きになったの？」

そう聞かれてとまどった。

「いつからだろう…三ヶ月前のある日から…急に彼に惹かれていて…。」

「そういうもんだよね、恋愛って…いつからなんて決められないよね。」

やっぱりここでも雅紀はあたしの理解者だった。

「うん…。」

「一緒にミコんちに住んでるの？」

「ううん、でも、半同棲かな…。」

「ふう〜。」

雅紀が大きなため息をついた。

「それで……俺とは別れるの？」

「うん……まーくんのごときは好きだよ。でも……。」

「お父さんのよう？」

「うん……。」

「娘ならいつか嫁に行くか……。」

「嫁になんかいかないよ。」

「ばーか、例えだよ。」

「わかってるよ。」

「ははは。」

「えへへ、でもね。本当に今でもまーくんは大切な人だよ。身内つて言うか、家族つて言うか、だから離れたくはないの。都合が良すぎるよね。」

「うん、かなりね。でも、俺もつすすは勘付いていたよ。滝さんに惚れる前から、俺とは距離を置こうと考えていたよね。」

「うん……。」

「指輪もしなくなったし、何よりえつちを避けるようになったしね。」

「……。」

「それで、心が少しずつだけど、今までとは違う、離れていつてななって感じてた。」

「わかった？」

「わかるよ。ニコみたいに鈍くないし。」
「ひどい……。」

「ははは、でも、俺もいつか言っただよ。俺たち親子みたいだねって、歳から言ってもそのの方が自然なくらいだし、関係も本当に“身内”って俺自身も感じてたよ。」

「そうなんだ。」

「うん、でも、身内だから離れることはないよ。」
「えっ？」

「離れる気はないってこと。恋人としては終わったとしてもね。」
「まーくん……優しいね、最後まで……。」

「最後とか言うなよ。別に終わりじゃないんだから。」
「ありがとう。あたしの我儘わがまま聞いてくれて。正直、滝さんのことは好き、たぶんまーくんより恋愛感情がある。でも、滝さんにはまーくんみたいに我儘は言えない。遠慮もあるし、何でもまーくんのと
きのようにぶつけることはできないんだ。」

「それが恋愛つてもんじゃないの？俺たちは距離が近すぎたんだよ。なんせ親子だからね。」

そういつて雅紀は笑ったが、その横顔はどこか寂しげだった。

「ありがとう、まだ、これからも色々相談に乗ってもらったりはするかもしれないけど、ここで、ケジメつけるね。彼氏彼女としては今日で終わり……いいかな？」

「ああ。」

短くそう言っつて、雅紀は深く煙草の煙を吸って吐き出した。

駅に着いて、改札を抜けるとそこからは別々のホームに分かれる。

「気をつけてな。滝さんによろしく。」

「うん、まーくんも気をつけて、また、メールするね。」

「うん、でも、あまりメールとかしていると滝さんやきもちやくんじやない？」

「そうだね。自重する。」

「なんか、寂しいけどね。まあ、何かあったらいつでも言ってくるよ。」

「うん、ありがとう。」

「じゃあな。また！」

そういつて雅紀はホームへの階段へと向った。

こちらを振り向くことはなかった。

「じゃあ・・・また。」

この声は雅紀には届いていない。

ほんの一瞬「本当にこれでよかったのだろうか？」と考えてしまった。

でも、きつと正しいと信じなければ、これからの自分の夢を果たすために、新しい自分に出会うために、あたしは自分で選んだ道を行かなければ。

帰りの電車の中でそう思うことにした。

あたしはあたし、昨日まであたしは誰なのかが自分でわからなかった。

さくら、しいな、チサト、さやか、そして神子。

「あたしはあたし」今ここにいるあたしがあたしなんだから。

それがあたしなんだから。

絶対にあたしは夢をつかむ。

エピソード18：エピソード

1年後

夜中の湾岸を走る1台の車。

「あーあ、なんだか眠くなってきた。」

「やだあ、居眠り運転とかして、事故らないでよ。」

「はいはい、大事な姫を乗せてますからね。せいぜい気をつけます。」

「もう・・・ねえ、CD飽きたね。ラジオ聴こうか？FMかけてよ。」

「ラジオ？うん、これでいい？」

「あ、この曲、あたし好き！」

「あー、流行ってるよね。いい声してるよね、この」。」「

「そうそう、最近デビューしたんだよね。えっと・・・ニコ、葵三
コだったよね。」

「そう、確かそうだよ。不思議と落ち着くよね、この声。」

「うん、なんか、いい感じ・・・癒される。」

「そうだね。」

車のテールランプが、赤く長い尾を引いた。

エピソード18：エピソード（後書き）

長いことかかりましたが、完結です。多くの方に読んでいただいて感謝です。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8267d/>

あたし

2010年10月8日14時13分発行